扉外に佇立つて、頻りに呼吸を逸ませてゐたが、扉内ではラスコーリニコフが、『必ず肥胖した大々した奴に違ひない、』と考へて思はず手斧の柄を握つた。恰で夢のやうな氣がしてゐた。

扉外の男は軈て強く呼鈴を引いた。何でも誰だか扉内に在るやうに直ぐ感づいたらしく、數秒時耳を傾けてゐたが、軈て復た引いて返事を待つた。が、音も香もないので焦れッたくなつたと見えて、唐突り力一杯に扉の引手をガタ〳〵搖ぶつた。

扉内ではラスコーリニコフは閂がガタ附いて外れさうなのを見て氣が氣でなく、堪りかねて押へようとしたが、押へて氣取られてはなるまいと手を引込めた。頭腦が再びヅキ〳〵して來た。『堪らん、寧そ降參だ！』と心中弱音を吹出したが、其途端知らない男が沈默を破ると忽ち元氣を恢復して來た。

『オイ、如何しやがつた、睡ちまやがつたか？　ヤイ、首でも縊められやがつたか？　剛突張奴！』と咽喉から出た太い聲で叫つた。『ヤイ、アリョーナの猫又婆！　リザラータの三平二滿！　――ヤイ、開けて呉れ、開けねエかい

……畜生！　尙だ睡やアしめエがナ？』

と肝癪紛れに十遍も呼鈴を牽き、精一杯の大聲で叫りつけた。其の容子が確に初めての客で無く、之まで度々來つけてゐる人のやうだ。

すると同時に輕い急ぎ足の跫音が階段から聞えて、又一人此四階へ來るものがあつた。ラスコーリニコフは新手が又一人加はつたのを初めは氣が附かずにゐた。

『オイ、誰も在ないのか？　一人も在ないッて奴があるもんか？』と快濶な高聲で、猶だ荷厄介に呼鈴を引いてる男に向ひ、『やア失敬！　コッホ君』

『復た誰か來た。聲で判斷すると、今度は若い男だナ。』とラスコーリニコフは直ぐ考へた。

『人を笑かしやアがる。先刻から錠前が壞れッちまふ位ガチ〳〵やつてるんだ、』とコッホと呼ばれた男は、『君は誰だ――何處で俺を知つてる？』

『何を云つてる。一昨日、ガンブリヌスの玉突場で、君と三ゲームやつて勝つた男ぢやないか。』

『違エねエ、然う〳〵。』

『眞個に在ないンかネ？　變ぢやァないか。此奴ァ笑止しいぜ。あの婆さんが何處へ行くもんかナ。是非相談があつて來たんだ。』

『俺もだ。用があつて來たんだ。』

『さァ、如何しよう？　仕方が無い、歸るンかナ。實は金を借りに來たんだけれどナァ、』と若い方は云つた。

『仕方がねエ、矢張歸るんだナ。だが、解らねエ老婆ぢやねエか。手前の方から時間を定めて約束して置きながら、忌々しい老婆だナ。歸るッたッて俺の家は遠いから方がつかねエ。元來何處へ行きやがつたんだらう？　解らねエナ。年中尻を腐らして横杆でも動かねエ老婆が、今夜に限つて浮れて飛出しやがるてのは餘程解らねエナ。』

『家番に訊いて見ようか？』

『何を？』

『何處へ外出けて、何時歸るかッて？』

『ふムふッ、笞棒め、訊いたつて仕樣が無ねエ。何處へ行くもんか、』と復たも引手をゴト付かせながら、『畜生、仕樣がねエナ……歸るより外仕樣が無エや。』

『待ち給へ、』と若い方は偶つと氣が付いたやうに、『ホラ、宜いかネ、引手を引張るとガタ附くよ、君は氣が付かんかい？』

『夫れが如何したんだ？』

『如何したッて、扉のガタ附く處を見ると錠が下りてるンぢやない、門を挿してあるんだ　ホラ、ガタ〳〵音がする。』

『なァるほど。』

『ね、解つたらう。誰か一人家に在る證據だ。二人とも外出けたなら外から錠を卸して行く筈で、室内から門を挿してある理由が無い。ソラ、此通りガタ〳〵音がする。宜いかネ、そこで門を挿してある以上は誰か室内に在なけりやならん筈だ。在るには違ひないが、何か其處に道理があつて扉を開けんのだらう。』

『なァる程。君の言ふ通りだ！』と呆氣に取られたコッホは、『在る、在る、慥に在る、』と復た激しく扉を搖ぶつた。

『止し給へ、』と若い方は言つた。『其樣なに扉を搖つても仕方が無い。必ず何か變事がある。君が力一杯に呼鈴を鳴らす、扉を搖る。夫れでも返事がないッてのは、尋常事ッちやァ無い。事に由ると二人とも死んでるのかも解らん。でなけりや……』

『何だと？』

『小田原評定してゐたつて初まらない。夫れよりか君、家番を呼んで調べるが一番早い。』

『其奴ァ宜からう、』と云ひつゝ、二人は一緒に階段を下り掛けると、

『待ち給へ、』と若い方は、『君は先ァ待つてろ。僕が呼んで來るから。』

『何故俺だけ待つてるんだ？』

『どんな事が初まらんとも限らんから！』

『よゥし、合點んだ！』

『序に警察官も呼んで來よう。何でも尋常事ッちやァ無い。非常な變事が起つたに相違ない。明白とも、明…白…とも！』と若い男は意氣込んで捨臺詞を殘しつ、周章臭つて階段を降りて行つた。

取殘されたコッホは復た呼鈴を鳴らして見た。が、今度は極靜かに引いて見た。で、分別ありけに扉の引手を握んで先づ右へ、夫れから左へと廻して見て、愈々門が挿してあるばかりなのを確めてから、喘々呼吸をしながら小腰を屈めて鍵穴を覗いて見た。が、內部からは穴に鍵を入れて何にも見えないやうになつてゐた。

此方は扉の一方に立つてるラスコーリニコフ、双手に手斧を握詰めて無我夢中に、今にもあれ二人が部屋の中に闖入して來るが最期、唯一と擊にして呉れんと待搆へてゐた。が、二人が扉を叩いたり相談したりするのを洩聞いてゐて、座がらにして手を拱いて待つてるよりは、寧そ思切つて飛出して二人とも手斧の錆にして呉れようかと思つたのも一度や二度で無かつた。が、恁うしてゐる間に何とか欺瞞して追返して了ひたいやうな氣も度々した。『早

いに如かずだ！』と考へては又躊躇してゐた。

『畜生、如何しやがつた！』と何時まで待つても誰も來ないので、コッホは徐々焦れ初した。

『畜生、何をしてやがる！』と再た呟きつゝ、愈々待ち草臥れたので、部屋番の大役を忘れて、若い男を索しに四階を降りて行つた。重くるしい靴音が段々遠くへ消えて了つた。

『占めた！　さッ、如何しよう？』

ラスコーリニコフは閂を外して扉を二三寸排け、四邊の寂然してゐるのを見澄まして、吻と息を吐きつゝ、考へる間もあらばこそ、廊下へ飛出して靜かに扉を閉め、急いで五六段を降りかけると、忽然直ぐ下でガヤ〳〵大騒ぎが持上つた。さア、隱れなければならぬが、隱れたいにも隱れ場所がないので、復た急いで駈登つた。

『やい、首を縊めッちまへ！』と叫びながら何の部屋からか男が飛出して、足の續く限り階段を駈下りつゝ、『ミトレー！　ミトレー！　ミトレーのとん

ちき奴！』

此の叫き聲の果は段々遠くへ消えて、最う既くに家外へ行つて了つたらしく、再び以前のやうに寂となつたが、一ッ騒ぎが鎭まれば復たお代りの騒ぎが湧いて來た。今度は多勢一緒に高聲で罵りながら階段を昇つて來るやうで、確かに三四人の其中に聞覺えのある若い男の甲高聲が交つてゐた。

『先刻の奴等だナー』と思つたが、迚も最う遁れッこは無い。寧そ度胸を据ゑて階段で摺違はうと決心し、『如何なるもんか、成るやうにしか成らんのだ。押へられたら百年目だが、見免されても矢張同樣、摺違つて一度顏を見られたら最う忘れッこは無からう。が、儘よ、當つて碎けろ、』と覺悟を定めて降りて行つて、アワヤ今一階段で出會はうとした途端――偶つと逃路が發見かつた。ツイ五六歩離れて右側の部屋の扉が開放しになつてゐた。往きがけに見掛けたペンキ屋が仕事をしてゐた部屋で、倖ひ誰も在なかつた。唯つた今叫び散らして戸外へ駈出したのが確にペンキ屋であつて、床板は今塗つたばかりで、部屋の中央に道具を散らかしたなりに、小さな桶とペンキを入れた

素焼の壺と大きな刷毛とが轉がつてゐた。

ラスコーリニコフは眼を瞬つかせながら素早く此の空部屋に滑り込んでピタリと壁に身を押附けて隱れた。其時早く、間髪を容れざる際に一群の强敵は此の部屋の前を素通りして互に高聲で咄しながら四階に昇り初めた。最う大丈夫と時間を計つて、秘と爪尖立ちで忍び出し、逸足出して駈下りた。階段には誰も在なかつた。表口にも誰も在なかつた。首尾よく戸外に飛出してから一と息入れ、街路へ出て復た一と休みして直ぐ左へと折れた。

今頃渠奴らは老婆の部屋へ行つて、唯つた今まで嚴重に鎖鑰のしてあつた扉が開いてゐるのを見て喫驚してゐるだらう。眼に見えるやうだ。『渠奴等は死骸を檢視してゐるだらう。渠奴等が昇つて來る間に兇行者が首尾よく逃終せたと直ぐ考へ付いたらう、事に由ると階段を昇つて行く最中二階の空部屋に潜んでゐたと感附いたかも知れぬ。』と恁んな事まで考へてゐながら、最初の曲り角までは尙だ五六十間もあるのに格別急がうともしなかつた。

『假に若し何處かの門内か路次口にでも忍んで五六分間も待つて見たら何樣

なもんだらう？　不可、其樣な馬鹿な事をする奴があるか。夫れぢやア何處かに手斧を捨てゝ行くかナ、夫れとも辻馬車に乘つて直ぐ歸るかナ？　不可、不可、斷じて不可』

軈て狹い横町へ來て、活きてる空はなく死んだやうになつてコソ〳〵と曲つた。髮まで來れば最う安心、減多に怪まれる心配はないやうなものの、矢張雜沓に紛れ込んでゐた方が却つて人目に着かんで愈々安心だが、扨て一大事を行つてのけた身の勞れが出て、足元もシドロモドロに玉の汗がボタ〳〵前額から滲出して、頸筋がベト〳〵して來た。

『大將御機嫌だナー』と運河の堤へ來た時、通り縋りの男が泥醉人と誤認へて聲を掛けた。

恁うなつては何をしてゐるのか自分にも解らなくなつて、行けば行くほど段々頭腦が朦朧と減茶苦茶になつて了つた。軈て只ある荷揚場へ來て、唯つた二三人しか人が在なければ在ないで、如此なに淋しくては却つて人目に着くかも知れぬと恐れて、直ぐ再た通りへ戻つて來た。で、一歩踏出す力さへ

何うか恁うかのくせに、故と迂廻をして漸つと下宿に辿り着いたが、閾を跨いてさへ尙だソワ〳〵と沈着かれないで、愈々階段を昇りかけるまで手斧の始末をつけるのを全で忘れてゐた。が、ラスコーリニコフの目算は頗る眞面目なもんで、人目に掛らぬやうに持出した以前の部屋に其のまゝ竊と還して置かうといふ腹だ。能く〳〵自分の身の上を考へる事が出來たなら、こんな險呑な所爲をせずとも何處か他の家の構内へでも投込んで了つた方が遙に安全であつたらうに。

が、運よく危ない目に會はなかつた。家番の部屋の扉は鎖鑰がしてなかつたが、閉つてゐるから外見には如何しても人が在るらしく見えた。が、ラスコーリニコフは其樣な分別もなく、前後の考へなしにツカ〳〵と行つて無造作に扉を排けた。此鹽梅では若し家番が在て、『何御用？』と訊いたら、何の氣もなく直ぐ手斧を渡して了つたかも知れぬ。

が、倖然と前同樣に家番が在なかつたので、首尾よく以前の持出した場所卽ち腰掛の下に秘と置いて來た。夫れから階段を昇つたが、其の途中誰にも

會はず、主婦の部屋さへ珍らしく閉つてゐたので、難なく自分の部屋に戻る事が出來た。で、例の通りドツカと寢欄に倒れて了つたが、睡るでもなく睡ないでもなく、半分現で轉がつてゐた。此時若し誰でも眼の前に現れたなら、必ず跳上つて大聲擧げて叫いたかも知れぬ。頭腦はグラ〳〵して夢のやうな考が入亂れ、何としても一ツ考への筋を辿つて行く事が出來なかつた。

第二編

第一回

ラスコーリニコフは可成長い間、寢榻に横臥になつてウト〳〵してゐた。時々半睡から攪めては、段々夜が更けて來たのに氣が付いても起きる氣にならなかつた。其中に徐々白み掛つて夜明け近くなつても、氣拔けがしたやうにボカンと仰向いたなりになつてゐた。が、毎朝此刻限に聞き馴れてる喧ましい物音や人聲が下の道路から聞えると、パッチリ眼を明いて、『あッ、三時だナ、居酒屋歸りの醉漢が通るワイ、』と、誰かに引攫り起されでもしたやうに我破と跳起き、『何時の間にか二時を過ぎて了つたナ、』と云ひつゝ寢榻の端に腰を掛けたなりに、今までの事を考へると、一時に何かが彼もあり〳〵と心に浮んで來た。初めは氣が狂れたんぢやァ無いかと思つて、總身が總毛立つて來た。が、此の惡寒は全く睡眠中に熱發した爲で、齒の根が合はずにガタ〳〵して、四肢の爪尖までがブル〳〵顫へ出した。

で、突と起つて戸口に行き、扉を排けて四邊の容子を聞澄ますと、全家が寂然してゐた。が、俄に愕然と悸えるやうに身を飜して部屋の隅々を見廻したが、能く先ア昨宵は無事に歸つて來られたもんだ、シカモ戸鎖の閂も挿さないで、シカモ着のみ着のまゝ着更へもしないで、能く先ア平氣で轉がつて臥られたもんだ。帽子を被つてゐないのが目附物で、そら其處に、部屋の中央に轉がつて落ちてゐた。

『他人が入つて來たなら何と思ふ？　唯醉つてるとのみ見て呉れようか。』

軈て窓へ行つた。最う大分明るくなつてゐた。頭から足の先きまで全身を見て、衣服に血痕がありはせぬかと吟味した。が、恁んなチョロッカな見方では安心ならぬから、ガタ〳〵慄へながら衣服を脱いで、眼を皿のやうにして何處から何處まで念入に、愈々確に安心出來るやうにと、三度まで繰返して丁寧に驗めて見た。外には何にも無かつたが、洋袴の端に血が三四滴凝結り付いてゐた。大分摩り取れてはゐたが、大きな小刀を持つて來て盡く切取つて了つた。

其時偶つと氣が附いた、昨夜老婆の許から奪つて來た巾着や其他の品が猶だソックリ衣兜に入れて置いたまゝだつた。頭で衣兜から出して匿して了はふといふ氣が無かつたので、眞個く衣服を檢めてる最中も衣兜に贓物が入れてあるといふ考が微塵も浮んで來なかつたのだ。こんな馬鹿げた事があらうか。と、卽座に殘らず攫み出して卓上に積み、愈々何にも殘つてゐないのを見究める爲め衣兜を裏返して見てから部屋の隅へ持つて行き、丁度壁紙が破れて垂下つてるのを幸ひに其下の穴に悉く押込んで了つた。

『之なら見えッこはない？』と安心して滿足したが、何の氣もなく茫然と瞻めてゐると、壁紙が以前よりは脹れてゐるのに偶つと氣が付いて、俄に恐ろしくなつて慄へ上つて了つた。『餘程俺は如何かしてゐる。險呑、險呑！』と絶望して、『之でも匿した意かい？　之が物を匿す法かい？』

全くラスコーリニコフは贓品の始末に思ひ及ばなかつた。本と〳〵金子を取る意しか無かつたから、寶石類の匿し場所は頭から工風して置かなかつたので、『之ぢやア少とも安心してゐられない。之が物を匿す法かい？　餘程俺

は茫然してゐる！』

と思つたが、再び疲勞して寢棚にゴロリと倒れた。すると、復た一とし胴震がして來たので、古ぼけた學生外套を機械的に引寄せて、スツポリ被つて暖まると、忽ちウトウトして、不意グツスリと熟睡んで了つた。が、五分經つか經たない中に我破と跳起きて、手足を腕いて衣服に獅嚙附き、『何にも支度をしない中に能く睡て了へたもんだ！　何にも支度がしてない、上着の裏に縫ひ付けた環が猶だ其儘になつてゐて、動きの取れない立派な證據になつてゐるのを全然忘れてゐた——』と、直ぐ引斷つてズタ〳〵に引裂いて枕の下の襤褸の中へ圓め込んで了つた。

『こんな襤褸なら豈夫疑問の種子になりもしまい。左に右く俺には然う思はれる。』

と繰返し獨語ちて部屋の眞中に蟲立ち、何から彼までが氣になつて來たので、一心に四邊に眼を配つて、最う忘れた事は無いかと、十分確めて安心したかつたが、情ない哉、一切の記憶は魯か、苟且の身の謹愼さへ失くなつて

了つたやうな氣がして安心が出來なかつた。

『最うそろ〳〵罰が當り初めたんだナ？　眞個、眞個！　罰だ！』

成程、唯つた今切棄てた洋袴の端片が部屋の中央に落ちてゐて、イの一番に來る人の眼觸りになつてゐるのさへ氣が付かずにゐた。

『俺には全體、物の分別が附くのか知らん、』と茫然と狐に魅まれたやうな鹽梅式に聲を揚げた。

其途端、妙な考が頭に起つた。事に由つたら衣服が悉く血塗れになつてるのだが、自分の感覺が失くなつて了つてるから解らんのぢやないか知らん、とも思つた。其跡から直ぐ氣になり出したのは巾着で、必ず血が着いてゐたに違ひないから、衣兜の中も矢張血だらけかも解らぬ、と思つて衣兜裏を捲つて視ると、案の定、其通りだつた。

『俺は最う理解力に見離されて了つた。自分で自分が解らなくなつちまつた。駄目だ、駄目だ！——が、然う見限つたもんでも無い。全く衰弱してゐるからだ、逆上してゐるからだ。暫らくすりやア必ず復た回復る。』

と云つて衣兜裏を引裂いて了つた。此時、旭日が射込んで左の靴を照すと、血痕どころか、血だらけであつた。

『血溜に踏込んだと見える。さア、如何しよう。此の靴、此の衣兜裏、此の襤褸、何處へ持つて行かう？』と、證據を集めて部屋の中央に蠢立つたまゝ考へてゐたが、

『むゝ、煖爐！　燒いて了ふに如かず、だが、不可、不可、燐寸がない。では棄てて了ふかな。其事、其事！』と頷きつゝ寢榻に腰を掛け、『そんなら卽時、片時も猶豫せず、少とも早く。』

が、――と思つたばかりで、頭は何時か枕の上に落ち、再びゾッと寒氣立つたので、不意外套を被ると其儘再び睡て了つた。何でも數時間も經つたやうな氣持がして、度々起きては急いで此の證據物を棄てに行かうと、思ふ事は思つても、恰で寢榻に縛しつけられたやうに、如何しても起きられなかつた。すると、突然戸を敲く音がしたので、ムックと起上つた。

『排けて頂戴な。』とナスターシャの聲で、『犬ウみたいに何時までも寢てゐる

もんぢやなくつてよ。十一時になるワ。』

『在ねエンだぜ。』と云ふ男の聲がした。

『家番の聲だナ。何しに來たんだらう？』と、ラスコーリニコフは起直つて耳を欹てた。既う動悸がドキ〳〵して來た。

『在ない事はないワ、誰が門を挿すもんかネ？』とナスターシャは、『ね、排けて頂戴なッてば。』

『既う露顯したかナ？』とラスコーリニコフは烏渡起つて閂を外すと、直ぐ復た寢榻に倒れて了つた。忽ち其前に蠢立つたのは家番とナスターシャで、ラスコーリニコフが落膽した顏をしてジロリと家番を見たのをナスターシャは又妙な顏をして見た。

『貴君ン許へ役所から呼出しが來てゐます。』と家番は云つた。

『何處の役所から？』とラスコーリニコフは胸騷ぎした。

『警察から。』

『警察から？　何で？』

『何だか知りませんが、呼出しが來たんだから出頭なさい、』と家番は氣の毒さうに下宿人を瞻視めつ歸らうとした。ラスコーリニコフは顧盼きもしないで、召喚狀を封のまゝ握つて了つた。

『然うしてらッしやいよ、』とナスターシャは寢榻に仰向けになつてるラスコーリニコフを見つゝ、『病氣なら行かなくたつて宜いワ。何ですエ、貴郎の手に持つてるのは？』

と云はれて氣が付くと、洋袴の端片と靴と衣兜裏とを一緒に右の手に掴んでゐた。恁うして一心に始末を考へながら不意うと〳〵と睡て了つたのだ。

『そんな襤褸をお寶物か何ぞのやうに大切さうに抱へて眠て了つてサ、』とナスターシャはお腹を抱へて苦しさうに笑つた。

ラスコーリニコフは急いで此の襤褸を上衣の下に秘してナスターシャを睨と瞻視めた。少しく腑に落ちかねる氣がしないでもないが、罪人と決つて逮捕されようと云ふ者に對つて恁んなロの利き方を豈夫すまいと思つた。『そんなら夫れで、何しに警察から呼びに來た？』

『欲しい物があるなら仰しやい。貴君は爰に在らッしやい、妾が取つて來て上げるから。』

『イヤ、俺は出掛ける、直ぐ往つて來る、』とラスコーリニコフは立ち上りながら云つた。

『然うー』とナスターシャは家番の踵から去つてしまつた。其後影が見えなくなるや否、ラスコーリニコフは明處へ飛出して、能く〳〵靴を驗めると、血痕が有るには有つても、泥塗れになつてゐて判然しなかつた。恐らく誰にも識別ける事は出來まい、ナスターシャが現に解らなかつたぢや無いか。と思ひつゝ顫へる手で召喚狀の封を切つて見ると何でもない。今日九時三十分に其區の警察署へ出頭しろと云ふ簡單な尋常一遍の通知書であつた。

『だが、何故今日てのだらう？』と叫んで忽ち、『主よ、願くば速に終らしめ給へ、』と跪いて祈禱をしようとしたが、其途端、俄に笑止しくなつて笑出した。『俺は俺自身に依賴せにやならん、祈禱なんぞ、』と素早く服を着直して、『此靴を穿いて行くかナ？』と首を傾けて、『少とも早く棄てゝ了つて總ての證

跡を堙滅せにやならん、』とも思つて見た。そんな事を思ひながらも矢張穿いた。が、穿きは穿いても、恐ろしくなつて棄てゝ了はふとした。ドゞの結局が此靴一足限なのを憶出して、我ながら笑止しくなつて復た穿直した。顏色が再び深い絶望の色に變つて、四肢が段々顫へて來た。『力業をした爲ぢや無い、恐怖心からだ、』と思つた。頭腦はグル〳〵眩暈がして、顆顆がピク〳〵脈を打つて來た。

● 階段の中途まで來て、賊品が一切壁の穴に秘してあるのを憶出し、若しか不在中に搜索されやしまいかと、氣に掛つて佇立つて考へた。が、恁ういふ失望は、皮肉とでも云へば、云はれさうな妙な鹽梅式で、高を括つて合點しつゝ戸外へ飛出した。儘よ、如何なるもんか、早いが勝ちだ。

戸外へ出て見ると、例の通りの堪へ難い溫氣と、塵埃と、千鳥足で徜徉く泥醉漢とに邂逅つた。日は熬りつくやうに煌々して眼が眇れさうだ。頭腦は熱のある時のやうにキリ〳〵轉つて來た。で、前の日に通つた曲り角まで來ると、件の家の方角を張裂くやうな心持でジロリと見たが、直ぐ眼を外らし

て了つた。

『若し訊問を受けたら、場合に由ては屑よく自白して了はふ、』と獨語ちつゝ警察署の方へと曲つた。最う遠くは無い、直ぐ其處の新らしい家の四階である。廣場を通つて、右方の階段を見ると、帳簿を持つて昇つて行く人があつた。が、『爰だ、爰に違ひない、』と思つて、訊かうともしなかつた。

『直ぐ跪いて、潔よく自首して了はふかナ、』と口裡で云ひつゝ頗る急な狹い階段を昇つて行つた。二階も三階も何の部屋の包厨の扉も階段に向つて開放されて、呼吸の塞るやうな氣持の惡い饐えた臭氣を吐出してゐた。目指す警察署の入口も開いてゐたので、突と入ると、多勢の人民が玄關口に控へてゐた。何とも解らぬ異臭がするだけでも堪らない上に、塗り立てのペンキがブン〳〵して氣が遠くなりさうだ。暫らく休んでから、次の間の天井の低い狹い室に入らうとしたが、誰一人顧盼いて見るものも無いので、ヤキモキして奥を見ると、五六人の書記が忙がしさうに書物をしてゐたから、一人の座席を目掛けて突と進んだ。

『如何いふ御用です？』とラスコーリニコフは召喚狀を出して見せた。

『君は大學生だつたナ』と云つて召喚狀をジロリと見た。

『はア――之まで大學生でした。』

書記は横目でジロリと見ただけで、格別妙な顏もしなかつた。此男は頭髮をボサ〳〵亂して、一向表情の無い顏をしてゐた。

『此奴には何にも解らんナ、』とラスコーリニコフは思つた。

『彼方の書記長の許へ行つてお聞きなさい、』と更に奥の室を指して云つた。

爰にも多勢の人民が控へてゐて、其中に婦女が二人在た。一人は憫然らしい喪服を着て、書記長の書卓の傍で口授するのを筆記してゐた。最一人は肥胖した品格の好い婦人で、リウと着飾つて、小さな皿ぐらゐもある胸飾を着けてゐた。誰か待合せてゐるやうで、隅の方に立つてゐた。

ラスコーリニコフは束々と進んで書記長の前に召喚狀を差出すと、一寸つと書面を見てから、『暫らくお待ち、』と云ひつゝ喪服の婦人との交渉を續けてゐた。

『此奴も何にも知らんナ、』と思ふと幾何か氣が輕くなつて、次第に少しづゝ心が平らになつて段々沈着いて來た。『こんなに戰慄するなんて、何て俺は馬鹿だらう！　既の事殘らず排出しちまう處だつた。が、排出すと云やア此室の空氣を排出さんけりや不可んナ。むゝむとしてゐる。』

頭腦も感覺も全で旋風のやうにグル〳〵廻轉つて、奇妙な感じが總身を這ひずり廻つてゐた。で、自分を支配する力が全で失くなつて了つたやうな氣がするから、全く新らしい別なものに嚙り付いて度胸を据ゑようとしても、矢張沈着かれないので、今度は氣を轉じて書記長の心を讀まうと其顏を眤と瞻視めた。齡は二十二ぐらゐであらう乎、色は黧く、狡持らしくて、齡よりは老けて見えた。流行の凝つた服裝をして、指環をコテ〳〵穿め、太い金鏈をダラリと胴着に下げてゐた。折々居合はす人たちと頗る立派な佛蘭西語で一言二言口を利いてゐた。

『ルイザさん、お掛けなさい、』と猫撫聲で小粹な服裝をした女に云つた。此女は直ぐ傍に椅子があつても掛けさうにもしなかつたので。

『有難う、』と女は獨逸語で丁寧に會釋して、絹の衣服をさら〳〵と鳴らしながら腰を掛けた。

喪服の女が漸く用を濟まして歸り掛けた時、立派な風采の警察官が、歩く度毎に妙な風をして肩を搖りつゝ、靴音高くガタ〳〵と入つて來た。小粹な女は急いで席を飛び退いて、腰を屈めて丁寧に會釋したのを、見向きもせずに卓子の前の安樂椅子にドッカと腰を卸した。此區の警部補で、赤い頰髯をピンと跳ねて、多少の屈托があるらしい外には何にも特色の見えない顏る小さな顏をしてゐた。突然ラスコーリニコフの鼻持もならない襤褸姿が目に留つて焦り〳〵して來た矢先に、ラスコーリニコフが沈着き冷まして正面に見返した眼と眼が衝突つたので忽ち肝癪玉を破裂さした。

『何しに來た、汝は？』と叫りつけは叫りつけたが、此の襤褸乞丐奴が雷霆のやうな一喝を喰つても一向慄ともしないのに呆れて了つた。

『呼出されたから來ました、』とラスコーリニコフは聊か口訥つた。

『債務辨償の件です、』と書記長は答へつ、『さッ、』と一枚の紙をラスコーリニ

コフの前に投げ出して、『之を御覽！』

『金子？　何の金子だ？――が、彼れでは無かつたナ、』と思ふと、吻と安心して、嬉しくて手が顫へた。之で先づ大體の容子が解つたから、漸く重荷を下したやうな心地がした。

『汝は何時に召喚狀を請取つた？』と警部は威丈高に、『九時出頭とある。最う十二時ぢや。』

『十五分前に受取りました、』とラスコーリニコフは俄に憤然として、肩を聳やかして聲高に、『熱があつて臥てゐたんだから仕方が無い。』

『然うガミ〳〵云ふ勿。』

『ガミ〳〵は云ひません、平たく申すンです。ガミ〳〵云ふのは貴官の方だ。之でも我輩は大學生だから、然う突慳貪に云はれたくない。』

警部は赫となつて、口から唾が飛ぶほど吼り立つて飛び上りつゝ、

『默んなさい？　爰を何と心得をる。警察署ぢや。無禮な事を申すな。』

『警察署なら警察署のやうに、貴官も其意になつたら如何です。ガミ〳〵云

ふばかりぢや無い、貴官は煙草を燻かしてゐるが、爰に在る一同に對して無禮ぢやムらんか、』とスッパリ云ひ退けてラスコーリニコフは、思切つた憎まれ口を何とも云へないほど小氣味よく思つた。書記長は莞爾々々しながら仰向いて見た。短氣な警部は苦もなく凹まされて了つて、

『汝の知つた事ッちや無い、』とテレ隠しの調子外れの高聲で、『君、肝腎の要件を話してやれ。アレキサンダー*グレゴリーウッチ、其奴に書面を見せてやんなさい。ヤイ、汝を訴へたものがあるぞ。汝は負債を返さんナ。證書の切換ぐらゐは汝も心得とるぢやらうに。』

ラスコーリニコフは耳にも掛けずに、書記から書面を請取つて二三度繰返して見た。が、全然合點が行かんので、『こりや何です？』

『君の自筆の書付を活かさうといふ告訴狀だ。そこで今日召喚したのは其の書付の債務を一切の諸入費と共に即時支拂ふか、でなければ何時支拂ふといふ期限を定めて書面として出し、且支拂を濟ますまでは財産を移動し賣却し又は隠匿しないといふ契約に自署するのだ。債權者は何時なりとも法律の正

* Alexander Gregorivitch

條に依て君の所有品を差押へる事が出來るのだ。』

『我輩は何にも持つてやしません。君は自筆の書付の爲め訴へられてゐるんだから、原告八等官の未亡人ザ*ルニッィナヤの請求通りに金百二十留ブルの債務辨償手續を履行すれば宜いのだ。』

『ザルニッィナヤですと？　そんなら我輩の下宿の主婦だ。』

『下宿の主婦なら如何したのだ？』

書記長は氣の毒さうな顔をすると同時に仕たり顔をして、之から段々資本を掛けて債權者に對する懸引を追々修行しようといふ此の駈出しの債務者を見て微笑した。が、目下の場合、自筆の書付や下宿の主婦の訴訟如きはラスコーリニコフに取つては何でも無い。そんな事は心配するがものは無い。頭から氣に懸けないで知らん顔をしてゐても濟む。で、佇立つたなりに、機械的に讀んだり、聞いたり、答へたり、折々質問したりしてゐて、何よりも先づ無事に助かつたと云ふ喜悅と、差迫つた焦眉の危急を首尾よく遁れたとい

* Zarnitsinaya

ふ滿足とが胸一杯で、未來の事や現在の苦勞心配は一里も離れた向ふ河岸の話になつて了つて、唯直接混り氣なしの本能的な極無垢な嬉しい心持ばかりであつた。

すると突然大暴風雨が吹いて來た。ラスコーリニコフに凹まされた警部どのは高慢の鼻をへし折られた腹慰をする意で、最前入室つて來た時から警部を見てはクス〳〵笑つてゐた小粹な服裝の女を荒々しく叱りつけた。喪服の女は最う既くに歸つて在なかつた。

『こらッ。女郎――』と腹一杯の大聲で叫りつけた。『汝の家の昨夜の騷ぎは何ぢや？　汝は町内の厄介者ぢやナ。喧嘩をやる、管を卷いて騷ぐ、碌な事をしをらん。懲治檻に入れて貰ひたいのか。最う十二三遍も言つて聞かしてやつたに、今度は最う勘辨出來んから然う思ひなさい。箸にも棒にも掛らん奴ぢや。』

ラスコーリニコフは喫驚して手に持つ書面を落して了つた。で、眞向から口汚なく叱咤を浴びせられる小粹な女を見て不思議に思つたが、直ぐ仔細が

合點めて面白くなつて來た。聞いてるとツイ笑止しくて哄笑したくなつた。神經が全で攪亂されて了つた。

『イリヤー・ペトローウチ*』と書記長は警部を和めようとし掛けたが、此場合容喙ししても無効なのが解つてる、此の癇癪持の警部どのが一度駈出したら最期、最う留める事が出來ないのは從來の經驗で能く知つてるから止めて了つた。粹な服裝の婦人は唐突三寶に暴風雨のやうな劍呑を浴びせられて、初めは慄然としたが、奇妙な事には、叫られゝば叫られるほど段々晴れ〳〵した笑顏になつて、威丈高に嚇かしつける警部を見つゝ、嫣然愛嬌を覆しながら言葉の隙を待つてゐた。

『いゝえ大官、騷動も何もありやアしませんワ、』と警部の叱言の虛に乘じて敏捷しこく、ゴツ〳〵した獨逸訛りで怯めず憶せず、『恁うなんです、聞いて下さい。何處かの男がヘベレケで遣つて來たんですよ。好い加減醉つてるくせに三本附けさせて、其擧句に場所がらをも辨へないで、有らう事か、足でピアノを彈くッて針金を三四ケ處も斷つちまつたんです。なんほだつて默っ

* Ilia Petrovitch

ちやゐられませんから、餘まり無法過ぎるッて云つてやりますと、如何でせう、德利を持つて暴れ廻るぢやありませんか。夫れから大官、家番のカルルを呼んで來ますと、唐突カルルの眼を打つたんです。ヘンリエタも打たれましたし、妾も平手で忌ッてほど頰ぺたを五度もひッ叩かれました。左も右くも大官、賣出してる家ですよ。家の看板に對しても餘まりですから、誰か來てお呉れッて人を呼びますと、運河の方の窓を開けて豚の子のやうな聲を揚げて叫くぢやありませんか。何て云ふンでせう。實に失敬ぢやありませんか。わざ〳〵窓へ行つて豚の子のやうな聲を出すッて心持が呆れて了ひまさアネ。マすからカルルが堪り兼ねて、窓から此方へ伴れて來ようとして、不意上衣の裾を破つたのは眞實なんですが、自分の暴れたのは棚へ置いて、何でも十五留の損害賠償を出せつて强請るンです。餘まり馬鹿々々しくて腹が立つて仕樣がありませんけれども、こんな奴に關りあつたのが此方の手落だと胸を撫り〳〵五留呉れてやつたンです。昨宵の騷動てのは、實は恁う云ふわけなんで、全く大官、無法なお客に飛込まれたから、あの騷動なんで——。』

『煩さい、最う澤山だ。汝には散三ッぱら繰返して言つて聞かした……』

『イリヤー・ペトローウヰチ』と書記長が復た意味あり氣に言掛けると、警部はジロリと横目をして、輕く首を振つて見せた。

『こらッ、ルイザ・イワーノウナ、宜エか、之が說諭の打留だぞ、』と警部は更たまつて言葉を繼ぎ、『向後汝の家で少とでも騷動を仕出來せば、直ぐ汝を拘留しちまうぞ。さア、歸んなさい、之から始終監視してるから、其意で氣を付けなさい。』

ルイザは嬉しさうにイソ〳〵して、萬遍なく叩頭をして、愛嬌を覆し〳〵歸らうとする時、出會頭に入つて來たのは若い晴々した容貌の房々した頰鬚を生やした美男の警察官で、巡行警部のニコヂーム・ホミーチ*と云ふ男だ。ルイザは急いで腰を低く叩頭をして、元氣に噪いで署を飛出して了つた。

『何ていふ騷ぎだ、君……』とイリヤー・ペトローウヰチに向つて剛れ〳〵しく、『階下まで悉皆聞えるぜ。』

『何ァに、爰に在る大學生さんがぢやナ、イヤ前の大學生さんがぢやナ、』と

* Nicodemu Homich

イリヤー・ペトローウヰチは簿册を他の卓子に持つて行きながら、歩く度毎に妙な身振をして肩を振りつゝ、『負債も拂はない、證文の約束も履行しない、其上に部屋も明けないと云ふンで、債權者から度々訴へて來るのぢやが、先生訴へられても平氣な顏をして、却つて我輩が煙草を喫んでるのを豪い權幕で叱りつけるのぢや。見給へ、中々な男振ぢや。』

『貧乏は罪にならんよ、』とニコヂーム・ホミーチは氣輕にラスコーリニコフに話し掛けると、ラスコーリニコフは直ぐ穩かな調子で、

『失敬ですが、』とホミーチに向つて、『貴官に申上げます。若し失禮があつたら御勘辨を願ひますが、我輩は貧乏書生で、加之に健康が惡るくて、貧乏に追はれ通してゐます。唯今では大學生とは云ひかねますが、今までは大學生でした。金子は最う直き手に入ります。鄕里の母と妹から送金して呉れる筈になつてますから、請取りさいすやりァ直ぐ拂ひます。我輩の下宿の主婦てのは感心な女ですが、我輩が教師を罷めてから四ヶ月下宿料が拂へなかつたのを痛く怒つてるので、此頃ぢやァ食事も持つて來ません。此書付なんかも

一體如何したのだか殆んど覺えませんがネ、夫れでも今直ぐ拂はんけりやならんでせうか、如何でせう、宜しく御判斷を願ひます。』

『そんな事は此方の知つた事ッちやァない、』と書記長は復た嘴を容した。

『御道理です。御道理ですが、最う少し我輩に饒舌らして下さい、』とラスコーリニコフは矢張ニコヂーム・ホミーチに對つて故と忙がしさうに簿册の中に首を突込んで白ばくれてるイリヤー・ペトローウヰチにも聞えよがしに、『あの女の家には最う三年越し下宿して在ます、鄕里を出ると直ぐでした。下宿すると間もなくあの女の娘と結婚の約束をしました。尤も口約束、ほんの口約束でした。娘は尙だズブ若かつたし、我輩も齡が長かんから、實は戀愛て程では無かつたが、何しろ好いてゐました。其時分、主婦が非常に我輩を信用して呉れたもんだから、隨分面白笑止しく浮れて暮してゐました。』

『そんな下らん身の上咄をさッしやる勿。そんな愚痴を聞いてる時間は無い哩、』とイリヤー・ペトローウヰチは突慳貪に横槍を入れた。

『まァ最う少しお聞きなさい、』とラスコーリニコフは此の容喙口に邪魔され

たので勃然として、『下らん話ではあるが、我輩の情實咄だから最う少しお聞きなさい。夫れから一年ばかり經つとですナ、娘は窒扶斯で死んで了ひましたが、元々通り下宿してゐましたので、我輩のお母の話でも友人の說でも、主婦が十分我輩を信用してゐたのは明白でした。我輩が一時融通して貰つたものを書付にして渡した時も、堅く我輩を信用して最つと立換えても宜いと云つた位で、約束手形にして呉れなんぞと云つた事は決して、決して有りませんかつた。然るに我輩が教師を罷めて喰ふ事が出來なくなると、俄に請求するッてのは、如何にも現金過ぎる。貴官方は何と思ひます？』

『そんな難義咄が我輩等の關係した事かい、』とイリヤー・ペトローヴチは皮肉にからんで、『君は請求通りの契約を書けば宜いのぢや。[illegible]の腫れたのと其樣な愚痴や情話を聞いても此方が如何してやる事も出來ん哩。』

『然うッケ〳〵云ひ給ふな』とニコヂーム・ホミーチは云ひつゝ、席に就いて書き物を初めた。

『さア、お書きなさい』と書記長は云つた。

『何を書くんです？』とラスコーリニコフは聲を厲くした。

『此方の云ふ通りを、』と云ひつゝ、書記長は傍に立つて定つた書式、即ち唯今は辨債し難き事、依て辨債の義務相濟まし候までは如何なる手續にても所有品を賣拂ひて町を立去り申すまじく云々の書式を口授した。

『君は書けないかエ？　そらッ、ペンが落ちる。』と書記はラスコーリニコフの顏を覗いて見て、『如何かしたかエ？』

『頭がグラ〳〵して來ました。何、關ひません。それから……』

『それで宜しい。さッ、署名をおしなさい。』

ラスコーリニコフはペンを投り出して、歸らうとして立ち掛けたが、不斗卓上に兩肱を突いて兩手で頭を押へて考へ込んだ。復た新らしい考が湧いて來た。之から直ぐニコヂーム・ホミーチの許へ行き、一伍一什の顚末を自首して自分の下宿に同道し、壁紙の中の穴から賍物を悉く出して見せようかと思つた。此考は咄嗟に生じて、直ぐ然うしようといふ氣になつて、座を起たうとすると、『一ト思案！』と頭腦の中で云ふ聲がする、其のあ

とから復た、『イヤ、何にも考へるに及ばぬ。少とも早く重荷を卸しちまへ、』といふ聲がした。

すると恰も此時、イリヤー・ペトロウヰチを對手にニコヂーム・ホミーチが夢中になつて話してゐた二言三言が耳に入ると、不意に鐵砲彈に中たれたやうに立縮んで了つた。

『そんな奴があるもんか、二人とも放免して了ふサ。第一事實が悉く矛楯しとる。考へて見ろ、渠等が做た事なら家番を呼ぶもんかナ。豈夫か自分から進んで罪蹟を明かにする意だといふンぢやあるまい。夫れとも欺瞞す爲めの狡猾手段だといふのか。何方にしても考へ過ぎてる。殊に學生のペストリャーコフは門前まで三人の男と一緒に來て、暫らく立咄しをしてから入つて行つたのを家番が見てゐたッてぢやないか。コッホの奴だつて老婆の許へ行く前三十分の餘も階下の銀細工屋に在たッてぢやないか。なッ、考へて見ろ。』

『だけども變ぢやぜ。初めに扉を叩いた時閉つてゐて排かなかつたのが、僅か三分後、家番と行つて見ると、排いてゐたのぢやぜ。』

『夫りやア眞實だらう。初めの時は、兇行者が部屋の中に在て扉に門を挿したのサ。コッホ奴が家番を呼びに行くなんてトンチキさいしなけりや慥に捕まへられたのを、渠奴が階下へ降りた間に風を喰つて逃出したに定つてる。尤もコッホ奴が云ふ通り、單獨でゐたなら室内から飛出して來て渠奴を殺らして了つたかも解らぬから、渠奴の身になつたら生命の助かるお祈りをしに降りたくなつたのも無理はないサ。はッはッはッ！』

『兇行者を見掛けた奴は一人も無いのぢやネ？』

『見掛けさうなもんだがナ。詭亞の箱船そッくりて家ですぜ。』と今まで聞いてゐた書記は嘴を容れた。

『何しろ事件は極めて明瞭だ。頗る明瞭だ。』ニコヂーム・ホミーチは斷乎と云つた。

『いんにや、中々！　中々！』とイリヤー・ペトロウヰチは答へた。

ラスコーニリコフは帽子を取つて歸らうとしたまでは覺えてるが、扉口に行かない中に茫ッとして了つた。軈て氣が付いた時は、椅子に腰掛けてゐて、

右からは顔を知らない男が身體を支へて呉れて、左の方には黄色いコップに黄色い水を入れたのを持つてる男が立つてゐた。前にはニコヂーム・ホミーチが立つてゐて、昵ッと其顔を凝視めてゐた。

ラスコーリニコフは起たうとすると、『如何した？　病氣かネ？』と警部は屹と尋ねた。

『何しろ署名をする時にも危なくペンを落しさうでした、』と書記長は云ひつつ簿册の方へ行つて了つた。

『久しい事病氣かナ？』とイリヤー・ペトローウヰチは自分の書卓から聲を掛けながら氣絶した男を見に駈けて來たが、直ぐ去つて了つた。

『昨日からです、』とラスコーリニコフは低聲で口裡で答へた。

『昨日外出したか？』

『外出しました。』

『病氣ぢやッたのぢやナ？』

『病氣でした！』

『何時頃外出した？』

『夕方八時。』

『ふウむ……何處へ？　何處へ行つた？』

『市中へ？』

『市中へ？……最つと明細に判然と。』

ラスコーリニコフは調子外れの聲で斷乎と答へた。が、顔色が手巾のやうに青白くなつて、黑い腫れぼつたい眼をイリヤー・ペトローウヰチの腸の底まで見拔かうといふ眼から外らした。

『漸と立つ事が出來る。』とニコヂーム・ホミーチは同僚に向つて、『猶だ君は飢問する事があるかエ？』

『何にも無い、』とイリヤー・ペトローウヰチは答へた。

ニコヂーム・ホミーチは猶だ何か云ひたさうな風で、書記の方を顧眄いたが、書記長が意味ありげにジロリと見ると、三人とも其儘默つて了つた。妙な雰梅式だつた。

ラスコーリニコフは署を出て、階段を降り掛けると、忽ち盛んな議論が沸騰して、誰よりもニコヂーム・ホミーチの詰問する聲が際立つて聞えた。家外へ出ると漸く我身に戻つたやうな氣がした。

『探索、探索！　彼奴等は徐々探索し初めたナ！』と云つた。『畜生奴、揃つて俺を疑つてやがる！』と、俄に頭の頂顖から足の爪尖まで恐ろしさが浸み渡つて來た。

第二回

『假に若し家宅捜索があつたとしたら如何する？　丁度今捜索の眞最中で、部屋中が顚覆返るやうな騷ぎをしてゐるとしたら如何する？』と思つたら矢も楯も堪らずに飛込むと、部屋の中は寂として誰一人來た容子はなく、ナスターシヤさへ來なかつたやうだ。が、隱匿した贓物を何條此儘にして置かるべき。突と部屋の隅へ行き、壁紙の裏へ手を突込んで、悉く握み出して衣兜に捩込んで了つた。總てが八點で、耳環か何か其樣な物を入れた小匣が二個と、モロッコ革の小匣が四個と、紙に包んだ鎖が一ト掛と、多分裝飾物らしい物を纏んだ新聞紙包が一つとであつた。

此の八品と例の巾着とを一ト纏めにして捨てて了つて、少とでも人目を牽かぬやうにと、再た出掛けた。

平日の通り扉を開放したなりに、追跡けられるのを恐れて忙いで飛出した。事に由ると、數分時の内にも捕縛の命令が下らぬとも限らぬから、片時も早

く、氣力も分別も確かな中に證據といふ證據を盡く堙滅して了はにやならぬが、扨て何處へ匿しに行つたもんだらう？

尤も大凡は既くから定めてゐたので、一と纏めに運河に投込んぢまへば容易く鳧が着いて了ふ。あの犯罪後の無我夢中の晩、『直ぐ！　直ぐ！　みんな棄てッちまへ、』と號んだ時から恁うと決めてゐたが、扨て率となると案外容易でなかつた。カテリーナ運河の堤へ來て三十分も徜徉いてゐたが、折角投込まうと見込んで來た邊の、此方には洗濯屋の棧橋があつたり、彼方には數艘の短艇が繋いであつたりして、其上に何處にも彼處にも人が多勢出盛つてゐた。且又、彼の小匣が巧く沈んで呉れゝば宜いが、浮くのが寧ろ當然かも知れぬ。して見ると是りや迂濶には出來ぬ。夫れよりかネワ河なら人も少からうし、捨てる場所も廣いから都合が宜からう。と思ひつゝ偶つと氣が付くと、外出けてから最うタップリ三十分徜徉いてゐる、シカモ此の危險區域に悠長極まる。最う依違しちやをられぬと、急いでネワ河の方へ行かうとして、忽ち再た踏留つて了つた。何故ネワに捨てようとする？　何故水と限つて了

ふ？　寧そ森の中の寂しい處か乃至は草叢の根の下が却つて良策では無からう乎。穴を堀つて埋めて了はふ！　此の場合何分悠然と沈着いて考へてゐられなかつたが、何しろ之が一番の上策らしく思はれた。

が、此考も愈々實行する意になりきれない中に、再た氣が變つて了つた。

V——大通りを通ると左側に、高い塀で圍はれた只ある空地の入口が偶つと目に留つた。此の空地の右方を上へズッと行くと大きな四階作りの建物の側面に突當る。左方は其建物の屋壁と並行して直ぐ門から續いて下手へ凡そ七間ほどの板圍があつて、其先きが塵埃捨場になつてゐた。遙か下手の一番低いドン底に差掛小屋があつて、多分大工か車大工の仕事場であらう。四邊が狼藉して何も彼も石炭屑のやうに眞黑であつた。

爰こそ屈竟の場所と四邊を見廻してから空地に入込んだ。只見ると、扉の背ろに目方五十斤もありさうな猶だ鑿の跡の無い大きな石材があつて、ピッタリ板圍に立掛けてあるのが眼に着いた。其處なら立つてゐても誰にも見えないので、全く人目を避ける事が出來た。で、腰を屈めて、大骨折つて石材

を顚倒返すと、其下に小さな穴があつた。其中へ急いで衣兜の小匣を悉く投込んで一番上に巾着を載せ、以前通りに石材を置き直した。目に着くほどな事はないが、多少の手を着けた跡が殘らないでも無いので、石材際の土を踏固めて、首尾よく仕事を濟ましてしまつた。

再び町へ出た時は嬉しくて莞爾した。先づ之で總ての罪跡が堙滅して了つた。爰まで嗅ぎ付けて來るものは豈夫有るまい。縱令んば偶然發見け出したにしろ、自分を疑ふものは豈夫無からう。證據は總て失くなつて了つた、と思つて再び莞爾した。後日になつては能く此時を憶出すが、此町を歩いてゐる中間斷なしにニタ〳〵と留度なく神經的に笑ひ續けたもんだ。

躰てK――遊歩場へ來た。爰で酒に醉つた娘を助けた葛藤のあつたのを憶出すと、今までの元氣が俄に失くなつて了つて、其の事件に關聯して夫れから夫れへと種々雜多な雜念が無茶苦茶に頭腦に群がつて來た。

「畜生！」と呟いて忌々しげに四周を睨廻しつゝ歩いた。ラスコーリニコフの之までの考は盡く皆或る一點に關聯してゐたが、扨て愈々の振出しとなる

と、最う今でさへが肝腎の問題からは外れて了つてゐた。此問題たるや極めて重大で、之が爲めに過去二ヶ月間誰とも會ふのを避けてゐた位だのに。

『何も彼も放擲らかして了へ、新生活も糞もあるもんか』と肝癪聲を破裂らした。『チャンチャラ笑止しい！　無禮千萬なイリヤー！ペトローウヰチの御機嫌取りに虚言を吐いてる！　但し挑戰ふ意、或は遊んでやる意、として見た處で……』と言葉を途切らして、全く新しい、今まで思ひも附かなかつた、退引ならぬ疑問を起した。『一體恁ういふ大事を做て退けたのは十分な思慮、確たる成算があつたのか知らん。夫れともタワイのない愚なる了簡で行つて了つたのか。あの巾着の中を檢めもせず、取つて來たものを見ようともしないで捨てゝ了ふ、てのが俺の大それた仕事の結着なのか。碌すつぽ覗いても見ないで盡く河の中に投込んで了はねばならなかつたの乎。一體如何したもんだ？　俺は病氣だナ、病氣なればこそ如此な了簡になるんだ、衰弱疲勞し切つて、何をやつてるのか自分でも解らん。昨日も一昨日も同じぢやないか。が、直き快復る。快復るに違ひないが、若し快復らぬとしたら！　何て俺は

疲れてゐだらう！』

如何がなして心を紛らさうと其邊を彷徨き廻つてゐたが、如何して宜いやら解らなかつた。往日からの嫌惡心――人と云ふ人、物と云ふ物、周圍のもの一切に對する頑强な苛刻な憎惡心が一層强くなつて、自分に口を利く者を誰でも關はず無視して了はふとした。

いつとなくワシーリエフスキイ嶋近い小ネワ河の堤まで來て佇立つた。

『おッ、爰だ、あの家に在るんだ！　妙だ！――首尾よく目的を果した其の翌る日はラズーミヒンを尋ねようと先日思つたが、何時の間にか渠奴の家に來て了つた？』と徐々五階へ昇つて行つた。

丁度ラズーミヒンは在宿はして、小さな部屋に閉ぢ籠つて忙がしさうに書物をしてゐたが、訪なふ聲が聞えたので、突と座を離れて扉を排けた。ラスコーリニコフとは四ケ月前に會つたきりであつた。相變らずの汚れちぎつた服を着て、古ほけた上沓を素足に突掛け、蓬頭亂髪、髯も剃らず顏も洗はずにゐた。扉を排けると喫驚して、

『やッ　君か？』と久振りでの朋友を頭の頂巔から足の尖まで見下して、フウーと長い嘆息を吐いた。

『意外だ！』とラスコーリニコフの襤褸服を穴の開く程見ながら、『兄貴――兄貴よりも最つと親密な君、先ア入れ！　さッ掛けろ！』とラスコーリニコフのよりは一層慘憺たる米利堅羅紗を張つたガタ〳〵寢椅子へ請じたが、ラスコーリニコフの血色が勝れないのを直ぐ見て取つて、

『こりや不可、病氣だナ。餘程惡るさうだぜ。何とも無いかい？』と云ひつつ脈を取らうとすると、ラスコーリニコフは手を引込めて、

『先ア宜いよ。此通り遣つて來たんだもの、大丈夫だ。時に唐突だが、敎へに行く口は無いかネ。尤も强て行きたい譯でも無いが……』

『何を云つてる。餘程逆上せてるナ、』とラスコーリニコフを睨ッと見た。

『逆上せてやせん、』と突と長椅子を離れた。世界中の人間の誰にしろ、親友中の親友であらうと、自分を彼是れ批評する事を決して許さぬといふやうな氣がして、俄に無茶苦茶に腹が立ち、憤激して殆んど口が利けなくなつて了

つた。

『失敬！』と叫んで矢庭にッカ〳〵と扉へ行きさうにした。

『待て、君！』

『歸る……』と手を振拂つた。

『歸るなら歸るで宜いが、そんなら何しに來たんだ？　氣でも違つたのか、如何したのだ？　夫れぢやァ全で人を侮辱するッてもんだ。此のまんまぢや歸されんぞ。』

『ぢやァ云つて聞かせよう。我輩が爰へ來たのは君でなくちやァ我輩を救つて吳れるものが他に無いからだ。一番親切で、一番道理が解る君だからだ。宜いか、解つたらう。處で我輩の捜す口が絶對に無いッてのが君の口吻で直ぐ解つたから、我輩は我輩で、自分で何とかする。之だけ云やァ最う十分だらう。さッ、溫和しく歸さして吳れ。』

『先ァ待て、此の煙突の掃除屋め、餘程如何かしてゐるナ。此方も御同樣敎へる口が無い浪人で、此頃は出版商に頼まれて飜譯をやつてるのだが、そこ

で是非君の手を借りたいッてのは、僕の文章が餘りお上手で無い處へ持つて來て、獨逸語が危いと來てゐるから、實は大に心細いのだ。最う少と巧くやりたいのだが、如何だい、幇助つて吳れんかい。此奴を譯すと三留になるんだが、如何だい、做る氣があるなら做つて見んか。之だ！』

と云ひつゝ、出した三留と獨逸文とを、ラスコーリニコフは默つて引奪つて出て行つた。ラズーミヒンは呆氣に取られて見送つてゐると、直ぐ再た戻つて來て金子と紙とを卓上に置いたまゝ、何にも云はずに去つて了ひさうにしたので、愈々呆氣に取られて、

『餘程君は逆上してゐる、』と到頭堪りかねて叫き出した。『何て所爲だ、何てお茶番を行つてるんだ？　之れぢやァ聖人だつて手古摺つちまう。此の渦毛曲りの天邪鬼奴が何しに來たんだい？』

『飜譯なんぞは做たくない、』とラスコーリニコフは一言吃きつゝ、階段を降りて行つた

『オイ〳〵、何處に在るンだい？』と呼掛けて訊いたが、返事は無かつた！

『無茶だナ！　勝手に歸れ！』

既う此時はラスコーリニコフは道路へ出て了つてゐた。驚てニコラーエフスキー橋まで來ると、突然背後からビシリビシリと云ふ鞭の音がして、俄に馬の速度を早めようとする馬車の馭者が三四遍聲を掛ける間もなくラスコーリニコフの脊中にビシリと一と鞭を浴びせかけた。不意を喰つて我知らず橋の欄干に飛退きざまにハッと氣が付いたが、如何して悠々道路の中央を歩いてゐたのか今まで知らずにゐた。其中に馬車は通り拔けて了つたので、其背後を睨んで忌々しさうに切齒をしながら、周圍の人が目引き袖引き笑ふ間に佇立つてゐると、不意に貨幣を握らせるものがあつた。顧盼いて見ると、髭を結つて山羊皮の靴を穿いた町家の女房らしい婦人が黃色い日傘を翳した女の子（多分娘であらう）を伴れて、摺れ違ひざまに、『上げますよ、キリストの御爲めに……』と云つた。

服と云ひ容貌と云ひ、お貰ひの乞丐と見られるのが當然で、一と鞭浴びせられたお庇に二十哥を儲けたのだが、返さうといふ方角もなく、茫然貨幣を

握つたまゝボッく歩き出して、ネワ河から冬宮の方を眺めると、一點の雲もなく晴れ渡つて、珍らしい事には河の水も青々として、御堂の伽藍の丸屋根がクッキリと鮮かに雲表に聳えてゐるばかりでなく、澄渡つた空氣を透して細かい建築の彫刻が一つく に判然と見えた。

鞭の傷痛が徐々薄らいで來て、答たれた事を忘れた時分には目茶苦茶に攪き亂れた取留まらぬ考が忽ち取つて代つた。で、茫然と佇立つて遙か彼方を暫らく眺と瞻めてゐたが、此邊は大學に在た時分からの馴染の場所で、何百遍となく徜徉いては美くしい此のパノラマを眞實感歎し、何とも名狀し難い和かい風に吹かれては此の美くしい景色に言はず語らず慰められたもんだ。で又、生眞面目なやうな謎のやうな疑問が度々浮いて來るのに驚きつけてるが、自分で自分が恃みにならぬので、毎次でもソックリ其まゝ後日に解決を延ばす事にしてゐた。

で、從來度々行りつけたやうに暫らく佇立つて考へて見ようかとも思つたが、夫も馬鹿々々しくなつた上に、今までの問題と云ふ一切の問題が、パノ

ラマミか何とかいふ事までが俄に遠い〳〵足の下に埋もれて了つて、雲井遙に遁れた身の下界の事が何にも見えなくなつて了つたやうにも思はれた。暫らくして手を振つて見ると、忽ち握つてゐた貨幣に氣が付いたので、鳥渡見て直ぐ川に投込んでから歸り掛けた。此瞬間、一切の關係を何も彼も絶縁して了つたやうな氣がした。

夕方歸つて來た。多分八時頃であつたらうが、如何いふ風に如何いふ道を歸つて來たか憶出されなかつた。が、迅速く服を脱いで、ゴロリと寢榻に倒れ、散三鞭で苦たれ拔いた馬のやうにガタ〳〵顫へながら、例の外套をスツポリ被つて、直ぐグツスリと寢込んで了つた。

翌朝は、朝ッぱらからの大變な騒ぎで眼が攪めた。ちよッ、あの泣聲、あの尋常ならぬ物音、あの叫び聲、あの齒噛みの音、あの打擲や叱咤、何事ッた！　之までッイぞ一遍も聞いた事が無かつた！　如此な野蠻な騒動は迚も想像する事が出來ないで、吃驚して跳起きて榻の上に坐つて了つた。段々騒動が大きくなつて罵り叫く聲が次第に高くなつたが、驚いたのは下宿の主婦

の聲で、何だか意味の解らぬ言葉をベラ〳〵列べたり叫いたりしては、打つのは好い加減に止して呉れと泣いてゐた。對手は非常な權幕で破鐘聲で叫り散らしてゐたが、不斗其聲がイリヤー・ペトローウチなのを氣が付くと、俄に木の葉のやうに顫へ初した。

『はてナ、渠奴めが爰へ來て主婦を打つたり蹴たりしてゐる。――何故だ、如何いふわけだ？　有り得べからざる事だ！　夢ぢや無いかナ、夢ぢやー　夫れとも天地が顚倒り返りでもしたか？』

其中に彼方此方から下宿人が寄つて來て、叫いたり、罵つたり、扉を敲いたり小突いたりする音が一緒になつて益々大騒ぎになつた。夢ぢやァ無い、眞實だ。

『はてナ、愈々遣つて來やがつたのかナ？』ミ、手を伸ばして門を挿さうとしたが、其まゝグタリと手を垂れて了つた。全身が氷のやうに凍かんで了つて、バッタリ背後へ倒れた。其中に十分かそこら經つと騒動が段々鎭まつて了ひ、主婦はシク〳〵と歔欷きをして、イリヤー・ペトローウチは頻りに嚇か

したり罵言したりしてゐたが、いつか寂然として、見物人は各々自分の部屋へ戻つて了つた。

イリヤー・ペトローウヰチの聲に震慴えたラスコーリニコフは前後不覺に茫ッとなつて榻に倒れてゐたが、眼を閉る事も出來ないで、ツイぞ之までに覺えない苦痛と、耐へられない恐ろしさに脅かされて、仰向いたぎりにオド〳〵してゐる最中、突然扉が排いて、ナスターシャが手燭を點けて、スープと麵包と鹽とを持つて入つて來た。ラスコーリニコフをヂロリと見て、睡ないでゐるのを知ると、卓上に手燭を置いて食事の支度をした。

『昨日から何にも喰べないで、熱に浮かされながら方々ほッつき歩いてらしッたんだワネ。』

『ナスターシャ、主婦を打つたのは誰だい？』

ナスターシャは眤と凝視めてゐた。

『然うさナ、三十分ばかり前にイリヤー・ペトローウヰチが來てゐたらう。如何して主婦を打つたのだ？　如何いふ仔細なんだい？』

ナスターシャは返事もしないで眤と凝視めてゐた。此の怪訝な顏をしてゐるのが心配になつて、

『ナスターシャ、何故、默つてる？』と心細い聲で云つた。

『血だよ！』とナスターシャは沈着き濟まして獨語のやうに云つた。（原文"Eto Krovi"といふは、「血だ」とも「血のせいだ」即ち「逆上せてるンだ」とも兩義に解ぜらるゝが故にラスコーリニコフは聞き損なつたのである。）

『えッ、血だ！　何の血だ！』とラスコーリニコフは眞蒼になつて壁を向いて了つた。

『誰も主婦さんを打つた人なんぞありやァしないワ、』とナスターシャはラスコーリニコフを凝視めたなりに云つた。

ラスコーリニコフは死んだやうになつて向直つた。『俺は聞いてたぞ、悉皆聞いてたぞ。睡てエたんぢや無い、恁うして榻の上に座つてて、悉皆聞いちまつたぞ。確にイリヤーの聲だつた。全家見物に來たぢやァないか。』

『何にも有りやしないワ。血の爲だワ。血が上つて夢を見たんだワ。さッ、喫つて御ろんじやい！』

ラスコーリニコフは返事をしなかつた。ナスターシャは其傍に立つて、依然として前のやうに目分量に見てゐた。

『ナスターシャ、何でも宜いから飲むものを吳れないか？』

ナスターシャは下へ行つて、軈て白手の瀨戸の器に水を持つて來た。一と口呑んでから二三滴を首筋に落し、何にも考へないで、暫らく恍然と茫ッとしてゐた。

第三回

尤もラスコーリニコフの頭は病氣が募る眞最中でも全然空虛な事は決して無かつた。代る〳〵に雜念が生じて、或時は自分を取挫がうとして喧嘩を買ひに來る人に圍繞かれてゐるやうな氣がしたり、然うかと思ふと衆人逃けて了つて、影から嚇したり、時々扉の隙から覗いて脅かしたり挑かつたり、折々は高笑ひしたりしてゐるやうにも思つた。

で、寢榻の傍にナスターシャが在ると思つたのは度々だが、其外にチョクチョク男がやつて來た。確に能く知つてる顏に違ひないが、如何しても思出されないのが情なくて、果は泣出したくなつた。で又、一と月も臥てゐるやうな氣もするし、尙だ唯つた一日にしかならぬやうな心持もした。且又、必ず忘れてはならない筈のものがあるとは度々思ふが、何を忘れちやならぬのか、肝腎の其事が如何しても憶出せなかつた。之ではならぬと一生懸命になつて驚起して飛出さうとして挽くと、其度毎に必ず背後から誰だかに無圖と

抱留められてはバッタリ倒れ、身體がヘト〳〵になつて其儘氣が遠くなつて了ひさうな氣がした。其中に漸と正氣に戻つた。

朝の十時頃だらう。日本晴れのした上天氣で、日光がラスコーリニコフの臥てゐる榻にまで射込んでゐた。其傍にナスターシャと知らない顔の男が立つてゐた。頤髯を生やして、「カフタン」を着た、一見勞働者らしい風體の男であつた。半分開いてゐる扉の隙からは主婦が容子を覗つてゐた。ラスコーリニコフは身體を少し起し掛けて、

『ナスターシヤ、誰だい、此人は？』と知らない顔の男を指さした。

『呀、目が覺めたワネ。』

『お目覺めですか？』と男は言返した。主婦はラスコーリニコフが全く正氣に復つたのを見屆けると直ぐ、扉を磐と閉め切つて逃げて了つた。到つて氣の小さい女で、ラスコーリニコフと面と顏を合はして口を利いたり爭つたりするのを恐れてゐた、齡は四十ぐらゐだらう乎、短小の肥胖した見よけな好人物らしい女である。身體が肥えて悠長にしてゐる爲で慾う見えるのだらう

が、左に右く何方かといふと氣輕な面白い女だ。

『誰だい、君は？』とラスコーリニコフが知らない顏の男に向つて訊いた途端に、ラズーミヒンの長身が屈みながら入つて來た。

『何て小ッぽけな部屋だ！　毎次でも定つて前額を打つける。之でも下宿屋の貸間てのかい！　兄貴、如何した、目が覺めたかい？　パ*ーシェンカ（下宿屋の主婦の名、本統はプラスコーヴヤ・パヴローヴナと云ふのを親しい仲で馴れ〳〵しくパーシェンカと呼ぶのだ）から聞いて來た。』

『今、起きつたばッかしよ。』とナスターシャは云つた。

『今、お目覺めでした。』と勞働者風の男も笑ひながら云つた。

『誰だつけナ、君は？』とラズーミヒンは見知らぬ顏の男を見て云つた。

『私はシュロパーエフの使者で厶ります。』

『先ア座つて給へ。能く目が覺めた。』とラズーミヒンは知らない顏の男を放棄らかしたなりにラスコーリニコフに向つて、『今日で四日、昏睡し通しだつたぜ。ホラ、此通り匙まで付けて、お茶が來てゐるが、全で手が着いてないぢやないか。餘り心配だからゾ*シーモフを二度伴れて來た。ゾシーモフは知し

* Pashenka

* Zosimoff

つてたナ？　ホラ、あの醫者ッほうサ。能ウく叮嚀に診て呉れたが、大方惡いものを喰つたり惡い酒を喫んだりした結果、下らん事を頭に持つて逆上したんだらうと云つてゐた。何アに、直き癒つちまふよ。……ホウ、君を待たしといちやア濟まんかつた、』とシェロバーエフの使者に向つて、『さッ、遠慮しないで用向を云ひ給へ。シェロバーエフの許からは此の先生の外に猶だ一人、使者が來たつけ。』

『ヘエ、一昨日、他の者を伺はせました。ワクルーシンさんからのお命令で、此前の通りお故郷の阿母さんからの御送金三十五留をお屆けに上りましたんで、多分最う御承知でムりませう？』

『あッ、知つてる、ワクルーシンさんの何なら……』とラスコーリニコフは考へ〳〵云つた。

『何、君、ワクルーシンを知つてるかい？』とラズーミヒンは叫びつゝ使者に向つて、『何だい、君の持つてるのは？』

『帳面でムります。』

『ドレ、此方へ遣しな。さッ、ローヂャ、起きて記名をしろ。金子は人間の蜂蜜だ。』

『我輩は要らんよ。』とラスコーリニコフは膠もなくペンを突返して了つた。

『要らん？　要らん事があるもんか。夫れぢやア僕が證明しよう、何でも無い、容易い事つた。僕が代筆してやる。さッ、宜からう、請取だよ。』

『お手數でムりました。』と使者は金子を置いて歸つて了つた。

『豪氣だ！　オイ君、何が食ひたい？　何にしよう？　肉汁かナ？』

『馬齢薯と米の飯のかい！』

『はア、持つて來ませうか。』

ラスコーリニコフは偏呆れに呆れた顏をして、底氣味惡るさうに二人を睨と視、暫らくは沈默して成るまゝに任して置かうと覺悟した。『俺は最う現ぢや無い、正氣だ、』と心中に思つた。

暫らくするとナスターシヤは肉汁を持つて來て、跡から直ぐお茶が參りますと云つた。匙と皿とを二人分と、鹽、胡椒等一式を揃へて來た。之までッイぞ無い事で、布巾にも汚點が無かつた。

『プラスコーウヤ・パウロウナ奴、(下宿屋の主婦の名)麥酒の二本も奮發つて呉れたら、最う言分は無エんだが、さア君、飲らうぢやないか。』

ラスコーリニコフは惘然としてゐた。ラズーミヒンは熊のやうに無器用に列んで腰を掛け、左の手でラスコーリニコフの頭を押へて養つてやつた。一ト匙、二タ匙、三匙と進んだ時、ゾシーモフの來るまでは待つてなけりやならぬと云つた。

『ローヂヤ、僕ア二三日爰で食事を喫つてる。主婦のパーシェンカが御馳走して呉れるから、御遠慮なしに喫つてる。そら、ナスターシヤが茶を持つて來た。』

ラズーミヒンはラスコーリニコフのを一杯注いでから自分のも注ぎ、再び寢榻に腰を掛けて左の手で病人の頭を抱へつゝ、茶を吹き〳〵冷ましながら

*Prarcovia Paulovna

匙で飲ませた。ラスコーリニコフは默つて做るまゝになつてゐた。自分で起上つて勝手に飲まうと思へば、人の世話にならないでも濟むのだが、故と云ひなり放題になつてゐて、狡い横着な了簡を起して、猫を被つたり虚言を吐いたり物を聞いたり注意したりする氣力が全然無いやうな顏を佯つて空惚けてゐた。で、十二匙ほども吸つてから匙を推退けて、グッタリ横になつて枕に頭を着けて了つた。此枕が何時の間にか眞物の鳥の羽毛を入れた上等物に代つてゐたのは、疾うから氣が付いて頭の中に入れてゐた。

『處でローヂヤ、君を捜し出した顚末を話さう。先日君は宿處も云はずにプイと歸つちまつたナ。餘り癪に觸つたから、是非捜し出して小痛い目に會はして呉れうと、直ぐ思立つて捜しに掛つた。が、いくら捜しても捜しても解らん。頭から知らんのだから解りよう筈が無い。仕方が無いから君の以前の宿處へ行つて見たが矢張解らんのだ。到頭捜し倦んで戸籍役場へ訊きに行つたら、唯つた二三分の中に直ぐ捜して呉れた。君の名がチャンと記入してあるぢやアないか。』

『我輩の名が？』

『むゝ、君の名が。其のくせ僕の名は發見からんのだ。夫れから爰へ來ると直ぐ君の近狀を詳しく聞いちまつた。何から彼まで一切知つてる。警部のニコヂーム・ホミーチ、其同僚のイリヤー・ペトローウヰチ、警察の書記長のザミョートフとも懇意になつちまつた。此家の主婦のパーシェンカと君との悶着も聞いちまつた。が、君を退屈さしても詰らんから餘計な事は饒舌らんが、主婦のパーシェンカを生捕つたのは僕の大勝利さ。ナスターシャに訊いて見給へ——』

『眞個よ、眞個に巧く主婦さんを圓め込んぢやつてよ、』とナスターシャは羞恥るさうに微笑した。

ラスコーリニコフは何とも返事をしなかつた。其のくせ友達のジロリと見た眼と衝突つた眼を外らす事が出來なかつた。ラズーミヒンは對手が何を云つても默り團子なのを氣拙く思はないでもないが、一向去氣無い體で、『何しろ君は拙かつたよ、最う少と上手に主婦を操縱すると何でも無かつたのだが、畢竟君が拙いから到頭證文を書くやうになつたので、僕は最う何でも知つてる。——やア、之ア失敬した、餘り立入つた咄になつた。何て阿呆だらう、云はでも宜い事をツイ言過ぎる。だが君、詮じ詰めた處、主婦は外見ほど馬鹿ぢやア無いと思ふが、如何だネ？』

『いゝんや、』とラスコーリニコフは好い加減に談話を切つて了つた方が宜かつたとも氣が付かずに不意云つて了つた。

『然うかネ』とラズーミヒンは對手が徐々話に乘つて來たのを喜んで、『何しろ意想外な人間だ。實は猶だ能く解らんのだが、齡は最う四十だらうナ、自分では三十六だと云つてるけれど。左に右く先方は先方で那樣な所爲をする理由が十分あるのだ。僕も彼の女を智的に純理的に、或は君の稱する何々的に判斷して見た意だが、君との悶着は恁ういふ仔細だ。ツマリ主婦が思ふには、君は最早學生ぢや無い、と云つて何處へも敎へに行くぢやなし、云はゞ生活の道を失つてる人だ、且娘が死んぢまつた以上は將來君を賴るわけにも行くまい、彼の女の身になつたら心細くもならァな。そこへ持つて來て君は一向ノンキに、少しも心配しないで益々落ちてくばかりだから、矢も楯も堪

* Zametoff

らない、到頭斷然君に部屋を空けて貰ふ氣になつて、君に出て貰ふ工夫を長い間散三考へてたんだネ。處へ出て來たのが君の書付だ。君は何れお母さんが拂ふとか何とか云つたさうだが……』

『虛誕サ。そんな虛誕を吐いたのは卑怯だつたが、虛誕サ。我輩の阿母ては他人のお庇で何うか恁うか暮してる身だもの、阿母が如何しようも無いが、追出されたくないので、ツイ一日遁れの出鱈目を云つたのだ。』とラスコーリニコフは如何にも心苦しさうだつた。

『用意周到だつたネ、だが、間が悪い時は仕方が無いもんで、チェバーロフて奴が現れて來たんだ。其奴さへ在なかつたら、バーシェンカも那樣な事をする氣にならなかつたらう。根が氣の小さい女で、商賣人て柄ぢやア無い。そこでチェバーロフが第一に「此の書付を活かせるか？」て訊くと、主婦は恁う答へた、「母親てのは百二十五留の扶助料だけの人ですが、矢張悴の面倒を見てやります。夫れにゾーニヤて兄思ひの妹があつて、兄貴の爲めなら借金の抵當に何處へなと行きませう。」――と、こんな事を特にして相談したんだ。鷂い

ちやア不可。君の心底の心持は能く解つてるサ。成程バーシェンカが君を未來の婚と思つてる時、君が彼の女を信用してるたのは道理だけれども、併し君、正直者が自分の秘事を打明けると、商賣人て奴は束に捆けて算盤珠に彈き込んぢまふもんだ。そこで手取早い咄が、主婦が君の書付をチェバーロフに交付したんで、到頭那樣いふ段取に運んぢまつたが、だが君、幸ひなる哉、主婦と僕と今ぢやア大に情意投合して來たんで、主婦を說得して、必ず君が仕拂ふからと巧く取做して首尾よく事件を纏めッちまつた。無論、君は支拂つて呉れるだらうナ。夫れからチェバーロフには費用の賠償として十留與つて、此通り證文を取戻して來た。さッ、返すよ。宜いかネ、君は唯、必ず返すといふ約束だけして安心させりやア宜いんだ。』

と云つて、證文を卓上に置いた。ラスコーリニコフはラズーミヒンの顏を鳥渡見たぎり、何にも云はないで再た壁の方を向いて了つた。

『呀、猶だじぶくつてるネ。調戲けるのも好い加減にしないか、』とラズーミヒンは少し咄を途切らしてから、『折角君を喜ばせて安心させようと思つたら、

何だか君を怒らしちまつたやうだ。』

『我輩が現になつてた時、君の顔が解つたらうか？』と暫らくしてからラスコーリニコフは到頭口を切つた。

『むゝ、僕の在るのが時々君の神經に觸るやうだつたよ。殊にザミョートフを伴れて來た時は。』

『ザミョートフ？　警察の書記のザミョートフかい？　何しに那樣な奴を伴れて來た？』と俄に向直つて眤とラズーミヒンを見た。

『何しに？　何故其樣な妙な顔をする？　君の事を種々話したら、是非懇意になりたいッてからだ。此男からでなくて誰から君の近狀を委しく聞くもんかナ。あれはネ、中々立派な人物で、職務上にも頗る敏腕だ。今ぢやア僕と親友の關係で、殆んど毎日會つてる。夫れから僕はッイ此近所に轉して來たが、君は那のルイザを知つてるかい――ルイザ・イワーノウナをさ？』

『我輩は下らん譫言でも饒舌つたか知らん？』

『そんな事は先ア宜いやナ、心配する事ア無い。』

『どんな譫言を云つてたらう』

『誰も云ひさうな事を云つてたのサ。そんな下らん話は止めにして、用談から片附けよう。』と云ひつゝ起ち掛けて、帽子を手に取つた。

『如何な譫言を云つてたらう？』

『其樣な要でもない事を最う繰返す勿ッてば。秘密が洩れちやア大變だと心配するんだらうが、大丈夫、安心し給へ。伯爵夫人の事なんか云はなかつたからネ。ブルドッグだの耳環だの時計の鎖だのクレストフスキイ島だのと云つてたつけ。然うく、何處かの家番の事や、ニコヂーム・ホミーチだのイリヤー・ペトローウチだのと頻りに饒舌つてたつけ。一番滑稽だつたのは靴サ。餘程大切だと見えて頻りに訊くから、ザミョートフが部屋の隅々を索して、汚ない玩弄物じみた靴を漸と發見け出して、香水の匂ひのする指環だらけの手で恭やしく君に捧げたのは餘程滑稽だつたよ。だが、其時だけだネ、大變安心したやうに氣が鎭まつて、一日緊かりと靴を抱へ込んでて容易に離さなかつた。大方猶だ君の服の何處かに在るだらう。――扨て用談に掛るが、妥に

君の金子が三十五留ある。此中から十留持つてくからネ。其費途は跡で勘定するよ。宜いかネ、夫れからゾシーモフが最う來る時刻とは思ふが、烏渡知らして來る――最う十二時だ。バーシュンカにも命令けて置かにやァならん。ぢやァ、烏渡失敬する！』

『主婦さんの事をバーシェンカ、バーシュンカつて、ほんとに猾い人だワ、』とナスターシヤもラスコーリニコフに捨臺詞を殘して部屋を出で去つた。階段の途中で烏渡佇立つて立聞きしようとしたが、何にも聞えないので其まゝ辷り下りた。が、ラズーミヒンと主婦の對話を氣にして、一生懸命に聞取らうとした容子で推すと　此奴もラズーミヒンに戀着つてるやうだ。

部屋の扉が閉るや否、病人は俄に衣服を掻なぐり棄てゝ、狂人のやうに床から飛出し、今まで衆人が在なくなるのを待ちに待つて耐へてゐたので、夢中になつて立躍かつて、直ぐ仕事に取つて掛らうとした。『が、何を？　何をするんだ？』と自問自答しつゝ、何しに周章てゝ床を飛出したのか解らなくなつて了つた。

『主よ！　主よ！　願くは唯此事を告げ給へ！　渠等は盡く知るや、或は未だ知らざるや？……何も彼も盡く知り拔いてながら、故と佯惚けて、俺が臥てゐるのを好い嬲り物にして、他へ行つては會ふ人毎に一々饒舌り散らしてるんぢやないかナ。夫れとも渠等は唯――？　コリヤ如何すりや宜いんだ？　考へたかと思ふと直ぐ忘れて了ふ！』

と思ひつゝ部屋の眞中に矗立つて、ボカンと周圍を見廻してゐたが、俄に周章てゝ駈出して、扉を排けて見て耳引立て、愈々誰も在ないと見究めてから再た駈け戻つて、壁紙の下の穴の中を探つて見たが何にも無かつた。夫れから暖爐の灰燼を搜すと、衣兜裏が投込んだなりになつてゐたが、誰も見た容子は無かつた。其中偶つとラズーミヒンが靴の話をしたのを憶出して、急いで服の下から引摺り出して見ると、矢張泥ぼつけのまゝで、ザミョートフも一向氣が附かなかつたやうだ。

『ザミョートフ――警察！　全體何で呼出されるんだらう？　何處へ召喚狀を置いたつけナ？　ちよッ、復た頭腦が混線して來たぞ。警察の召喚は先日――

それッ、俺が此靴を驗めた日ぢやないか。夫れから以來病氣になつちまつたんだが、ザミョートフ奴が一體何しに遣つて來たらう？　ラズーミヒンが又何しに伴れて來たらう？』と勞れ切つて寢床に倒れたなりに獨語ちた。『こりや尋常事ッちやァ無い。熱は尙だ有るらしいが、無けりやァ逃出す處だ。イヤ、有つても逃出さにやァならぬ、直ぐ、唯つた今直ぐ。少とも早く、――と云つて、何處へ逃出す氣だ？　やッ、服が見えなくなつたぞ？　靴も？　みんな失くなつちやつたぞ？　秘しやァがつたナ、秘したに違ひない！　が、難有い、上衣が有る。金子が有る。之だけ持つて、誰にも解らぬ何處かの下宿に轉しちまはふ。が、轉しちまつた處で戸籍役場で直ぐ搜し出されッちまふ、ラズーミヒンも躍ぎつけるだらう。寧その事、亞米利加あたりへ高飛びして挑らしてやるかナ。此の證文は何かの役に立つかも知れんから持つてくとして、其他に何を持つてかう？　渠奴等は俺を病人と思つてるから、逃出さうとは豈夫思つてまい。渠奴らが何も彼も感づいてるのは眼付で能く解る。が、首尾よく此の階段を降りて了ひさへすりや何でも無いが……事に由ると警察

から見張を附けてあるかも知れん。何とも解らん。――何だ、是りや？　茶かナ？　ホウ、怎ういふ時の氣付になる麥酒だ！』

丁度一杯ほどしか殘つてゐない麥酒を、恰で咽喉が燒附いてるかのやうに一と息に飲乾すと、忽ちカッと上氣して、輕い快い戰慄が全身に走つた。で、寢床に戻つて衣服を引被ると、麥酒の勢で面白くなり、一つには頭顱を休ませた新らしい枕の寢心能さに助けられてウッラ〳〵と輕い樂しい睡眠に就いた。軈て誰かが部屋に入つて來たやうな氣持がしたので、偶つと眼を開くと、忽ち眼に映つたのはラズーミヒンで、扉口に立つて入らうか入るまいかと躊躇してゐらしかつた。

『やッ、起きたネー　ナスターシャ、あの袋を持つて來な。』

『何時だい？』とラスコーリニコフは憮然したやうに周圍を見廻した。

『六時だ。六時間打通し睡ッちまつたんだぜ。』

『え、六時間？　そんなに睡ッちまつたかナ！』

『オイ〳〵、周章てなくたつて時間はあるよ。度々來て見たが、毎次でもグ

ツスリ熟睡んでるから、ゾシーモフの許へ二度行つて見たが、二度とも留守サ。實は僕は、伯父貴と一緒に今日移轉をするんで中々忙がしいんだ。然う然う、君には尙だ話さなかつたが、近頃伯父貴が來てゐるんだ。尤も伯父貴が來てゐたつて少とも違慮する事ア無いぜ、宜いかい。處で、ナスターシヤ、其包を取つて呉れ。如何だい、氣分は？』

『悉皆快い。最う何とも無い。君は何かい、餘程前から來てゐたかい？』

『最少し前に來たつて、今云つたぢやないか？』

『イヽヤ、其の前の時を訊くんだ？』

『其の前の時とは？』

『初めて爰へ來た時サ。』

『初めて來た時かい？　悉皆話したぢや無いか。最う忘れたのかい？』

ラスコーリニコフは考へ出さうとしたが、何だか混雜しちまつて解らぬので、遣瀨なさゝうな眼をしてラズーミヒンをジロリと見た。

『猶だ頭腦が混線してゐるナ。けれども一ト寢入して餘程快いやうだぜ、第

一血色が好くなつた。眞個とも！』とラズーミヒンは云ひつゝナスターシヤの持つて來た袋を取つて、『どうも忙がしかつた、君を人間並にしようと思ふんで。見て呉れ、』と袋の中から、外見が上等らしくて實は頗る安物のお手輕な廂帽を攫み出し、『如何だい、冠つて見ないか。』

『今は不可、』とラスコーリニコフは押返して了つた。

『然う云はずに先ア冠つて見て呉れ。遲くなるから依違しちやをらんが、上手な買物をして來た意だから、一々適ふか適はんか見屆けない内は寢られやせんワ。之でも此の帽子は極新形だぜ。幾何出したと思ふ？』と云つたが、ラスコーリニコフの返事が無いので、ナスターシヤに向つて、『お前は幾何だと思ふ？』

『然うネ、二十哥。』

『二十哥！　馬鹿ッ！』とラズーミヒンは怒つて了つた。『八十哥だつて此ごろは買へるもんか。さア、今度は學校の所謂合衆國（ズボンを酒落れた異名）の番だ、』と可成上等な汚點一つ無い薄地の夏ズボンを廣げて見せた。夫れから少と大き

過ぎるかと思ふ胴着を出して、『少し緩つくがネ、闕やせん、緩々した方が着心が好いもんだ。何でも君、時候相當にすりやァ宜いんで、アスパラガスが正月のもんでないなら態々心配して正月の食卓に出すには及ばん。其方が儉約になる。といふのが僕の買物の流義だ。夏だから夏物を買つたんで、濃くりした秋服の季節になればなるで、服の方から御免を蒙むらなくても君の方で御免を蒙むつちまふのサ。處で直段だが、君は幾何だと思ふ？　二留と二十五哥だぜ。加之に今年の中に切れッちまふやうなヤクザなら來年は無償で他のと代へると云ふ條件付きだ。扨て今度は靴だが、鳥渡見ると大分穿き古るしてるやうだが、之でも舶來だから一ト月や二タ月は保つ。英國大使館の書記生が金子が要るんで賣つたので、尙だ唯つた一週間しか穿かんのださうだ。そこで直段がといふと、唯つた一留半！――てのは、之こそ眞個に、何て間が好いんでせうだ。』

『だけども寸が適はないかも知れないワ、』

『寸が適はない？』と衣兜からラスコーリニコフの膏藥だらけの泥靴の片足

を出して、『そんな事に如才があるもんか。キチンと適ふ奴を捜して來たんだ。夫れから麻襯衣が中々面倒臭かつたが、夫れでも流行の胸の附いた奴を三枚取つて來た。そこで總〆高が、帽子が八十哥、服が二留二十五哥、靴が一留半、襯衣が五留――〆めて九留五十五哥になる。さッ、お釣が四十五哥あるから、取つとき給へ。之で悉皆支度が出來た、立派な流行紳士が出來上つちまつた。尙だ靴足袋や何か細かいものがあるが、君が自分で買つて來るサ。宜いかい、二十五留殘つてるよ。宿料の事なんか心配しないでも宜い、主婦と好い具合に妥協しといたから。さッ、先づ襯衣を着換へ給へ。』

『イヤ、着換へないでも宜い、』と滑稽交りの買物咄を苦り切つて聞いてるたラスコーリニコフは權もホロ、に、『何處から此金子を出して來た？』

『金子？　君の金子サ、何故？　ワクルーシンの手を通してお母さんから送つて遣した金子サ。――忘れたかい？』

『むゝ、憶出した、』と良や暫く佛頂面をしてゐた後、漸と答へた。

此時扉が排いて、脊の高い肥辟した男が宛も此病人を見馴れてゐるやうに

馴れ〳〵しく入つて來た。

『來たナー』とラズーミヒンは嬉しさうに號んだ。『お醫者さんが漸とこさ來た！』

第四回

ゾシーモフは脊の高い肥胖した男で、二十七ぐらゐだらう乎、色白の丸顔をスベスベと奇麗に剃つて、美くしい髪毛を五分刈にしてゐた。眼鏡を掛けて、大きな金指環を肉太の指に喰込ませ、流行の粋な夏服を着て、何も彼も新らしいづくめの、襯衣から何から五分の隙も無いリウとした服裝で、其上にドッシリした時計の鎖が一段と男振を引立たせた。動作が何となく尊大であつたが、同時に骨を折つて一生懸命に無造作を粧つてゐるのが、故と何氣ない顔をしてゐても、如何にも白々しかつた。醫者が何よりも難有がられる病室ででもなければ、如此な虚飾家の氣取屋は誰でも鼻摘みだらう。

『君ん許へ二度行つたぜ、』とラズーミヒンは聲を掛けた。『漸と今、目が攪めた處だ。』

『あッ、然う……如何ですエ？』と病人に向つて云ひつゝ、聯んで長椅子に腰を掛け、出來るだけ器用に體裁よく自分の足を片附けた。

『餘程脱線してゐる。變だよ。迂闊り襯衣を着換へさせうとしたら叫りつけさうにした、』とラズーミヒンは云つた。

『嫌がるなら後刻で換へさせるのサ。猶だ脈が弱い。如何ですエ、矢張頭痛がしますかエ？』

『癒りました。全治しました。』とラスコーリニコフは焦り〳〵しながら起返つて、眼を燦つかして醫者を屹と視た。が、矢張意義になつて、直ぐ再た以前の通り倒れて、壁の方を向いて了つた。

『結構、段々快くなります。何か喰べましたかエ？』と訊いてから更に、何を與つたら宜からうかと訊かれて、

『何でも——肉汁でも茶でも。だが、蕈類や胡瓜は不可ませんナ、牛肉も矢張不可。處方は前方通りとして、何れ明日復たお見舞ひに來ますから、今日は夫れで宜しい。夫れから……』

『明日の晩運動に伴れてかうかと思つてる、』とラズーミヒンは云つた。『ユスーポフ公園から水晶宮の方を漫歩して見る意だが、如何だらう？』

『迚も猶だ、中々動かれますまい。左に右く何れ復たお目に掛る。』

『不可かネ。困つたナ！　實は之から、爰から二タ歩と離れない僕の新居の座敷開きに伴れてつて、恁ういふ風に僕達の中央に、長椅子の上に病人を臥かしといて、と思つたんだが。君だけは來て吳れんかい？』

『難有う、成るべく都合して。だが、御馳走は何がありますエ？』

『何にも無い。茶とブランデイと、鯡と菓子ぐらゐなもんサ。』

『誰方か特別なお客がありますかエ？』

『若い連中を除くと、鳥渡した用事で上京したばかりの伯父貴——五年越しの會はなかつた伯父貴が來てゐる。』

『如何いふ方ですエ？』

『伯父貴かい？　地方の郵便局長を殆んど一生涯勤續して、今ぢやア恩給を貰つてる、今年六十五になる到つて無事な爺さんサ。特別に吹聽するほどの能は無いが、僕は此伯父が大好きなんだ。夫れから豫審警部のポルフォーリ！ペトローウチも來る筈だ。君はたしか此男を知つてたナ？』

* Porphyri Petrovitch

『渠奴が君の親類かい？』とラスコーリニコフは矢庭に横合から容嘴した。

『むゝ、遠い何かに當るんだ。……何だい、其の顰めッ面は？　警部だからつて、其樣な面をする勿よ、尤も警察の奴らと口論つた君だから、顏を合はせるのが嫌かも知れんがネ……』

『會つたら痰でも引掛けてやらうと思つてる。』

『そいつも宜からう。其他は大學生、學校教師、官吏、音樂師てな連中だネ。夫れから警察の書記のザミョートフ——』

『ヘーエ……ザミョートフ！　君方とザミョートフのやうなものと能く交際へますナ？』とゾシーモフは不思議がつた。

『理窟屋だナア。理窟屋てものは理窟にばかり囚はれてるから融通が利かんで困る。善人だから好きだ——てのが僕の流義で、外には理窟も絲瓜も無い。善人となら誰とだつて交際へるサ。ザミョートフはあれで中々な人物だよ。且彼の男と僕とは共通の興味を持つてる問題があるんで——』

『ヘーエ、共通の興味？　何ですエ？　聞きたいもんですナ。』

『そいつかい、ペンキ屋の一件だ。實は或るペンキ屋が殺人の嫌疑を受けてるのを二人して助けてやらうと盡力してるんだ。最う大抵落着する。事實が極めて明瞭になつて來たから——』

『殺人の嫌疑を——ペンキ屋がですか？』

『尙だ話さんかつたかネ？　其の起因だけは聞いてるだらう——そら、あの老婆殺しの一件、あの一件でペンキ屋が嫌疑を受けてるんだ。』

『あッ、あの老婆殺し。あれなら聞いてます。我輩も一つの問題として多少の興味を持つて新聞で讀んでます。』

『ねエ貴君、リザウェータも殺されたんですつて、』と今まで扉の傍に在て聞いてゐたナスターシャはラスコーリニコフに向つて云つた。

『リザウェータが？』と聞えるか聞えないかの低音でラスコーリニコフは云ひ返した。

『リザウェータ——貴君も知つてるワネ。そら、貴君の襯衣を時々繕して呉れた人だワ。』

ラスコーリニコフは例の通り壁の方を向いたまゝ、汚れた黄色い壁紙の模様になつてる小さい白い花を機械的に見て、花瓣や葉を一枚々々勘定し初した。四肢は全で麻痺れ切つて、胴から下が斷れて了ひさうな氣がしたが、剛情に壁紙の花の研究を仕續けて氣を散らすまいとしてゐた。

『夫れで、ペンキ屋が如何しました？』とナスターシャのお饒舌を煩さがるやうな容子をしつゝゾシーモフは云つた。

ナスターシャは歎息して默つて了つた。

『ペンキ屋が殺人罪に擬せられてゐるんだ』とラズーミヒンは云つた。

『如何いふ證據があつて？』

『證據！　證據も何も有るもんか。證據としてゐるものが一向證據になつとらんのだ。全で躾ぎ損つてるんで、コッホやペストリャーコフに於けると同樣、警察の行り口が愚を極めてる、全で無茶だ。――ローヂヤ、君は何か聞込んだ事ァ無いかネ？　君が病氣になる直ぐ前の事ッて……ほら、警察で君が卒倒したらう、あの時みんなで話してた一件サ。』

ゾシーモフは、身動きもしないでるラスコーリニコフを不思議さうに瞻視めつゝ、ラズーミヒンに向つて、

『我輩なら君に眼星を着けますナ。何にも關係のない事に一生懸命になるなんて、餘程妙ぢやァ有りませんか。』

『御心配には及ばんよ。僕等は法律の不都合な濫用から此の氣の毒な犧牲を助けてやらうッてのだ、』と拳を固めて卓子を敲きながらラズーミヒンは聲張上げ、『如此な無法極まつた事があるかい。勝手放題に好い加減な空想を混ち上げては各自に埒もない屁理窟を捏ね返してる。警察の頭腦の無茶なのは、一例を擧げると恁うだ。扉が閉つてゐた、家番を呼んだ、來て見ると扉が開いてゐた。そこでコッホとペストリャーコフが做た仕事に違ひないといふ――恁ういふ筆法なんだ！』

『然う一概に排斥したもんでもない。唯拘留されたばかしでせう。そんなら此手續きを踏むのが當然です。コッホといふ男には確か一度會つた事があるやうに思つてるが、殺された婆さんの流れ質を引取る奴でしたナ？』

『然うサ、其の野郎だ、支拂手形まで買込む奴だ。之が商賣なんだ。何ァに、那樣な奴は如何でも關はんが、警察の奴らの愚な無茶な行り口が如何にも癪に觸る。眼前の事實々々と番毎に云ひくさるが、事實は何でも無い、其の事實の解釋如何が大切なんだ。』

『そこで君にはチャンと解釋が出來てるんですナ？』

『先ァそんなもんサ。且、何んな奴にしろ、助けられるもんなら默つちやゐられないネ、――君だつて委しい咄を知つてりやァ――』

『その委しい咄を先刻から待つてるので。』

『ぢやァ聞き給へ、恁うなんだ。人殺しがあつてから三日目の朝だネ、警察の奴らがコッホと今一人の男を、渠等の一擧一動が盡く明白に解り切つてるのに猶ほ調べてると、其の眞最中、思ひも寄らん事件が突然明るみへ持出された。殺された婆さんの共同長屋の眞向ひに麥酒屋を出してるゾーシキンて奴がだネ、金の耳環を入れた函を持つて警察へ、「へイ、お訴へ致します、」と訴へて來たんだ。宜いかい、之からが此のゾーシキンの申し立てだよ。「一昨夜

の八時少し過でムります、豫て見知越しのペンキ屋のニコライて奴が來まして、此の耳環を抵當に二留貸して呉れと申します。「何處から持つて來た？」て訊きますと「戸外で拾つた」と申します。容子が少と變だから餘程貸すめエとは思ひましたが、私が貸さねエと他へ持つてくのが解り切つてますし、同じ縣の者ですから、ツイ深く訊きもしねエで貸してやりました。此奴は强酒漢て程ぢやァムりませんが、矢張飲けます方で、ミトレイと組合つて一つ仕事を請負つてる事も存じてます。――

『すると野郎は直ぐ紙幣を壞して、二杯引掛けて、釣錢持つて飛んでッちまひました。ミトレイの姿は見掛けませんかつた。處が其の翌る朝、老婆殺しの一件が私の耳に入りますと直ぐ、野郎の持つて來た耳環がギックリ胸に應へて、必定婆さんが質に取つた代物に違エねエと感づきましたから、一番首根ッ子を取占めて呉れうと、工風をしい〳〵出掛けまして、「おい、ニコライは在るか？」て訊きますと、ミトレイの野郎が一人ぽッちで、「在ねエよ、昨宵ッから飲みに行つて、黎明に圖部六に喫ェ醉つて歸つて來やがつたが、十

分經たねェ内に復た何處かへ出て失せやがつて夫れッきりだ。仕方が無エから俺ア單獨でコツ〳〵やつてる」と、恁ういふ埃拶で、成程野郎は在ませんかつたが、大抵見當は附きましたから、昨日は夫れなり息にして置きますと、今朝の八時頃ですかナ、ニコライの野郎がノツソリやつて來ました。そんなに醉つてませんし、談話も差閊なく出來ましたが、何だかソワ〳〵沈着かねエで、默つて腰掛に掛けてました。丁度店が空いてまして、知らねェお客が一人と、睡てゐる男が一人と、私の許の給仕が二人きりでしたから、こつそりと、「おい、ミトレイに會つたか」て訊きますと、「いゝんや」と云ひます。「昨夜は何處エ眠た？」「草船ん中。」「何處から耳環を拾つて來た？」「道路で」と、からもうオド〳〵してゐます。夫れから、「お前の家の騒動を知つてるか」て一本突込みますと、青菜のやうになつて、「いゝんや――うむ、少とは聞いてる」とヘドモドして、私が睨つと野郎の面を睨めてますと、堪らなくなつたと見エて、帽子を持つて逃げに掛るから、「先ア一杯引掛けてけ」と安心させて、小僮に扉を閉めさせうと目禁する間もなく、野郎め敏捷こく逃

出しました。此野郎と直ぐ追掛けましたが、最う影も形も見えません。惜しい事をしましたが、何でも此野郎が下手人に相違ムりません、――と。恁ういふ訴へなんだ。」

「成ッー」とゾシーモフは膝を叩いた。

「まア最終まで聞き給へ。夫れッてので、八方手を分けてニコライの行衛を搜索した。ゾーシキンもミトレイも拘留し、草船は勿論八方に手を廻した處が、到頭△△門の傍の居酒屋で警察の網に羅つちまつた。ニコライの奴、其處へ遣つて來て、首に懸けてる銀の十字架を外して、之でブランデイを飲ませろッて云つたさうだ。夫れから五六分も經つてからだ、直ぐ傍の乳屋の女が乳搾りに牛舍へ行つて、何心なく破目板の破れの隙から覗くと、渠奴めが首を縊らうとする處だから、喫驚して多勢呼んで來て留めッちまつたが、何でも「警察へ伴れてけ、盡く白狀する」ッて叫くんで、警察へ引渡しちまつた。之からが警察の訊問始末だよ、宜いかい、――

『問「其方はミトレイと仕事をしてゐる最中、階段を昇つて來たものを見掛

けなかつたか？」答「ヘエ、確に誰か昇つて來ましたが、ツイ顏は見ませんかつた。」「非常な物音か何か聞かなかつたか？」「一向何にも聞きませんかつた。」「然らば其方は斯々の時間に老婆さんと其妹が殺害されて品物を奪はれたのを其日に知らなかつたか？」「存じませんかつた、三日目に麥酒屋でア*ファナッシー・パウルッチ（麥酒屋の主人）から初めて聞ました。」「何處で耳環を拾つた？」「道路で。」「何故翌日ミトレイと仕事をしに歸らんかつた？」「休日を取りましたから。」「何處へ行つてゐた？」「彼地此地を徜徉してをりました。」「何故ゾーシキンの許から逃出した？」「恐くなりましたから。」「何が？」「お上の御規則が。」「何にも惡い事をしないなら少しも恐い事は無い筈だ？」——てな、如此な問答があつたもんだ。如何だい、ゾシーモフ、君は如何思ふ？無論、此の訊問は高飛車で威丈高に極めつけたんだよ。如何だい？　恁ういふわけだとして、君、先ア想像して見ろ！』

『證據が成立してますナ。』

『猶だ證據の咄にやなつとらんぜ。恁ういふ訊問をされたつて咄をしたばか

りだ。夫れから段々問詰めたり責めつけたり揚足を取つたり鎌を掛けたりして到頭白狀さした。「實は道路ぢやありません、」と眞實の事を言ひ出した。「ミトレイと仕事をしてゐた部屋の中で拾ひました。」「其の顚末を申し立てろ。」

「恁ういふわけでムります、私はミトレイと一緒に八時まで一日働きまして、之から遊びンでも出掛けようッて時、ミトレイが唐突刷毛で以て私の顏に薔薇色ペンキを塗りつけて逃出しましたから、私は踵を追掛けて階段を駈降りて、漸とこさと門の傍で捉へました。すると其所に三四人の家番が旦那方と在まして、私等が騷ぐのを叱言を云ひました。通り縋りの奥さん同伴の旦那からも矢張叱られましたが、私はミトレイの毛を攫む、ミトレイは組附いて來るてな騷ぎで、尤も眞劍ぢやァ無エんで、調戯に取組合つてましたが、到頭ミトレイの奴は手を振解いて往來へ飛出しましたから、私も跡から追掛けましたが、如何しても捉らねエから、道具でも片附けてミトレイの歸るのを待つてようと思つて、戻つて來て、部屋の中に佇立つてますと、偶つと眼に留つたのが此匣で、不意ふらくッと出來心で拾ひました。ヘエ、扉の直ぐ

傍に落ちとりました。』

『扉の傍？　扉の傍て云つたか？』とラスコーリニコフは矢庭に叫んで、目の色變へてラズーミヒンをジロリと見ながら、兩手を突張つて靜かに起返らうとした。

『むゝ、然う云つたが、何か思當る事ツてもあるかい？』とラズーミヒンはグルリと顧眄つた。

『イヤ、何にも無い。』と力の無い聲で云ひつゝラスコーリニコフは再た靠返りして了つた。

暫らくは一同默つて了つた。

『半分寢惚けてるんだナ。』とラズーミヒンは訝しげに云ひつゝゾシーモフをジロリと見ると、ゾシーモフは輕く點頭いて見せた。

『夫れから、』とゾシーモフは待遠しさうに、『夫れから如何しました？』

『夫れから？　夫れから直ぐ部屋を飛出して、ミトレイの事も何も彼も忘れツちまつて、ゾーシキンの許へ駈けてつて、貨幣に代へて貰つて飲みに行つ

ちまつた。これッきりの話だが、さて此話を總括めて正味の結果を君は如何判斷する？』

『形跡はありますナ。』

『そこでだ、警察の奴等は此のペンキ屋を殺人罪に擬して、毫しも疑ひないものとしとるんだ。』

『君は單獨で憤激してゐるが、第一に耳環ですナ、此の耳環が婆さんのトランクの中から、シカモ其の日に出たもんだといふ事は無論同說でせう。すると何か其處に仔細がなくては。』

『無論サ。だが先生、君のやうな立派な判斷力もあり令名もあつて、しかも人情にも能く通じてる先生が、之れ以上深く洞察する事が出來んかい？　今話したのが眞實で、渠奴が白狀した通りの手續で耳環が手に入つたに違ひないのが君には解らんかい？』

『けれども渠奴は初め虛言を吐いてますぜ。』

『宜いかい。能うく聞き給へ。家番と、コッホと、ペストリャーコフと。家番の

女房と、夫婦連れの紳士と、八九人が廣庭でミトレイとニコライの取組合つてるのを面白がつて見物してたんだぜ。若し渠奴等が二人で、或はニコライ一人で人を殺してから直ぐ飛出して來たもんとすると、爰に疑問がある。死骸が發見された時まだ溫味が有つたッてから、少くも兇行はニコライとミトレイが道路へ飛出した前漸つと五分か十分の間に行はれたに違ひない。すれば今直ぐ瞬く間に犯罪が發見されると知りつゝ那樣な調戯けた所爲をしてるたッてのかい？　實際兒供のやうにタワイなく調戯け散らしてたのは十人も目擊者がある！』

『成ッ、然う云やァ少し妙ですナ。實際有り得可からざるやうにも思はれるが、しかし……』

『此場合「しかし」も何も無い。勿論耳環が速かにニコライの手から發見されたッてのが渠に取つて頗る不利益な點だが、有利の諸點と十分差引く事が出來る。困る事には警察の奴らが心理上から判斷しないで、唯赤裸々の事實を其儘に見とるんだ。之が癪に觸る！』

『成程君が憤激するのは道理だが、全體其の耳環が婆さんの所有だつていふ確實な證據が有るんですかエ？』

『そいつはコッホが能く覺えてゐて、誰の所有品だつて事までチャンと解つてるんだ。加之に置主が取戻しを請求して來たさうだ。』

『コッホとペストリャーコフが階段を昇つて行つた時刻にですナ、ニコライが自分の部屋の中に在たのを見掛けた者が、誰か無かつたでせうか。こいつを如何かして證明出來ると宜いんですがナァ。』

『夫れが出來んのだ。』とラズーミヒンは寧そ殘念さうに、『コッホやペストリャーコフがニコライの部屋の前を通りながら氣が附かなかつた。扉が排いてたのは知つてるが、職人が中に在たか在ないか覺えとらんて云ふんだ。』

『然うすると、何う解釋します？　品物の發見をですナ、――ニコライの陳述を假に眞實としてゞすナ。』

『何う解釋する？　解釋も絲瓜もあるもんか。事夫れ自身が明々白々ぢやァ無いか。耳環が一切を解釋してる。何でもない。あれは君、眞實の兇行者が

遺失してつたのサ。宜いかい、コッホとペストリャーコフが四階の婆さんの扉を敲いた時には、兇行者が中に在て扉を押へてたんだよ。處がコッホの奴がドヂをやつて階下へ降りてつたらう。其間に兇行者も拔け出して、外に通路が無いから、跡から階段を降りて途中まで行くと、そら、下から家番とコッホが昇つて來たらう。そこで一本道ではあり、逃場が無いから、丁度ニコライとミトレーが道路へ飛出したのを倖ひに、跡の空部屋へ滑り込んぢまつて、コッホと家番をやり過ごしてから階下へ駈け拔けて、丁度戸外ぢやミトレーとニコライが取組合つて騒いでる眞最中で、二人の喧嘩に多勢が氣を取られてる隙を覘つて、まんまと首尾よく逃果しちまつたんだ。耳環は其時兇行者の衣兜から覆れ落ちたんで、扉の傍に落ちてたつてのが卽ち兇行者が其處に隱れて た何よりの證據になる。』

『巧い！　が、ラズーミヒン、君のは少と巧過ぎますよ。』

『何故サ？』

『あんまり巧く出來過ぎてゐて、全で芝居ですナ。』

『ひやア！』とラズーミヒンは號んだ。丁度此時、扉が開いて、誰も知らない顏が突然現れた。

第五回

闖入者は餘り若くない、頗る勿體振つた、傲慢な男で、其癖みゝつちさうな吝い面をしてゐた。扉口に佇立つて、無遠慮に臆面もなく驚いた顏をして四邊を見廻し、左も『何處へ行つたら宜からう、』てな鹽梅式に、不安心さうなキョト〳〵した風をして、天井の低い薄暗い部屋を散三ジロ〳〵見廻した擧句が、着物も着たまゝなら顏も洗はないで、悲慘らしい汚ない長椅子に横になつたなりに傍若無人な猜疑の眼を睜つて屹と不時の闖入者を睨まへてるラスコーリニコフ其人に眼が留つた。沈默が良や暫時續いた。軈て少しく氣色を和らげて叮嚀に、且嚴乎べらしくゾシーモフに向つて、一語々々に力を入れた切口上で、

『拙者は大學生、イヤ、以前大學生であつたラスコーリニコフに面會を望みますが――爰に居りますか？』

ゾシーモフは物臭さうに横を向いて、何か云ふ意らしかつたが、其矢先き

にラズーミヒンが先を越して、『あすこに、寢榻に臥てゐるよ。何か用がありますかい？』此の『何か用がありますかい？』といふ馴れ〳〵しい言葉が紳士の權威を傷つけたとでも思つた乎、怫然として顏を外らしたが、忽ち思直してゾシーモフを屹と見た。

『ラスコーリニコフなら彼處に在ます。』とゾシーモフは寢榻の方を頤で指して、大きな口を開けられるだけ開いて思切つて長々と大欠伸をした。欠伸がお終ひになると、今度は衣兜から時計を引摺出して、悠々と蓋を開けて瞻めてから再び悠々と胴着に入れた。

此間ラスコーリニコフは始終横になつたぎり、執拗く新來の訪問者を睨み通してゐた。恐ろしい青い顏に深い不安と疲勞とを現はして、宛も非常に骨の折れた大仕事をして來たか、或は拷問の庭から今戻つて來たばかりのやうだ。で、降つて湧いたやうに見ず知らずの男が飛び込んで來たのが、初めは珍らしかつたが、後には疑ひとなり、終には恐怖と變じて、『ラスコーリニコフなら彼處に在ます、』とゾシーモフが頤で指した時は、躍上らんばかりに跳

起きて、調子外れの苦なさうな聲で、

『我輩がラスコーリニコフ！　何か用ですか？』

紳士は眤ッと見てゐたが、軈て、

『拙者はピョートル・ペトローウヰチ*・ルージン。拙者の名を全で御承知にならんて筈は無い。』

ラスコーリニコフは全で見當の違つた事を待設けてゐたらしく、ケロンとして茫乎對手の顏を瞻視めつゝ、何とも返事をしないで、初めてルージンの名を聞くやうな顏をしてゐた。

『はてナ、拙者の事に就て何にも御承知にならんて筈は無いが、』とルージンは聊か照れて了つた。ラスコーリニコフは返事の代りに、悠々と再た枕をして、兩手で頭を抱へて天井を瞻視めた。ルージンの不滿は徐々顏に出て、ゾシーモフとラズーミヒンとが眤ッと看守つてると知つてゐても中々腹の蟲が納まらなかつた。

『そんな筈は無い、十分に時日を測つて來たんだ。少くも十日前、乃至二週

* Pyotr Petrovitch Looshin

間前に出した手紙だから……』

『先ア君、そんな處に立つてないで、』とラズーミヒンは俄に嘴を容した。『用談があるなら、先ア掛け給へ。ナスターシヤ、お前は其方へ寄んな。さア、此方へー　最つとピッタリと。さア、此椅子へ。』

ルージンは狹隘ましい部屋の中で、危なく人の足に躓かうとして蹌きながら、卓子の下から引摺出した椅子に腰を掛けた。

『怒ッちや不可ない。』とラズーミヒンは呵然と笑つて、『五日も前から病氣になつて、全三日昏睡し通しちやつたんだ。尤も今は大分快くなつて、少とは物も食べられて來たし、食慾も出て來た。此處に在るのは醫者さんで、僕は朋友、矢張大學生で、看護に來てをるんだ。そこで、如何いふ御用だか、伺ひたいもんだ。』

『夫れはく、御厄介でした。如何でせう、拙者が在て談話をしては病人に觸りやアしませんかナ？』とルージンはゾシーモフに訊いた。

『いゝンや、』とゾシーモフは、『却て氣晴らしになるかも知れませんナ、』と再

た欠伸をした。

『今朝から大分解つて來ましたよ。』とラズーミヒンは合槌を打つた。其の馴れ馴れしい口の利き方がルージンの癪に觸つてるのが歴然と解つた。

『貴公のお母さんは……』とルージンは口を切り初した。

『えへん！』とラズーミヒンは話の腰を折つたので、ルージンは妙な顔をして屹と見た。

『何ァに、何でもムらん。何卒。』

ルージンは肩を搖つて、

『貴公のお母さんは、拙者が上京する前に、貴公の許へお出しになる手紙を書いとられたが。實はペテルブルグへ着くと直ぐ參上るべきなのを今日まで差控へたのは、お母さんの手紙を御覽になつて、何も彼も御承知になつた時分にと思つて、故と日を遲らしたのでムるが、實に意外だ、今だに御承知になつとらんてのは……』

『知つてる、知つてる！』とラスコーリニコフは焦らくした聲で、『君は婚

さんかい？　知つてる、知つてる。最う澤山だ！』

ルージンは怫然として青くなつた。が、暫らく沈默して、左も詰問でもしさうな鹽梅式に向直つた。此沈默の間、ラスコーリニコフは再たルージンの顏を正面に睨ッと凝視めて、前よりは一層しげくと、宛も猶だ十分に見足りなかつた乎、でなければ全く別な相を新たに發見け出しでもしたかのやうに、態々起直つてしげくと凝視め出した。

全くルージンの風采や態度にはラスコーリニコフが眞向から頭ごなしに浴びせ掛けた「婚さん」の呼名に相應しい嫌味があつた。過ぐる數日間、花嫁の來るのを待構へて、自分の扮しの準備に掛つてゐたのは圖星外れッこの無い手相で、服も服屋から調製て來たばかりのリウとしたもんなら、立派な小形の山高帽も買ひたてのホヤくで、大切さうに兩手で持つて撫でたり摩つたりしてゐた。帽子と一緒に手に持つ羊皮の手袋も新調したばかりの上等品で、唯見せびらかしに手に握つてゐた。何から何までが薄色づくめで、型は何れも若々しく、華美な鳩色縞のネクタイが大粧しに粧した服裝を申分なく

した。ノッペリした中々な好男子で、四十五といふ齢に比はしては如何にも若々しく、黒い「カッレッ」鬚（露國の俗語）が奇麗に剃つた頤へ向つて好い具合にコンモリ生えてゐた。チラホラ白髪の交ぢる髪の毛は縮れてゐたが、能くある胡麻鹽頭のやうに笑止しくも滑稽けても見えなかつた。全く此の立派な男振を可惜代なしにするものが若し有るとしたなら、容貌以外の別の原因からで。ラスコーリニコフは無作法千萬にも暫らく穴の明くほどルージンの顏を左見右う見してゐたが、軈て無氣味な薄笑ひをして、枕に凭れて、前のやうに天井を向いて了つた。

ルージンはラスコーリニコフの變な素振を最う氣に掛けまいと覺悟したと見えて、漸く口を切り出した。

『惜しい事をした。貴公が御病氣だとは知らなかつた。恁うと知つたら、最つと早く參上るんだつけが、實に惜しい事をした。併し拙者の眼の眩るほど忙がしいのは御承知でせうナ。元老院に極めて重大な用事を控へてます上に、貴公がお察し出來る他の用件も捨てゝ置かれませんしナ。お母さんとお妹御

のお着も首を長くしてお待ち申して……』と云掛けた時、ラスコーリニコフが向直つて何か云出しさうだつたので、ルージンは口を緘んで了つた。が、何にも云出さないので、直ぐ言葉を續けて、『首を長くしてお待ち申して、既にお宿も取つときました。』

『何所へ？』と力の無い聲でラスコーリニコフは訊いた。

『此所から餘り遠くない處で、バカリョーフて家でムる。』

『知つてる。』とラズーミヒンは喙を容した。『ユージンて奴の持家だ。』

『左樣。』

『イヤ大變な所だぜ。汚ないにも何にも咄にならぬ。怪しい人間が出入して怪しい事件が沸騰する所だ。どんな奴が在るか解らんぜ。僕も一度頗る非常な事情があつて行つた事があるが手。だが、宿料は廉いよ。』

『拙者は都會馴れんから、一向事情が解りませんが、』とルージンはグッと來て、『左に右く極清潔な部屋を二室借りときました。勿論ほんの暫時拙者の借りた家の準備が出來るまでの間でムる。拙者も唯今は直ぐ其の傍のリッペウェフ

ゼリて家に青年の友人レベジャトニコフてものと一緒に居ります。其の友人が今の家を教へて呉れたので。』

『レベジャトニコフ？』とラスコーリニコフは靜かに其名を繰返して、何か思當る事があるらしかつた。

『はア、政府の役人をしとります。貴公は御承知でムるかナ？』

『うむ……いゝや』とラスコーリニコフは答へた。

『詰らん事を伺つた。失敬々々。此男は拙者が昔し後見した事がある可愛い奴で、若いにしては進んだ思想を持つとります。元來拙者は若い者に接するのが大好きでムる。若い者から新智識が得られますからナ、』と左も先輩振つて四方を見廻した。

『といふのは、如何いふ意味で？』とラズーミヒンが訊くと、

『極眞面目な意味で、』と其質問を我が意を得たりと云はぬばかりに、『例へば拙者如きはペテルブルグを去つて十年になる。有らゆる進歩改良とか新傾向とか新思想とかいふものは地方に入つて來ない事は無い。必ず來るには定つ

てるが、能く理解し能く會得し能く考察せんとするには矢張如何しても都會に在なけりや駄目だ。貴公等にしても矢張青年社會より先んじて新らしい事を知るわけには行かん。夫れだから拙者は青年に接するのが好きで、拙者の考は或は間違つてるかも知れんが、ヨリ明晰なる洞見、ヨリ精透なる批評的精神、ヨリ鋭敏なる推理力は得て青年社會に見られるやうだ。』

『如何にもお說の通り、』とゾシーモフは口早に答へた。

『でムらう？』とルージンはゾシーモフを馴れ〳〵しげにジロリと見て、『貴公は御同說だ。』―『なア、若いお方、』と云ひ足しさうにした。―『之が卽ち進歩といふもんだ。』と、今度はラズーミヒンに向つて云つた。

『一向無味らんネ！』とラズーミヒンは愛想氣なく云つた。

『イヤ、然う云つたもんぢや無い。例へば、「汝の隣人を愛せよ、」と古くから云つてるが、若し之を實行したら如何なる？拙者の衣服を半分割いて隣人に與つた所で二人とも半裸體になるが結局で、畢竟露西亞の俚諺通り、「數兎を逐ふ者は一兎をも獲ずして歸る」わけだ。今日の學說から云ふと、「總ての

もの以上に汝自身を愛せよ、世界に於ける何物も皆利己を基礎とす、夫故に汝は汝の衣服を割かずして保全せよ」と云ふ方が眞理で、經濟上の理窟から推しても、社會が此原理卽ち衣服保全の原理で組織されゝばされるほど其基礎が益々強固になる、耐久になる、個人の場合では猶更愈々安泰になる。であるから拙者は此主義を奉じて何でも勉めて獲得する意でゐるが、社會の人全體が各自此主義に隨つてゐたなら、何も慈善や例外の恩惠に浴さなくても、社會の普通進步の結果として、衣服を半分割いて貰ふよりか遙かにヨリ多くを得る事が出來るわけだ。』

『最う勘辨して呉れ。僕らは頗る鈍物だからネ、』とラズーミヒンは良や熱して來て、『そこらで御免を蒙らう。僕らが議論をするには必ず何かしら目的がある。面白半分の平凡くたな三年も古くなつた黴臭い空論は聞いてゐて顏から火が出る。君は有りッ丈の智惠を搾り出して僕らの前に表白するのに役々としとるんだから、夫れも宜からう。決して彼是れ云ひはせんがナ、唯一つ心得ときたいのは、――何を云つてるんだい！　最う澤山々々！』

『然う貴公のやうに、』とルージンは故と下から出て、『然う無愛想に云つたもんぢや無い、拙者も……』

『無愛想だつて？　無愛想結構！』とラズーミヒンはグルリとゾシーモフの方を向いて了つた。

ルージンは程よく切上げて歸るに如くはないと思立ち、『何れ御全快になつてから更めて、』とラスコーリニコフに對つて、『怎うして親類同士の特別の關係になつたのだから、此上とも益々御別懇に。取別け一日も早く御全快になるやうに祈ります。』と云つたが、何とも返事が無いので、やをら椅子から起ち掛けた。

丁度ラズーミヒンとゾシーモフとは夢中になつて話し込んでる最中で、『確に債務者の一人に殺られたんですナ、』とゾーシモフは云つてゐた。

『然うとも。然うとも。』とラズーミヒンは云つた。『ポルフォーリーも自分の說は言はなかつたが、專ら質の置主を調べてる。』

『質の置主を？』とラスコーリニコフは忙たゞしく訊いた。

『むゝ、調べてるよ。何故だい？』

『何故でもない。』とラスコーリニコフは云つた。

『如何して質の置主が知れましたらう？』とゾシーモフは訊いた。

『コッホが饒舌つたのもあらうし、質物の包に書いたつたのもあるし、品物からも解つたのだ。』

『何しろ奸智に長けた、腕に覺えのある不敵の曲者に違ひない。恁ういふ大膽な、恁ういふ思ひ切つた事をするッてのは。』

『イヤ、案外然うで無からうぜ、君の想像も一理あるが、事に由ると其反對で、大膽でも剛膽でもない、新米の皮切仕事かも知れんぜ。成程。鳥渡聞くと君の想像通りらしいが、能ッく考へて見ると、どうも然うらしく無い。全く偶とした機勢で浮かゝと行つちまつたんで、人が來ようなぞとは思つてなかつたやうだ。第一、高が十留か二十留の品しか盗つてかないッてのが、度胸の据らん證據で、後で調べたら襤褸切や簞笥や革櫃や其邊ら中から金貨で千五百留と銀行紙幣がザラ〳〵出て來たさうだ。餘程周章てたもんだと見

える。殺す事だけ知つてても、盗む方は全然咄にならん。』

『老婆殺しの一件を話しとられるんだナ？』と、先刻から帽子と手袋を握んだまゝ二人の對話を立ちながら聞いてゐたルージンは嘴を容した。歸りしなに何か怜悧振つた事を二言三言云つて見たかつたので、元來が何かにつけては出しや張つて人から目を着けられたがるのが病氣だから、忽ち性質の虚飾がムク〳〵として來たのだ。

『君も聞いてるかい？』

『はア、近所の事ッてすからナ。』

『委しい話を知つてますかエ？』

『知つてるとは云へませんがネ。他の點から大に此の事件に興味を持つてます。といふのは、最近數年間にですナ、下等社會に犯罪が殖えたり、强盗や放火の常習犯が著しく增加した事は今更云ふまでもないが、夫れよりも不思議でならんのは、高等社會の犯罪が矢張同一比例で非常に增加して來た事です。以前大學生であつたものが大道中で郵便を掠奪したり、最高階級の中か

ら紙幣の贋造者が出たりする。現に先日モスーコで彩票贋造者の一團體が捕縛されたが、其の主謀者が世界的聲名ある大學教授だから驚きます。夫れから外務の書記官が矢張金錢上の原因で、變な具合に殺されてますしナ。彼の老婆殺しの一件だつても愈々犯人を擧げて見たなら、平生婆さんと少しも交渉しない土方や人足の仕業ぢやなくて。意外な高等社會の人間かも知れませんぞ。元來如何いふ理由でせう、我々教育ある知識階級が如此なに腐敗したツてのは――何う解釋したもんでせう？』

『矢張經濟上の變革ですかネ？』とゾシーモフは云つた。

『何う解釋する？』とラズーミヒンは昂然として、『何うも恁うも無い、今日到る處に根を張つてる社會の病弊は處世上の暗愚で、ツマリ實際に迂遠だから如此な事が初まるんだ。』

『といふのは？』とルージンが訊くと、

『モスコーで教授の答へた事を聞いたかい？』とラズーミヒンは斷乎と、『何故彩票を僞造した？――ていふ問に對して教授の答へた理由が面白い。委し

い言葉は覺えとらんが、何でも其の意味は、世間では種々の手段で富豪になるものが其邊ら中に澤山あるから、自分も富豪になりたくて手取早く儲けようとしたツて云ふんだ。財産で生活したり、月給を貰つたりしてゐる連中、噛碎いたものばかり喰ひ馴れてる奴は、時勢が一變すると、お先き眞暗で全然駄目になつちまふ。』

『だが、いくら實際に迂遠でもお先き眞暗でも道德といふものがある。所謂道德の規律が……』とルージンが云掛けると、

『そんなに七面倒臭がらんでも、』とラスコーリニコフは矢庭に『君の主義通りぢや無いか。』と嘴を容れた。

『如何して拙者の主義通り？』

『君が先刻說法した理窟を極端まで持つてくと、人の咽喉笛を搔切つて殺しちやつても宜いわけだ。』

『飛んでも無い！』とルージンは號んだ。

『飛んでも無い事は無い、』とゾシーモフは云つた。

ラスコーリニコフは顫へる上唇を嚙み占めながら、呼吸も絶え〴〵に死んで了ひさうに蒼くなつてゐた

『經濟上の思想は……』とルージンは聲高に、『殺人の誘因にはならん。若し然う單純に言出したなら……』

『けれども眞理だらう？』とラスコーリニコフは不意に叫りつけた。底意地悪い調子の顫へ聲で、宛も心地よげに人を凹ましてゐる一種の野人の喜悅を包切れぬ顏をして、『君に云はしたら眞理になる。現に君は未來の花嫁に向つて、しかも花嫁が君の申込を承諾した其家で、面と向つて女房は貧乏人から貰ふに限ると明言して、君の未來の花嫁が乞丐同然なのを大に喜んでたぢやないか。貧乏人の中から女を拾ひ出すのが女房を選擇てる一番怜悧な行り方で、好き自由な壓制が出來ると云つて、散三ッぱら下目に見るやうな御詫を陳べて輕蔑したぢやないか。』

『飛んでも無い。』とルージンは勃然となつて顏を赤くし、『貴公、そりや大變な意味の取違ひでムる。失敬だが、辨解せにやならぬ。如何して其樣な事が

貴公の耳に入つたらう、全で根も葉も無い事を。元來、誰が――あッ、お母さんだナ、――お母さんが手紙に書いてお遣しになつたんだナ。尋常勝れた立派な御氣性だが、矢張享樂的なローマンティックな考を持つとられると見える。夫れにしても拙者の心持とは餘り懸離れ過ぎてる。拙者の心にも無い开んな見當違ひの空想を混ぜ上げて、餘計な取越苦勞をしてムるンだらう。夫れから――夫れから――』

『ヤイ、覺悟して口を利け！』とラスコーリニコフは起上りざまに、眼を光らしてルージンを睨みつけ、『覺悟しろ！』

『何を？』とルージンも突起ち上つた。

『最う一度阿母の事を云つて見ろ、直ぐ階段だから蹴飛ばすぞ。』

『これ、これ、何を云ふンだ？』とラズーミヒンは仲裁へた。

『夫れッきりか？』とルージンは血相變へて唇を嚙んだ。が、暫らく凝然と耐へて、逸り立つのを强やりに抑へつけつゝ、『貴公の無禮は闕を跨いた時から解つとつたが、故と容子を見よう爲め今まで在たんだ。病人だからと蟲を

堪へて勸辨してやつたが、最う決して――決して――』

『病氣ぢやないぞ。』とラスコーリニコフは叫つた。

『病氣でなければ猶更だ――』

『何だと、厄病神め！』

ルージンは既う出て去つて了つた。ラズーミヒンが椅子を離れて道を開けたのを見向きもせずに、誰にも會釋しないでブリ〳〵して、此の大恥を搔かされた忌々しさを素振に現して部屋を出て去つた。

『歸つて呉れ、一同歸つて呉れ！』とラズコーリニコフは焦り〳〵して叫りつけた。『歸つて呉れ！　煩さい！　歸つて呉れ！　君らを恐がるンぢやない、最う恐いものなんか無い！　彼方へ去つて呉れ！　單獨にして呉れ！　單獨に！　單獨に！』

『歸りませう。』とゾシーモフは云つた。

『宜からう――が、單獨ッきりにしたら？』

『宜いから來給へ。』とゾシーモフは斷乎云つて直ぐ出掛けた。ラズーミヒン

も踵から隨いて來た。『病人を刺戟しちや不可ませんよ。』

『だが、如何したんだらう？』とラズーミヒンは階段の途中で云つた。

『何か心に蟠りがある。何だか判然解らんが、何しろ何か蟠りがあつて鬱積してゐるんですナ。』

『ぢやァ渠奴だ、ルージンだ、渠奴は一體何うしたんだい？　何でも妹の婚になる奴で、其事ッて病氣になる前に母親から手紙が來てゐる。』

『まづかつたナ。そいつが鬱積の種子かも知れませんぜ。時に君は氣が附きませんかネ、妙な事がある。あの病人は何を喰してゐても一向平氣で冷ましてゐるが、唯一つ那の病人を動かすものがある――老婆殺しの一件です。』

『然う、然う。』とラズーミヒンも云つた。『僕も氣が付いた。何だか知らんが老婆殺しを氣にして恐怖してゐる。警察で卒倒したのも矢張之だ。』

『今晩猶ほとつくり相談しませう。我輩も大に興味を持つてゐるから、其時又お話しする事があるかも知れない。それぢやァ三十分の中に復たお見舞申すとして一ト先づ此の問題を延ばしませう。』

『オーライト！　難有う〳〵！　之から一番バーシェンカに懸合つて、ナスターシャを看護に頼もうと思つてる。』

ラスコーリニコフは、始終附き切りで尙た行かうともしないナスターシャを焦ら〳〵して睨んでゐた。

『ネエ貴君、お茶を喫つて？』とナスターシャが訊くと、

『今直ぐ喚む。俺は少と眠たいから、お前は彼方へ行け！』と煩ささうに壁の方へ寢返りして了つた。ナスターシャは出て去つた。

第六回

ナスターシャが部屋を去るか去らない内に、ラスコーリニコフは無圖と跳起きて扉に閂を挿し、ラズーミヒンが置いてつた袋の中の服に着換へようとした。妙だ！　俄にサバ〳〵した沈着いた氣分になつて、熱や譫語の痕跡も消え、今まで感じたやうな恐怖心も失くなつて了つた。思ひも寄らぬ奇妙な平和の瞬間が來たもので、頭腦が緻密に且明晰になつて、決心が充ち滿ちて來た。

『今日！　今日！』と肚裏で呟いた。無論、尙だ疲勞してゐるのを氣が付いてゐるが、左に右く新しく生じた不撓の元氣と自信とを頼んで外出ける氣になつて、新しい服に着換へて、今、出掛けようとした途端、偶と卓上の二十五留ルーブルが眼が留つたので、ラズーミヒンが殘した釣錢と一緒に衣兜に捻込み、慌てゝ門を外して階段を駈下りて、折から庖厨に働いてゐたナスターシャにも氣付かれないで、首尾よく道路へ飛出す事が出來た。

丁度八時、日はトップリ暮れて了つた。が、依然として蒸し〳〵する暑さに怯けずに、塵埃ッぽい、變な臭ひのする、氣持ちの惡い市中の空氣をガツ〳〵呼吸してゐると、其中に頭がキリ〳〵廻轉り初めて、荒々しい殺氣が血走つた眼や蒼白い憔悴した面に這ひ摺り廻つて來た。

一體、何をする意で外出けたのか、判然意識してゐなかつたが、考へようともしなかつた。何しろ今日中に、一擧して直ちに總始末を着けて了はにやならぬ、左もなくては恁うして此儘活きてる恃は無いから、手を空うして再び茫然と家へは歸られない、といふ事だけは解つてゐても、そんなら何う始末を附ける？　如何なる工風で？　と云つた處で何にも無い。唯「何でも彼んでも」といふより外には考へる氣にもなれないで、苟にも頭を掻亂すやうな考は頭で排斥して、一圖に總始末を附けようとばかり熱中して、猛烈なる自信と決心とで『何でも彼んでも』と力んで見た。

習慣の惰力で、行くともなしに古い馴染の通りを草市場の方へと段々行くと　一人の青年がシンミリした小曲を手風琴で彈いて來たのに逢着つた。其

の青年に寄添つてるのは當世風をした十五六の小娘で、袴もマントも手套もケバ〳〵しい鳥の羽を飾つた麥藁帽も、何れも皆大分着古した年數物であるが、左に右く花やかに粧り立つて、左程聞苦しくもないが甲高のキンキラ聲で、僅かな合力が欲しさに只ある店前で唄ひ出した。ラスコーリニコフは佇立つて一人二人の聽者と一緒に聽いてゐたが、聽て五哥の貨幣を出して遣ると、娘は高調子の處でブツリと止め、同伴の男に『往かう、』と聲掛けて、二人は早速と去つて了つた。

『君は流しは好きかい？』とラスコーリニコフは直ぐ傍に立つ中年の男に訊くと、屹驚して妙な顏をしてゐたが、軈て微笑した。

『我輩は非常に好きだよ、』とラスコーリニコフは言葉を繼ぎ、『殊に冬の薄ら寒い灰色をした闇の晩、往來の人の顏が蒼白く病人のやうに見え、霙交りの雪がチラチラして、風がなくて街燈がキラ〳〵してゐる寂寞した晩、手風琴に伴れてシンミリ歌つて來るのを聽くと堪らないナ。』

『失禮、御免』と男は呆氣に取られ、加之にラスコーリニコフの奇妙な容子

が薄氣味惡くなつたと見えて、慌忙てゝ向側へ逃げて了つた。

其内に、草市場の、いつぞやの晩商人夫婦とリザヴェータに邂逅つた場所へ來た。折から誰も在ないので、粉屋の入口で欠伸をしてゐる赤襯衣の若者に向つて、『此角に夫婦者の商人がゐた筈だが――？』と訊くと、

『此邊のもんはみんな商人でさア、』と若者は妙な顏をしてラスコーリニコフの頭から爪尖のまでを見下した。

『何て男だらう？』

『洗禮受けた通りの名でせう。』

『お前はザライスキイ縣かネ？　夫れとも何縣だい？』

若者は不思議さうにラスコーリニコフを瞻視めつゝ、『私等ア、旦那、縣なんかありませんや、郡のもんでさア。尤も私は家にばつかり在るから何にも知らねエが、兄貴は知つてませう。旦那、此位で勘忍して呉らッせエ。』

『ありやア料理屋かい？』

『居酒屋でさア。玉突臺もありますぜ。別嬪が多勢在まさア。』

ラスコーリニコフは市場を横斷して向ふ角へ行つた。人足や土方が多勢ゴヤ〳〵してゐた。何か話して見たかつたが、誰も目を呉れるものが無いので、暫時考へながら佇立つてゐた。軈てV――の方へと右に折れて、市場を避けて何がし小路へと來た。以前から度々屈托しながら彷徨き廻つた處だが、現在は何にも考へてゐなかつた。

只見ると大きな構へをした飲食店があつて、華美な扮裝をした化粧の女が間斷なしに帽子も被らずに飛出して來ては、往來端の彼方此方に思ひ〳〵の陣を作つて、取別け唄ふ聲やギターのビン〳〵する音色が洩れる二階下の入口近く屯ろして、其處ら中でベチヤクチヤ饒舌つたり、キンキラ聲を出したり、地面にベッタリ座つたりしてゐた。其間を騷きの素見が徜徉くして、好い機嫌の兵士が煙草を燻かしながら大口叩いて、何處かへ行く意で行先を忘れて了つたらしく有漏〳〵してゐた。其他にヘベレケに醉潰れたのや微醉機嫌のやが幾人も千鳥足でヨロ〳〵と道路を縫つてゐた。ラスコーリニコフは女の傍へ行つて佇立つて見ると、何れも皆綿服で、山羊皮の靴を穿いて、帽子

無しだつた。四十ぐらゐのもあれば精々十七ぐらゐのもあつて、何の女も顔を細工して眼の縁を黑く塗つてゐた。すると唐突り一人の女が摺寄つて、『ねエ旦那、飲まして頂戴な、』と聲を掛けたので、面喰つて五哥貨を女に摑ませて、周章てゝ逃出してから復た佇立つて考へ初した。

『何だつけかナ、何かで讀んだ事がある。死刑に處せられた奴が愈々死ぬ間際に、若し交換が出來るなら、譬へば唯僅に吾が二本の脚を休めるに足るだけの巖石の頂點或は幅の狹い高地であつても、其の周圍を漫々たる青海原に取卷かれ、不斷の陰欝、不斷の寂寞、不斷の風雨に包まれ、生涯は愚か數千年間、永恒に渡つて唯僅に三尺の地に立つてるのでも厭はぬと、云つたとか考へたとかいふが、』這般な思ひをしても矢張死ぬよりは生きてたいのか知らん。生きてたい、生きてたい、どんな思ひをしても關はぬ、唯生きてたい！

――てのが此男の僞りの無い本音か知らん？　若し本音だ！　としたら、何て哀れな意氣地なしだらう！』と較や途切れて――『が、之を哀れだといふなら、此の俺も矢張哀れなもんだ！』と言足した。

いつとなしに他の町へ來てゐた。『あッ、水晶宮へ來ちまつた！　ラズーミヒンが水晶宮の事を話してゐたが、如何して怎んな處へ足が向いたらう？むゝ、來た序だ、新聞でも讀んでく乎。ゾシーモフめが新聞で讀んだッて云やァがつたッけ。――』

『新聞があるかい？』と、此の大きな料理屋の殆んど空明になつてる幾間も幾間もある其中の一と室に通ると直ぐ訊いた。二三人のお客が茶を喫んでゐた。向ふの室では三鞭を飲んでるお客の一と組があつた。其中にザミョートフが在るやうな氣がしたが、判然しなかつた。『在たつて關うもんか、』と口裡で呟いた。

『ブランデイを差上げますか？』と給仕人が訊きに來た。

『いゝや、茶だ。夫れから新聞を持つて來な――五六日前からの。』

新聞も茶も來たから、ラスコーリニコフは座に着いて早速探し初すと、見たいと思つたものが直ぐ發見かつた。

『あッ、爰に在る！』と思はず聲を上げて讀み初した。文字は眼の前に躍つ

て見えたが、熊鷹眼をして末まで讀終つてから、更に最近の消息を讀まうとして他の新聞を手に取ると、俄にワナ〳〵と顫へ出し、新聞までが震へてゐた。不意に誰やら來たやうな氣配がしたので、仰向いて見ると、ザミョートフ――例の指環と金鎖と、油で燦々してゐる縮れ毛と、變り胴着と、薄汚れたシャツとが目に立つ同じザミョートフが立つてゐて、三鞭で景氣を付けた愉快さうな赤い顏をして莞爾々々しながら、

『來たナ、』と宛も永の年月懇意にしてゐたやうな粗忽な口の利き方で、『昨日のラズーミヒンの話ぢやア尙だ君は昏睡してゐる筈だが、こいつァ變だぞー僕も君の許へ行つてたんだぜ。――』

ラスコーリニコフは新聞を下に置き、身體をザミョートフの方に捻向けて、强に故とらしい微笑を唇頭に寄せた。

『知つてるよ、君が來たのは。殘らず聞いてる。我輩の靴を搜して呉れたさうだネ、……大分御機嫌だが、誰が三鞭を奢つたんだい？』

『誰にも奢られたんぢや無い。衆人で飲んでるのだが、何故サ、如何いふわけで？』

『如何いふわけも無い、何でも無いのサ、』とラスコーリニコフは笑ひながらザミョートフの肩を叩き、『眞劍ぢや無い、戯謔でムりますと、ホラ、ミトレイと取組合ひをしたペンキ屋が云つた通りサ。』

『呀、君は其事を知つてるかエ？』

『知つてるとも、君より詳しく知つてるかも知れない。』

『變な事を云ふナ。君は尙だ外へ出ちや不可んぜ、餘程變だ。』

『そんなに變に見えるかい？』

『變でなくてサ。一體、何を君は讀んでたんだ？』

『新聞を。』

『大分火事があるさうだナ。』

『そんな事は讀まんよ、』と妙な顏をしてザミョートフを視て、小氣味の悪い薄笑ひを泛べながら、『我輩の讀んでる處に火事なんぞは無い、』とザミョートフを見て目瞬をして。『我輩が讀んでるものを訊いて如何する意だ？』

『如何もしない、唯訊いて見たばかりサ。尤も僕は……』

『豪いナ、君は。立派な學問がある。文學者ぢや無かつたか知らん？』

『之でも大學の第六級に在た事があるんだ』とザミョートフは較々得意らしく答へた。

『第六級！　豪いー　指環を穿めてる、金鎖を下げてる、金持だナァー　好い兒だナァー』と正面にザミョートフの顏を見てニヤリと笑つた。ザミョートフは度肝を抜かれて、怒りもしないが、呆氣に取られて了つた。

『餘程變だぞ！』とザミョートフは眞面目な顏をして、『猶だ熱が取り切れない。餘程君は如何かしてゐるぜ！』

『我輩が變かネ？　變だらう。變かも知れないが君には面白いだらう？』

『面白い？』

『面白く無くてサ。我輩が讀んだり探したりするものを訊くが、我輩は何枚も何枚も覽てゐたんだぜ。變ぢやァ無いか。一體何を氣にして斯んなに何枚も讀んでたらう？　話して聞かせようかナ、イヤ白狀すると云つた方が宜い

乎ナ、イヤ夫れよりか手取早く、證據を提供するからお書留めなさい――てのが一番適切だらう。宜いかい、我輩は誓言する、態々新聞を讀みに來たんだよ、』と目瞬きしつゝ、吻と息繼をして、『老婆殺しの一件を讀みたくてサ、』と殆んど口裡で云つて眤ッとザミョートフの顏を見た。ザミョートフも依違がすに見返して、双方共に暫らく睨み合つて妙な鹽梅だつた。

『あッ、あの事件を讀んでたのかエ？』とザミョートフは到頭默つてゐられないで、『如何しました、其一件は？』

『同じ婆さんだよ』とラスコーリニコフは矢張口裡で、ザミョートフの言葉は耳にも入れないで、『警察で我輩が氣絕した時、君らが咄してゐた同じ婆さんの一件だ。覺えてるだらう、確かに覺えてるだらう？』

『覺えてる、何を？』とザミョートフは呆氣に取られた。

ラスコーリニコフの生眞面目な顏が忽ち變じて、とんと自分で自分が制へ切れないやうにニヤ〳〵し初した。其時、恐ろしい程ありく〳〵と、手に斧を持つて扉口に潛れてゐた時の瞬間が心に浮んで來た。あの時、片手に斧を掴

んで門を押へながら立つてると、渠等は外からガタ〳〵搖つたり叩いたりしてゐたが、何とも形容出來ない心持で、寧そワッと喚いて矢庭に躍出し、大喝一聲逐散らして呉れうと焦り〳〵したつけが！　――と思ふと、俄に堪らなく笑止しくなつて、『あッはッは、はッ、はッ！』

『狂人だ、でなけりや――』とザミョートフは云掛けて、何か別の新らしい考が不意に浮いて來たかのやうに言葉を途切らした。

『でなけりや、何だ、何だ？　サァ何だ？　聞かう、云へ！』

『ノンセンス！』とザミョートフは口裡で自問自答した。『そんな事ァ無い。』

双方共に默つて了つた。が、此の待ち設けない發作的の笑が休むと、ラスコーリニコフは急に考に沈んで、悲しさうな顏をして、兩肱突いて卓子に凭れ、兩手で頭を抱へて、ザミョートフが在るのも忘れて了つたやうだ。沈默が猶ほ暫らく續いた。

『君、茶を飲まんか？　冷えッちまふぜ。』とザミョートフは到頭口を切つた。

『何？　茶か？　むゝ！』とラスコーリニコフは茶碗を攫んで、一と口麵包

を頬張つてから、ザミョートフを睨ッと視つゝ、軈て思付いて氣を取直すと直ぐ以前の笑顏となつて、チビ〳〵と茶を飲み初した。

『隨分惡黨が有れば有るもんだよ、』とザミョートフは話頭を轉じて、『ツイ先日の莫斯科の新聞に、彩票僞造者の團體が捕つた雜報が載つてたが、殆んど一社を成すに足るほどの人數ださうだ。』

『そいつは最う古聞だ。我輩は一ト月も前に讀んだ。』とラスコーリニコフは一向去氣ない體で、『だが、彼樣な奴等を君らは惡黨呼ばはりするのかい？』と笑ひながら言足した。

『惡黨で無くつてサ。』

『惡黨！　惡黨が笑止しい！　赤ん坊、雛ッ子ぢや無いか。五十人も組合つて其樣な計畫を行るッてのが抑も馬鹿だ。行るなら三人ぐらゐが精々關の山だらう。三人ぐらゐで堅く結托して行るならばだが、多勢寄つてガヤ〳〵騷いだんぢやァ駄目だ。宛で赤ん坊だよ。恃にもならない奴を兩換に遣つて、紙幣を請取る時手が顫へりやァ世話ァ無い。そんな奴に生命を預けて置くな

ら、寧そ自分で首でも縊つた方が氣が利いてる位なもんだ。悠々兩換に出掛けて、申譯に少とばかり數へて、殘餘はそこ〳〵にして衣兜に捻込んで、周章臭つて逃出すから直ぐ暴露ッちまう。唯ッた一人の頓馬で根こそぎ失敗しちまう。馬鹿々々しい事ッた。』

『手が顫へるッて事が馬鹿々々しいッてのかネ？』とザミョートフは、『でも顫へさうな事ッたネ。君なら顫へないかも知れんが、僕には迚も我慢が出來ん。百留の褒美を貰つても其樣な使命は眞平だ。贋札を持つて銀行へ？　迚も迚も、頭がグラ〳〵しちまう。君は做ないがエ？』

ラスコーリニコフは復たドキリとして對手の顏を正面に見てゐられなくなつて、身柱元から全身が慄然とした。『我輩が其樣なドヂをやると思つちゃ困る。我輩なら恁うする。先づ最初の千枚は頗る念入に四度も數へて、一枚一枚に一々叮嚀に吟味する。第二の千枚になると、半分ほど數へてから、一枚拔取つて明るい處へ持出し、裏表を引繰返して穴の明くほど見て、「贋ぢやァあるまいナ」などゝ獨言を云つて、贋札を摑ませられた話でもするんだナ。

夫れから第三の千枚になると、二番目の千枚に間違が無かつたから、今度の二番目は最う正確でせう……てな調子で盡く請取つて、悠々緩々と沈着拂つて扉を開け、率ざ歸らうとして、鳥渡跡戻りをして、故と何か訊いて見て說明を求めるんだナ。先ァ如此な鹽梅式に行るんだ。』

『奇妙な事を云ふナ！』とザミョートフは笑ひながら、『講釋は中々巧いが、實地に試つて見たら如何だらう。例へば問題になつてる彼の老婆殺しの一件だつても、何れ兇行者て奴は、白晝何事をも行つて退ける大膽不敵の曲者だらうが、矢張手が顫へやしなかつたか知らん。十分沈着いてやり得ないで、亂脈なまんまで逃出した手際を見ると、仕事をする時は矢張度胸を失くしてオドオドしてゐたとしか思はれない。』

『然う思ふかい？』とラスコーリニコフはチク〳〵針で刺されるやうな氣がして『然う思ふなら直ぐ捕へたら宜からう。』と面白さうに皮肉つた。

『心配しなくても直きに捕へるよ。』

『誰が捕へる？　君が捕へる意かい？　止し給へ、骨折損になる！　君らが

精一杯の知恵を振ふ探偵方針は犯罪人の錢遣ひぐらゐなもんだらう。文無しが偶々錢が出來て遣ひ初したら犯罪人にされッちまう。そんな事ッちやァ、君らを騙さうと思やァ兒供だつて騙せるぜ』

『然ういふけれど、君、渠等が做る事は大抵判で捺したやうに定つてる、』とザミョートフは答へた。『先づ人を殺す、生命を的にかけての仕事をしちまうと、直ぐ茶屋なり何處なり遊所へ飛んでつて直ぐ押へられッちまう。秩序なく遣ふから直ぐ知れて了ふ。中々君の講釋するやうにクロウト臭くやらんもんだよ。君なら遊所なんかへ行きやしまいがネ』

ラスコーリニコフは顏を顰めて睨とザミョートフを瞻視め。頗る面白からぬ顏をして、『我輩の擧動を探る意だナ？』

『無論探る意だ、』とザミョートフは屹と眞面目になつて答へた。心に何か一物あるらしかつた。

『無論？』

『無論とも。』

『宜しい、聞かせよう、我輩なら恁うする、』とラスコーリニコフは摺寄つて、對手の顏を覗込むやうに身を屈め、聽いてると恐ろしくなつて慄へて了ひさうな物凄い低言で、『我輩なら金子から何から洗ひ浚ひ引攫つて、方角定めず逃出して、何處でも關はぬ、薄暗い、塀で圍つた場所――例へば邸の構内の圃てな所まで來て石を發見け出す、目方一磅半もありさうな、塀か何かに倚せ掛けてある建築用とでも云ひさうな奴を。恁ういふ石を見付け出して、顚倒返して見ると其下に穴が在る、此穴へ盜んだ物を殘らず投込んで、其上に以前通り石を据ゑて、周圍を足で踏固めといて歸つちまふ。夫れから一年はソックリ其儘に――イヤ、二年も三年も恁うして埋めとくんだ。さァ、何所へ匿した？　何處だか、搜して見ろー』

『狂人だナ。』とザミョートフは低音で云つて、去つて了はふとした。ラスコーリニコフの眼は怪しくギラ〳〵して、顏色は愈々青くなり、上唇はワナ〳〵顏へ初した。で、顏と顏とピッタリ壓しつけるやうに顏を突出し、何か云出さうとして唇をモグ〳〵動かしたが、聲が出て來なかつた。數瞬間が忽ち過

ぎて了つた。で、自分の做てゐる事が解つてゐても抑へる力が失くなつて了つたやうな氣がして、丁度門を挿した扉の内にドキ〳〵しながら突立つて躍出さうか出すまいかと迷つた時と同じワク〳〵した奇妙な心持がした。

『我輩が老婆殺しなら如何する？』と、ラスコーリニコフは突如叫りつけて、忽ち――ハッと思つた。

ザミョートフは顔色を失くした。が、直ぐ笑顔になつて了つて、『そんな事があるもんか？』と自分で自分に呟いた。

ラスコーリニコフは殺氣を含んだ眼で屹と睨んで、『さァ云へ。如何思つてる？　然う思つてるんだらう、さァ――如何だ？』

『何と思つてるもんか。前ほど思つてやしないよ。』とザミョートフは周章てゝ丟つた。

『到頭本音を吹いたナー　本音を出したナ？　前ほど思つてやしないッてなら、一度は必と然う思つたらう？』

『飛んでも無い。然う君のやうに邪推を廻しちや困る』とザミョートフの狼狽

した容子があり〳〵見えた。

『然う思はぬもんなら、警察で那樣な尋問をする筈が無い。我輩が卒倒したあとで、何故警部が那樣な尋問をした？』と叫りつけながら手荒く帽子を掴んで、『オイ、幾何だ、勘定は？』

『三十哥戴きます、』と給仕人は答へた。

『此所へ置くよ。汝に二十哥與る。』と云ひつゝ再びザミョートフに向つて、『此貨幣を見ろ、一と山有るぞ！』と、顫へる手で赤札青札を混ぜて二十五留を摑出し、『何處から持つて來たか知つてるか？　如何して此服を新調つたか解るか？　我輩の文無しは知つてるだらう。大方、家の主婦にでも訊いて見たらう、如何でも關はん、勝手にし給へ。御苦勞樣な事ッたー　ぢやァ君、失敬する。さよウなら！』

ラスコーリニコフは一種の殺伐なヒステリカルな感情から產出した愉快と陰鬱と疲勞とを混合ぜた妙な氣持になつて出掛けた。今、發作が鎭まつたばかりといふやうな顏をして、心の苦痛も增して來れば、疲勞も段々加はつて

來た。

獨りぼつちに置去りにされたザミョートフは呢と思案に沈んで、ラスコーリニコフが自分の前に提供した種々の疑點を考へて見たが、『イリヤー！ペトローウヰチは馬鹿だナァー』と云ふのが最後の結着であつた。

ラスコーリニコフが表の扉を開けて出ようとした出合頭、急か〳〵段を昇つて來たラズーミヒンと危なく鉢合せをしようとして顏を見合はした。ラズーミヒンは非常に肝の潰れた顏をして頓狂な破鐘聲を張上げ、『此の命知らず奴が何をしてゐるんだ。臥てエなけりや不可て云ふに。今まで君を搜してたんだぜ。一體如何したんだ。話して聞かせろ。』

『君等が煩さくなつたのだ。殆んど我輩を悶死せしめようとするから單獨になりたくなつたんだ。』とラスコーリニコフは沈着拂つてゐた。

『單獨に！　碌々動く事も覺束ないで、青瓢簞のやうな顏をして、喘く呼吸を切らしてゐて、單獨も無いもんだ。水晶宮で何をしてゐた？　さッ、話さないか？』

『宜いから退いて呉れ！』と言棄てゝラスコーリニコフは無理遣に振挽つて行かうとすると、ラズーミヒンは勃然となつて、ラスコーリニコフの肩先を無圖と攫み、

『何、退いて呉れと。能くそんな事が云へた義理だ。愚圖々々云やア、此の弱腰を取つて押へて、ぐる〳〵捲きの荷物にして、脊負つて歸つて押籠めつちまふ意だ。』

『そんなら我輩の云ふ事を聽け、』とラスコーリニコフは頗る沈着き澄ました調子で、『折角だが、君の親切を受けるを欲しない仔細が解らん事はあるまいがナ。宜いかい、口頭で巧い言を陳べて背ろを向くと舌を出すッてな男に世話をして呉れと賴めるかい？　我輩が病氣に取憑かれた初め、寧そ死んだ方が勝しだと思つたくらゐ苦んでる最中、君は御親切に能く我輩を搜索して呉れたネ。お庇で我輩を困しめたり勞らしたり刺戟したりするんで益々病氣が癒らんのを今日目前に見せたら解りさうなもんだ。ゾシーモフには此理由が解つたから歸つちまつたんで、君も矢張然うすべき筈だ。腕力で我輩を押へ

つけるッてが、開んな權利を君が持つてるのかい？　我輩は極眞面目で云ふんだよ。さッ、解つたなら我輩には關はんで、親切は措いて呉れ。君に云はしたら義理知らず、卑怯者かも知れんが、我輩は我輩の勝手にさして置くサ。後生だから賴む。さッ、去つて呉れ、去つて呉れ。』

ラスコーリニコフは心を引締めて氣を付け氣を付け、兎もすれば辛抱し切れなくなつて破裂しさうなのを眤と耐へて、腹を立たせないやうに穩かに云つて、丁度ルージンに會つた時と同じやうに　言終つた時は上氣して吻と呼吸を吐いた。

ラズーミヒンは暫らく佇立つて考へてゐたが、軈て手を引込まして、『そんなら勝手にするサ、』とラスコーリニコフを遣り過ごして置いて、直ぐ復た背後から、『オイ、待て！』と聲を掛けた。『オイ君、下らん煩悶や妄想は追拂ッちやつて、牝鷄が卵を踏まへてるやうに心の惱みを抑へつけッちまはにやや不可。全で活きてる空は無いぜ。脂肪ばかりで血の氣が失くなつてる。如此な君ぢや無かつたッけが、オイ、コラ、待てッたら、先ア終ひまで聞け、』と

ラスコーリニコフが逃げにかゝるを見て敦圉荒く、『僕の處で移轉祝ひの客をするのは君も知つてる通り、最う徐々集つて來る時刻だ。伯父貴を獨り置いて來たんだから、最う歸らにやならんのだが、如何だい、君、君が恁ういふ愚物、愚物も愚物も無茶極まつた愚物、惡たれ腕白の愚物で無いならばだナ、――君の聰明を知らんぢや無い、能く認めとるが、今の處は愚物といふ外仕方が無い、――そこでだ、君が若し开んな突拍子も無い愚物で無いなら、如何だい、家へ歸つて鞄を抱いて寢るよりも僕の許へ來てお客の一人となつちやア。ゾシーモフも來るぜ。えッ、來ないか？』

『嫌だ！』

『馬鹿！』とラズーミヒンは堪りかねて叫りつけた。『先ア如何でも勝手にするサ。所詮溫和しい返事は出來まいが、自分の做た事を平氣で忘れッちまふ君だもの、請合つて今にケロンとした顏をして必とやつて來る。僕の處を忘れちや不可よ。ボチンコフの三階だぜ。』

『行くもんか、』とラスコーリニコフは權もホロ〻に復た行き掛けた。

『行くもんかッても必と來る！』とラズーミヒンは背後から聲を掛けた。『來なけりやお目に掛らんよ。オイ、ザミョートフは爰へ來てゐるかい？』

『むゝ。』

『會つたかい？』

『むゝ。』

『談話をしたかい？』

『むゝ。』

『何を話したい？　何故默つてるんだ？……先ア。如何でも宜いや。ポチンコフの四十七號を覺えてるんだぜ。』

ラスコーリニコフは最う町角を曲つて了つた。ラズーミヒンは暫らく佇立つたまゝ考へてゐたが、軈て點頭して此の家に入らうとして半分段を昇りかけて復た立留つた。『一番油を取つてやらうかナ、』と口裡で云つた。『あの焦らされた無茶な話しッ振が變だワイ。十分――イヤ、斯んな事を考へるのは愚だ、愚だ！　狂人てものは兎角意味ありさうな事を云ひたがる。夫れが狂

人の症狀の一つだから、ゾシーモフが心配してるんだ。が、此先き如何なるだらう、心配でならぬ。あの鹽梅ぢや投身ぐらゐは仕兼ねまじきだ。こりや怎うしちやをられんワイ、』と周章た段を駈降りて追掛けようとしたが、最う何處へ行つたか影も形も見えなかつた。仕方がなしに左も右くザミョートフに會つて容子を訊かうとして水晶宮へ引還した。

ラスコーリニコフは△△△橋へと眞直に行つて、橋の中央まで渡り掛けて、偶つと欄干に凭れて恍然と眼前の景色に看惚れた。最う足が縮んで了つて立つてはゐられないやうな氣がして、路傍であらうと何であらうと其のまゝ倒れて臥て了ひたくなつた。で、茫然と水を覗いて、機械的に落日の紅をさしたやうな夕映や、段々と暗くなりつゝ黑い影に消えて行く家並や、遙か遠い人家の窓が最後の光線を反射して運河の暗い水の面に一道の光を流してるのを眺めてゐた。すると頭腦がヅキ〳〵痛み出し、眼は血走つて、家並も往來の人も車も何も彼もクル〳〵廻り出して來た。

不意に身柱元からゾウッと身慄ひがして、左もなければ危なく復た卒倒し

掛けたのを漸と支へた。偶つと直ぐ傍に誰だか立つてるらしい氣配がしたので、顧眄いて見ると、肩掛を頭からスッポリ被つた、黄ばんだ顔と赤い窪んだ眼の、脊の高い娘が此方を直と看入つてゐた。が、視線を向けは向けても、實は物を視る力がないやうで。軈て欄干に足が掛つたかと思ふと、矢庭に躍り越えてドブンと身を投げた。濁つた水が水煙を立てゝ左右に開き、忽ち犧牲を呑込んで了つた。が、直ぐ復た浮上つてドシ〳〵流され、顔と足とが水に漬つて着物だけが見えてゐた。

『船エー！　船エー！』と同時に彼地此地から聲がして、ドヤ〳〵多勢集まつて來た。

『助けて下さい、我家のアフローシニンカです！』といふ女の聲が餘り遠くない處から聞えた。『助けて下さい、引揚げて下さい！』

『船エー！　船エー！』といふ聲が續いて聞えた。

が、船を出さなくて濟んだ、巡査が川岸の花崗石の段を駈下りて、流れて來るのを待構へて、人手を借りて引揚げた。娘は忽ち正氣附いて、ベッタリ

座つて、眼を擦つて、喘々息を切つて、クロンとした顔をして何にも云はなかつた。ラスコーリニコフは靜に始終の容子を見てゐたが、何とも云はれない不快な氣持がした。巡査はまめ〳〵しく女を介抱してゐた。警察々々と云ふ聲が野次馬の中から聞えた。

『水と思つたが、水なんぞで死んぢやア品格に觸る！』とラスコーリニコフは獨語ちた。『警察で何をする？　ザミートフは何故來てをらん？　彼是れ最う十時になるだらうに。』

で、顧眄つて四周を見廻し〳〵區の警察の方角を指して行つた。心は空洞に氣力は萎へて了つて、屈托や雜念は苦もなく驅逐して了へたが、其の代りには又、家を飛出した時の「何でも彼んでも總始末を附けて了はふ」といふ猛烈な意義込も痕跡なく消えて失くなつてゐた。

『結局如何すりや宜いんだ？　俺の意思次第だが、何う決着を付けたもんだらう？　誰でも同じ事ッて、足を休める尺寸の地が欲しいに定つてるが、此の大詰より外仕方があるまい乎。猶だ〳〵云ひたい事が無いでは無いが、俺

antidisestablishmentarianism

は最う草臥れた。何處でも關はん。横に臥るなり腰を掛けるなりしたくなつた。全體病氣を強してヤキモキするなんて愚極まつてる！ ——が又能く跡から跡からと下らん考が浮いて來るもんだ。』

恁う思ひながら運河の堤を蹣跚して、軈て右に折れ左に曲つて警察署のある建物の前まで來て、礎と佇立つた。が、直ぐ小路を折れて、何處へ行くといふ的もなく二タ町ばかり通り過ぎ、唯少とでも長く左や右うと考へて見たくて、地面ばかり睨んで傍目も觸らずに徜徉しながら行くと、突然耳の端で私語く聲がした。ハッと氣が付いて顔を上げて見ると、あの家のシカモ門前に立つてゐた。

電光よりも早く、只ある考が頭の中に閃いて、突と廣庭を横斷つて熟知の階段を四階へと一直線に昇つた。例に由て薄暗かつたが、一階毎に一々氣を付けて覗いて見た。ミトレイとニコライが仕事をしてゐた部屋は最う塗上つてゐた。四階の殺された婆さんの部屋の前まで來て恐々佇立つた。扉が一杯に開放されてゐて、內部からは人聲が聞え、餘り思掛けなかつたので、暫ら

く躊躇つて廊下を徜徉してゐたが、思切つて突と入つて見ると 部屋の修羅中で、職人が仕事をしてゐた。之には驚いて了つた。實は此の部屋を逃出した時の現狀其儘、死骸が床の上に倒れてる處までソックリ其儘を猶だ見られるやうに何となく思つてゐたら、椅子も家財も何處かへ持つてかれて何にも無い壁だけの空部屋になつてゐた。が、少しも躊躇はずにッカ〳〵と進んで窗闥に腰を掛けた。

職人は二人ぎりで、何れも尙だ若かつた。以前の黃色い壁紙の上を連翹の小さな花の型置きの白い紙で貼つてゐた。此の張換を面白からぬ顏をして瞻視めながら、腕組をして窗に倚れてゐたが、職人どもは一向氣が付かないで何とも云はず、二タ言三言口を利いてから徐々仕事を片附けに掛つた。動や暫らくして寢榻と箪笥の在つた次の室へ行つて見ると、頗る狹苦しい部屋で、壁紙に婆さんの凭れた脊中の蹟が微に殘つてゐた。其時、一人の職人は始めて氣が附いて、

『旦那は用があるんですか？』と訊いた。

ラスコーリニコフは返事もせずに扉口へ行つて、扉外から例の鉦を引いて見た。微にチーンと鳴る同じ鉦であつた。繰返し〳〵三度まで引いて見ては耳を澄して考込んでゐた。

『用があるんですか？』と職人は態々扉外まで出て來て訊いた。

『貸間を借りようと思つて、見に來たんだ。』

『夜る借りに來る奴ァありませんぜ。何故家番に斷らんのです？』

『奇麗に洗つちまつたナ。之からペンキを塗るんだナ？　何處だつけ、血の流れてたのは？』

『血？　何の血？』

『殺された婆さんの血サ。恰で池のやうだつた。』

『旦那は誰方です？』と職人は薄氣味惡るくなつて來た。

『我輩か？』

『旦那さ。』

『聞きたいか。聞きたきや家番の許まで來い。聞かして遣る。』

『行つて見ようぢや無ェか。仕事が濟んだから、えッ――オイ、支度は宜いかい、アリョーシカ。』

『そんなら一緒に來な、』とラスコーリニコフは平氣な顔して先へ立ち、逸早く一番下まで降りると、『家番ー』と呼んだ。恰度門前に立つて往來の品定めをしてゐる多勢の中に家番が二人在た。

『何だい？』と一人の家番が云つた。

ラスコーリニコフは返事もせずに、茫然考込んで蟲立つてゐた

『此の旦那が部屋を見に來たんだ。』と一人の職人が云つた。

『どの部屋を？』

『私達が仕事をしてる部屋サ。「何故血を洗つちやつた、」てな氣味の惡い事を訊いて、妥で人殺しがあつたのだ、其の人殺しのあつた部屋を借りてエんだつて、鉦を鳴らして見たりなんかして、家番の許まで一緒に來たら仔細を話してやるッて、恁う云ふんだ。』

『貴君は誰方です？』と家番は堪りかねたやうに訊いた。

『我輩は以前大學生であつたラスコーリニコフ、爰から遠くない裏通りの十四番地のシラの家に下宿しとるもんだ。其所の家番に訊けば直ぐ解る、』と平氣な顔をして答へて、外方を向いて暗い町の方を見てゐた。

『あの部屋で何をしてました？』

『職人達の仕事を見てゐた。』

『何だと？　早速と去つて呉れ、文句が無エなら歸らねエか、ヤイ、』と最一人の家番――大きな鍵の環を腰に垂下げた圖抜けて大きな「スモックフロック」を着た男が矢庭に叫びつけて、ラスコーリニコフの肩を無圖と摑んで表へ突飛ばした。ラスコーリニコフは蹌々と蹌けたが、直ぐ立直りざま見物人をジロリと見て、何にも云はずに悠々と去つた。

『さア、如何しよう？』と考へて、四辻近い橋の上に佇立つて、談話の對手になりさうなものを見附けようとして四方を環視した。が、誰も話しかける人も無く、四邊が總て薄暗く朦朧と石のやうに靜かで、ラスコーリニコフ一人だけにかも知れぬが、寂として淋しかつた。すると突然五六十間離れた町

外れから喧ましい人聲が聞えたかと思ふと、見る〳〵人が黒山のやうに集つて來た。道路の中央に馬車が駐つてゐて、周圍に燭光が幾個もキラ〳〵動いてゐた。

『何事ッた？』とラスコーリニコフは群集へと駈けて行つた。如何なる路傍の小事にも世話を燒いて、最う落着するなと思ふと身を退いて、容易く纏まりが着いて了ふのを冷やかにセヽラ笑ふのが癖であつた。

第七回

道路の中央には逞ましい瓦毛の二頭立の馬車が有つた。中は空で、馭者は馬の頸を抑へに下りてゐた。巡査も來てゐた。周圍には多勢集つてゐた。一人は燈光を翳して、車輪の下に倒れてゐるものを照らしてゐた。各自何かしら云つてゐたが、ガヤ〳〵叫ぶ中に頻りと辯明する馭者の聲が何よりも一番能く聞取れた。

ラスコーリニコフは人集りを押分けて此の騒動の原因を一と目見ようとした。只見ると大地に氣絶して倒れてる人が有つて、顔から掛けて垢染みたおさすりの服へ血が流れてゐた。馬蹄に蹂付けられた上に、減茶々々に顔を蹴られたので、中々笑ひ事どころの騒ぎぢや無かつた。

『私ア隨分氣を附けッたんだが、』と馭者は頻りと辯明した。『何しろベロ〳〵に醉つてるんだから、馬車の燈光が目に入らなかつたんだらう。馬の鼻ッ先を横斷らうとして蹌々ッとしたから。危險えッて叫つたが、最う間に合はね

エ、馬の足元へパッタリ横倒しになつちやつた。失敗つたと手綱をグイと引張つたが、何しろ馬が若くて怯懦と來てエるから、駄目だ、到頭蹶いちやつたんで、カラ最う仕樣が無エ、恁ういふわけなんだから。』

『其通りだ、已ッちが見てゐた。』と、群集の中から一人二人聲を掛けるものがあつた。馭者が左程に惡びれもせず恐れもしないで、割合に平氣で沈着拂つてゐるので推すと、必ず金持の名士の抱へ馬車で、主人は恐らく何處かで迎へに來るのを待つてゐるのだらう。其爲か巡査もまめ〳〵しく周旋して、取敢へず病院へ負傷者を送らうとしたが、誰一人其名を知つてゐるものが無いのに當惑してゐた。其時ラスコーリニコフは束々と進んで、丁度角燈の光が不幸な男の顔を照らしてゐるのを見ると、忽ち憶出した。

『我輩が知つてゐー　我輩が知つてゐー』と見物人の前に飛出して、『此男はマルメラードフて、直ぐ其處のコーゼリの許に止宿してる非職官吏だ。何しろ醫者を早く！　我輩が錢を拂ふから。』と衣兜から金子を握み出して巡査に見せた。ラスコーリニコフの面には非常な惻隱の色が現れたが、巡査は被害

者の身許が解つたのを喜んで莞爾ついてゐた。

ラスコーリニコフは自分の姓名番地まで明かして、何しろ負傷者を直ぐ其家に擔いで行つて呉れと見物人に頼んだ。『こゝから直ぐ三軒先き、金持の獨逸人のコーゼリの家だ。我輩は此男を能く知つてる。飲酒家で、妻子もある、他所へ出てゐる娘もある。病院よりか家へ伴れてつて呉れ。同宿に醫者も在る筈だから。金子なら我輩が出す。』

忽ち幇助人が現れて怪我人を擔ぎ出した。爰から三十歩と離れない直ぐ其處で、ラスコーリニコフは怪我人の頭を抱へながら先へ立つて案内した。『さッ、爰だ、此家だ！ 宜いか、頭を上にして擔ぐんだぞ。勞銀は我輩が出すよ、御苦勞々々々。』

留守居の妻のカテリーナ・イワーノウナは平生のやうに病み勞れて、前額に兩手を當てゝ獨語を云ひながら、間斷なしに咳嗽をしつゝ、部屋の中を往つたり來たりしてゐた。折々佇立つては十歳になる總領娘のポーレニカに話し掛けると、娘は一日病氣で機嫌が惡るかつた季の弟を臥かせようとして衣服

を脱がせながら、バッチリした大きな賢こさうな眼を睜つて母の顔を眤と見上げた。次の妹は其側に立つてゐて、自分の襤褸衣服を脱がせて呉れる番の來るのを待つてゐた。外の扉は閉め切られて、憐れな肺病女の咳嗽を增させる萇著の烟が階下から來るのを防いでゐた。此の週間は取別け病氣が重くなつたやうで、頰ぺたの紅い斑點が前よりは一層鮮かに美くしかつた。『お前にや解りやしない、想像だつて出來やしない。』とカテリーナは歩きながら、『先んのお父さんの時、どんな生活をしてゐたか、迚もお前にや解るまいよ。眞個に幸福だつたんだよ。飲んだくれの今のお父さんが妾達を如此なに零落れさしちやつたんで、先のお父さんはネ、陸軍の大佐で、先ァ知事樣見たやうなもんで、お父さんの上は唯ッた一等しか無いんだから、誰でもお父さんに向つちや、「手前共は既から知事公として閣下を仰いでをります」て云つたもんだよ。――嗚呼々々、嫌だ〳〵、如此な悲酸な生活をするッてのは何たら事ッたらう！』とゴホン〳〵と咳込むのを抑へようとして咽喉を捻りながら、『妾が尙だお父さんと夫婦にならない時、族長（原語「ドボリヤンスキイ・プレドボジ」、士族の組合頭といふ義）

さん許の舞踏會へ行つて、お父さんと肩を聯べてると、ベゼメーリナヤ公爵の奥樣が、「學校の卒業式に肩掛を被つて踊つたのは夫の品の好いお孃さんかい？」と仰しやつたつてよ。――その穴を何故塞いぢまはないンだよ、妾が敎エた通りに直ぐ縢つてお了ひ。――あッ、復た咳が出る、苦しい、苦しい。咽喉が裂けッちまひさうだ！――其時だつけ、ベテルブルグからお着きになつたばかしのツチェゴーリスコイ公爵さまの御所望でマザルカのお對手をしたのは。すると、其の翌日妾と結婚したいッて御意遊ばしたから、妾は丁寧に御禮を申上げて、他に約束した者がムりますからと御斷り申上げたが、其の約束した人てのがお前達のお父さんサ。妾のお父さん――お前のお祖父さんだネ――大變腹を立つちまつて、妾やァ何樣なに叱られたらう。――あの、水は汲んで置いたかい？　さッ、リードチカ、お前の襯衣と靴足袋をお出し。』と季の娘に向つて、『また今夜もお前の物を洗濯しなけりやならない。』と云つた時、矢庭に扉が排いて、多勢ドヤ〳〵と何だか擔込んだ。『お前さん達は、先ア、何ですエ、何ですッたら？　何を擔込むんです？』

『何所へ置かうかナ？』と巡査は四邊をジロ〳〵見廻した。

『長椅子の上へ、宜いか、頭を――然う〳〵、然うだ。』とラスコーリニコフは云つた。

『醉倒れて轢殺されちやつたんだ。』と廊下から聲を掛けたものがあつた。

カテリーナ・イワーノウナは蠢然と突立つたなりに、死んだやうに蒼くなつて、喘々呼吸を機ましてゐた。兒供達は恐がつて、小さいリードチカは泣出し、姉のボーリヤの傍へ駈寄つて、衣物に獅嚙み付いて慄へてゐた。ラスコーリニコフは好い按排にマルメラードフの身體が長椅子に置かれたのを見屆けてからカテリーナに向つて、

『奥さん、氣を確かに持つて、決して吃驚なさる勿。』と早口に、『お宅の御主人は道路を横斷らうとして、ツイ誤まつて馬車に轢かれた。が、心配しないでも、癒りますよ。丁度通り合はしたんでお送りして來たが、奥さんは我輩を知つてませう。御主人と一緒に一度上つた事があるから覺えてませう。……直つき癒ります、費用は心配しないでも我輩が何とかします。』

『イヽエ、最う癒りやしません、』と良人の傍へ駈寄つたカテリーナは落膽して聲を揚げた。

が、中々な氣丈者で、恁ういふ變事に會つても、滅多に喪心したり氣絶したりする女でないのは直ぐ解つた。軈て誰も氣が附かなかつた枕を持つて來て良人の頭の下に支つてから、靜かに良人の着物を寛めた。心の艱みは一と通りや二タ通りで無かつたらうが、少しも取亂さないで、咽喉まで籠上げて來る聲を凝と耐へて、顫へる唇を嚙占めてゐた。

ラスコーリニコフは同じ家に住んでゐる醫者を呼びに遣つた。『醫者を呼びにやつたから、心配する事は無い。費用は我輩が辨じます、』とカテリーナに向つて、『水ア有りませんか？　手拭か何か下さい。怪我をしたんで、死んだんぢやアない、正確です。醫者が來たら能く聽きませう。』

カテリーナは窠へ駈けて行つた。其の隅ッこの卓子に、今夜良人と兒供の襯衣を洗濯する意で汲込んで置いた大きなバケツがあつた。元來カテリーナは清潔好きで、一週に少くも二度は必ず、鹽の持主の眠てゐる間を重寶して、

汚れ物や襤褸の始末をする爲めなら、一夜の休息を犧牲にするぐらゐは何とも思つてなかつた。

カテリーナは危なく轉びさうに蹌々しながらバケツを持つて來た。ラスコーリニコフは手拭を搜し出し、水に濕してマルメラードフの顏の血を拭取つた。カテリーナは其側に立つて見てゐたが、心の艱みを面に現はして、咽喉に手を當てゝゐる容子の痛々しさッたら、此女にも附添人が要りさうな鹽梅で、病人の家に怪我人を擔込むなんて能く〳〵氣が利かない事をしたもんだとラスコーリニコフは考へ初した。巡査は當惑顏をして立つてゐた。

『ポーリヤ！』とカテリーナは總領娘に向つて、『急いでソーニヤ姉さん許へ行つとくれ。若し在なかつたら、お父さんが怪我をなすつたから、歸つたら直ぐ來て下さいッて云ひ置くんだよ。』

其中に部屋の中は人で一杯になつて、林檎一つ落す隙さへ無くなつて了つた。巡査は悉皆歸つて了つて、唯つた一人だけが野次馬を制する爲めに殘つてゐた。が、二階からも三階からも全家から部屋借がギシ〳〵と詰掛けて來

て、初めは扉の外に遠慮してゐたのが、段々ヅウ〳〵しくなつて部屋の中まで押寄せて來た。カテリーナは此の有樣を見て逆上せて了つて、

『お前さん達は良人を殺したいのかい？』と堪り兼ねて叫りつけた。『何を見に來たんだい？　紙莨を嘲へたり、帽子を被つたりしたまんまで、失禮千萬な。臨終の人に對する作法てものもあつたもんだ。さツ、お歸り、お歸りツてば！――』　と云掛けた時、劇しくゴホン〳〵と咳入つて言葉を途切らしたが、叫りつけたのが萬更無益にはならないで、野次馬連は其見幕が凄まじいのに恐れて扉口に退却した。尤も一つは、氣の毒な可哀相なといふ殊勝な人情が有るには有つても、實は痛くも痒くも無い他人の災難を面白半分に見物する内々の好奇心が十分滿足出來たからである。其内に慈善病院へ送つたら宜からうと餘計な世話を燒く者があつた。カテリーナは其聲が耳に入るや否、扉口に飛び出して再た何か叫らうとした處へ、下宿の主婦のリッベウェフゼリが此始末を聞込んで、見物人を押分け押分け見屆けに飛んで來た。到つて性急な秩序の無い獨逸の女で、

『Ach！　Mein Gott！　大變だワネ！』と双手を組んで、『お前さん許の飲んだくれの旦那が到頭馬車に轢かれたつてネ。慈善病院へ入れてお了ひな。妾ア此家の主婦だよ。』

『アマーリヤ・リュードウヰゴウナ、少たあ考へて物をお云ひなさい。』とカテリーナは尊大に極め付けた。カテリーナが下宿の主婦と口を利く時は、自分の身の程を知れと云はぬばかりに何時でも此調子で待遇ふので、自分の良人が斷末魔の一家浮沈の場合でも矢張此見識だけは捨てられなかつたのだ。『お前さん、ねエ、アマーリヤ・リュードウヰゴウナ――』

『復た妾の事をアマーリヤ・リュードウヰゴウナだつて。然うぢやア無いッて彼程何度も言つとくのに。妾やアマリイ・イワンだよ。』

『お前さんがアマリイ・イワンなもんか。アマーリヤ・リュードウヰゴウナさ。妾やネ、其邊に立つてて、失禮な、人の不幸を笑つてるレベジャトニコフのやうなお辨茶羅ぢやァないからネ。』（全く此男は扉口に立つてゐて、得意さうに莞爾々々しながら、『そうら喧嘩をおッ初めた！』と面白がつてゐた。）『妾やお前さんを

*Amalia Ludvigovna

アマーリヤ・リードウヰゴウナと呼びますよ、呼びますとも。然う呼ばれるのが何故お前さんの氣に入らないのか、妾にや解らない。そんな事よかお前さん、此通り良人は飛んでもない大怪我をして歸つて來たんだよ。お前さんも氣を利かして扉を閉めて、誰も入れないようにして呉れないと、明日はお前さんの仕打が知事さんのお耳に入るからネ、必と入るとも。公爵樣は妾が若い時分からのお親昵だし、良人のセミヨン・ザハールヰチも御贔負になつて色々お世話をして下すつたんだからネ。怎う見えても良人が立派なお友達や世話をして下さる方が澤山あるのは誰だつて知つてる。餘り潔癖過ぎて、自分の弱點を知り拔いてるんで、ツイ誰方にも御無沙汰しちまつたけれど、現在爰にだつて、（とラスコーリニコフを指して）如此な立派な御身分もありお職務もあるお若いお方を良人では兒供のやうに思つてお交際ひしてゐたからこそ、怎うして親切にお世話をして下さるんぢやないか。お前さん達が何にも云ふ事は無い、安心しておいで。アマーリヤ・リードウヰゴウナ――』

とカテリーナは早口に、折々に咳込んで來るとは絶句しつゝ云つた。此時、

*Semion Zachalytch

マルメラードフは人事不省から蘇生つて呻き出したので、カテリーナは周章てゝ駈寄ると、細い眼を開いて、表情の無い視線を側に立つラスコーリニコフに向けた。呼吸は苦なさうに途切れ途切れで、大粒の汗がポタ〳〵と前額から落ちて、打切れた唇からは血が滴れた。カテリーナは口惜しさうな嚴かしい顏をして屹と見たが、軈て散々と涙を零した。

『先ア如何しませう、此胸を見て下さい。血が、血が！』と力落がして聲を塞らし、『胴衣を脫がせなけりや……ね、セミヨン・ザハールヰチ、少つと此方をお向きなさい、――向けますかエ？』

マルメラードフは自分の妻の顏が解ると、皺嗄れ聲で、『牧師さんを！』と云つた。カテリーナは突と起つて窓へ往き、窓框に顏を當てゝ、『何たら情ない事ッたらう！』と悲しさに泣頽れて了つた。

『牧師さんを！』と怪我人は暫らくすると復た繰返した。

『しいッ……ッ！』とカテリーナは云つた。此聲が聞えたと見えて怪我人は默つて了つた。で、カテリーナが再た枕元に來たのを恐る〳〵眼と看てゐた

が、軈て片隅に小さくなつて蹲踞つて、小さい眼を睜つて一心に父親を凝視めてゐる最愛の娘のリードチカに視線が留ると、默つてゐられなくなつて、

『あアッ……』と嘆息を洩らして口を利かうと骨を折つた。

『如何しました？』とカテリーナが訊くと、

『坊やの脚が露出しになつてゐ！』とリードチカの腰から下が赤裸なのを見てマルメラードフは呟いた。

『默つてらッしやい！』とカテリーナは聲厲らげ、『如此な態を誰がさせるんです？　貴郎は知つてる筈だ。』

『やッ、難有い！　醫者が漸と見えた！』とラスコーリニコフは嬉しさうに云つた。

醫者てのは齢を老つた獨逸人で、カテリーナの手を借りて、血に染れた肌衣を脱がせて咽喉から胸を檢めた。頗る手重い打撲傷の上に、右の肋骨が何枚か折れ、心臟に近い左胸には馬蹄に蹴られた痕の無殘な黑い黃ばんだ斑點が殘つてゐた。

『最う手當の做ようも無い。』と醫者はラスコーリニコフに對つて云つた。

『えッ、何ですと？』

『最う不可ません。』

『希望はありませんか？』

『何うもナア。追付け呼吸を引取りませう。出血だけは止められますが、止めた處で役に立たぬ。五分經てば最う駄目でせう。』

其時野次馬は俄にドヤ〳〵し初して、最後の聖禮を行ふ意で來た白髮の老僧を通すべく道を開いた。醫者は直ぐ席を讓つて、意味あり氣な一瞥を老僧に與れて歸りさうにしたのを、ラスコーリニコフは强に引留めて、左に右く駄目であつても最う暫らく在て與れと賴んだ。醫者は首を竦めて快く承知して、一同背ろへ引退つた。儀式は唯の烏渡の間で、死んで行くものに其文句が解せたか解せぬか疑はしいが、時々何か云ひたさうだつた。カテリーナはリードチカと季の子を卓上に置き、兩兒を支へながら跪づき、涙を落すまいと唇を嚙みしめ嚙みしめ祈禱を上げた。奥の扉口には見物人が重なり合つて

犇き、背後の方では面白半分の連中が勝手な無駄口を叩いてゐた。で、此の全幅の光景を唯ッた一本の薄暗い蠟燭が朦朧と照らしてゐた。

折から扉の外の見物人を押分け押分け姉を呼びに行つたポーレニカが歸つて來た。喘々息を切らしながら、急いで母の傍へ駈けて行き、『姉さんが來るよ、丁度途中で逢つたの。』

其踵から續いて若い娘が靜かに怖々と野次馬の中を分けて來た。貧乏と窶穢と窮苦と死との中央に思掛けない若い娘の出現は如何にも奇妙な對照であつた。同じお粗末な衣服ではあるが、お客を釣りに辻を徜徉く夫れ者の好みと職業柄に相應しい華美な扮裝をして闘の上に立ち、一人も知つた顏の無い部屋の中を物珍らしさうに見廻してゐた。ケバ〳〵しい色のペンベラ絹の衣裳や、ゾロ〳〵牽摺つた奇異しな形狀の裾や、扉口一杯にパアッと開いた袴や、ピカピカ光る靴や、衣は要る筈が無い日傘や、燃立つやうな眞赤な鳥羽の飾を附けた小形の丸い麥藁帽や、頭の頂點から、靴の爪先までが此席には餘り不似合過ぎて無作法なのをも忘れて了つて呆氣に取られてゐた。帽子の下から

らは小さい窶れた怖々した顏が見え、恐ろしさに口元が解けて眼が座つてゐた。小作りな纖細な身體つきで、美くしい髪の毛と艶々した顏色と、男好きのする靑い瞳とが人目に着いた。急いで來たと見えて喘々息をして、暫らく扉口に立縮んでゐたが、其内に徐々見物人が自分の事を耳こすりし初したのが耳に入つたので、伏目になつて奥へ行かうとして、闘を蹈み越えた時最後の式が終つて、カテリーナは臨終の床の傍へ行つた。老僧は歸り支度をして、立ちぎはに一と言二タ言慰めると、

『如何なるんでせう、此の兒達は？』とカテリーナは兒供を指して云つた。

『神樣のお慈悲があります、何事もな、上帝の御力に御縋りなさい。』

『神樣が洟も引掛けて下さるもんですか。』

『そりや不可、不可。そんな事は云はんもんぢや。』と老僧は首を振つた。

『云はなくたつて貴僧、之を御覽なさい！』とカテリーナは死に掛つてる良人を指さした。

『先ァ〳〵そんな事を云はんでもナ、不慮の間違を出來した過失者が稼人を

失くした貴婦の損害を賠償して呉れますワ、』

『解らないネ、貴僧も、』とカテリーナは手を掉りながら、『稼人を失くした損害ですッて？　此の飲んだくれが稼人ですッて！　稼人どころですかエ、散三妾たちを痛い目に會はして零落のドン底まで突落した外には何一つ仕出來した事は無い。家内中のものを洗ひざらひ飲んぢやつて、妾たちを素裸にしちまつて、お庇で兒供達までが好い憂目を見ました。死んで呉れた方が幸福なんで、少とも損害な事があるもんですか。』

『先ァ〳〵、死ぬ間際には免してやるもんぢや。そんな事を考へるのは良くない、罪ぢや。』

カテリーナは再び良人の側へ來て、額の汗と血を拭取つてから末期の水を與へて、枕を平らにした。

『夫りやァ貴僧、口で云ふ分には何でもないが、免してやれと仰しやつたッて、』とカテリーナは焦らく〳〵しながら、『之が平生のやうに飲んだくれて、怪我をしないで歸つたので御覽じろ、汚して來た衣服を兒供のと一緒に洗濯して、此の夜長の一と晩中、乾くまではマンヂリともしないで、明るくなると直ぐ窗へ行つて、破綻を縫つたり穴を塞いだりするのが、妾の毎晩のお役でしたワ。如此なに辛められても矢張貴僧は免してやれと仰しやるの！』

餓に咳込んで來たのでカテリーナは言葉を途切らし、仕方がなしに片手で咽喉を抑へて、片手で手巾を口に當てがつた。漸と治まつてから、手巾を取つて牧師に出して見せると、血がベットリ着いてゐた。牧師は顔を外けて何とも言はなかつた。

マルメラードフは愈々末期の大苦痛に呻き、身を屈めて其上に伸蒐る妻を屹と凝視め、何か物言ひたさうに唇を顫はして、判然聞取れない聲を洩らした。カテリーナは良人が末期の際に免して呉れと云ひたいのだと直ぐ悟つたが、突慳貪に厲々しく、

『靜かにしてらッしやい！　何にも云ふ事ァない。貴郎の云ひたい事は能ウく知つてますよ。』

死掛つてる良人は最う觀念して了つて、此上如何しようといふ氣もなかつ

たらしいが、軈て四方をウロ〳〵見廻す眼が、不斗扉口に近く立つてる娘のソーニヤに留つた。火影になつて判然解らなかつたので、『ありや誰だ？』と重たい嗄れ聲で云ひつゝ恐怖の色を浮べ、嶮しい眼を光らして娘の立つてる方角を屹と凝視めた。

『凝焉としてらッしやいてば？』とカテリーナは叱つた。

が、一生懸命に起上らうと跪きつゝ、屹と眼を据ゑて娘を凝視めた。看慣れないケバ〳〵しい服裝だから、初めは誰だか解らなかつたが、其中に、小こい面に最も深い哀愁を刻んで、臨終の父に暇乞をしようとして悄然と立つてる娘の顏に偶つと氣が付き、

『お、ソーニヤか、娘か？　勘辨して呉れ！』と我を忘れて伸上つて娘の手を執らうとした。が、力が入らないでガックリ背後に倒れ、頭が長椅子を外れて下へ落ちさうになつた。周章てゝ衆人で抱上げて再び長椅子に臥かしたが、其時愈々臨終が近づいたので、ソーニヤは細い聲を揚げて、駈寄つて縋り付くと、夫れなり娘に抱へられたなりに息を引取つて了つた。

『死んだ！』と、カテリーナは良人の遺骸を見てワッと泣聲を揚げた。『如何しよう？　如何して葬らう？　如何して兒供を育てよう？』

『奥さん、心配なさらんが宜い。』と、ラスコーリニコフは靜かに其傍へ行つて、『我輩は先週初めて御主人にお目に掛つたのだが、色々と身の上話から今日の御事情まで悉しく伺つてる。貴姐を非常に尊敬して話してをられたのは我輩が證言します。お氣の毒な事には意思が弱かつたが、御家族の事を心配し、殊に貴姐を大切に思つて、慚愧悔恨して御自分を責めてをられたのは初めてお目に掛つた瞬間に直ぐ解りました。そこで、唯ッた一回のお親昵ではあるが、一見舊知の如くなつたのも何かの因緣であらうから、甚だ失禮では あるが、死んだ友人の爲め聊か義務の一端を盡させて戴きたい。爰に二十留ある、此の金子が若しお役に立つなら、何卒貰つて下さい。我輩は――イヤ――左に右く復た明日出直しませう。明日、間違ひなく明日、大抵明日。夫れぢやァ今晩は之で失禮します！』

と　急いで部屋を飛出し、見物人を押分けて階段まで來ると、此の變事を

聞いて急いで駈付けて來た警部のニコヂーム・ホミーチと、出合頭に直と顏を合はした。警察署以來初めてゞあるが、直ぐ憶出して、『やア、之は。』

『死んぢまつた、』とラスコーリニコフは云つた、『醫者も呼んだし、僧侶も來たし、一と通りは濟んぢまつたが、寡婦さんが痛く愁傷してをるから、心配しないやうに出來るだけ慰めて遣り給へ。君の親切は我輩も知つてる、』と對手の眼を直と視て微笑した。

『おウ、血が附いてる、』とホミーチは燈火の光でラスコーリニコフの胴衣の生々しい血痕を發見けて云つた。

『血だらけだ！』と變な眼をして輕く云ひながら、ニッと笑つて合點しつゝ階段を降りて行つた。

が、格別急がうとしないで、悠々と靜かに降りて行つた。一端宣告された罪人が不意に特赦になつた時と同じやうな感じ、新らしい生活が俄に展開したやうな氣持がしつゝ、彼これ半分ほど降りた時、踵から來た牧師が追付いたので、互に目禮しながらラスコーリニコフが道を避けると、牧師は會釋し

て先きへ行つて了つた。聽て愈々降り切らうとした時、背後から呼掛ける者があつた。小さい娘のボーレニカで、『貴郎、貴郎！』

振向いて見ると、痩せてゐるが可愛らしい顏をした女の子で、面白相に階段の欄干に攫まつて辷り降りながら莞爾々々して、『貴郎の名は何てエの――何處に在るの？』

ラスコーリニコフは兩手を娘の肩に置いて嬉しさうに顏を見た。何とはなしに恁んな事をするのが樂しかつたので、『誰に吩咐かつて來たエ？』

『ソーニャ姉さんに、』と猶だ莞爾々々してゐた。

『然うだらうと思つた。』

『母さんも然う云つたのよ。姉さんが妾に吩咐けた時、母さんも「然うだつた、急いで訊いといで」ッて。』

『お前は姉さんが好きかい？』

『誰よりも一番好きなの、』と娘は力を入れて云つた。笑顏は段々消えて眞摯になつて了つた。

『私を好きにならないかい？』

兒供は何とも云はずに眤と摺寄つて來て、ラスコーリニコフに接吻しようと豐滿した唇を無邪氣に突出し、箸のやうな細い腕で嚙りつき、力一杯に搾めつけ搾めつけシクシクと泣出した。暫らくしてから、『妾の可哀さうな父さん！』と云つて、片手で涙を拭いた。

『父さんはお前を可愛がつたかい？』

『父さんはネ、妾達の中で誰よりもリードチカを一番可愛がつてたの』と眞面目に笑ひもせずに、『リードチカはネ、一番小さくて弱いもんだから。そいでネ、一番可愛がつて、いつでもお土產を買つて來るの。其代り妾達には聖書と文法を敎エて呉れたの？』と高慢さうに、『母さんは何とも云はなかつたけんど、妾達は能く知つてるの、父さんも知つてるの、母さんは大變喜んでたのよ。そいでネ、母さんは妾達にネ、餘所のお孃さんのやうに佛蘭西語のお稽古をさせたがつてゝよ。』

『お前はお祈禱をする事を知つてるかい？』

『知つてるワ、既くの昔しからお祈禱してゐてよ。コーリヤと リードチカと二人して母さんと一緒に大きな聲で、一番初めに「處女マリヤに」ッての、そいから「神樣、妾達の一番大切な姉さんのソーニャを憫んで惠を垂れ給へ」ッての、そいから今度は「神樣、妾達の先の父さんを惠ませ給へ」ッて云ふの。先の父さんは死んぢやつて、今のは二度目のよ。今の父さんの爲めにも矢張お祈禱するのよ。』

『ボーリヤ、私の名はロヂオンてのだが、お前がお祈禱をする時、私の爲めにもお祈禱をしてお呉れな ——之だけ賴むから。』

『做て上げるワ、妾、一生貴郎の爲めにお祈禱するワ、』と斷乎云つて嫣然と笑ひながら復た嚙り附いた。

ラスコーリニコフは名前と住居を明かして、復た明日來ると約束した。兒供はイソ〳〵喜んで去つた。軈て道路へ出た時は丁度十一時で、五分經たぬ間に以前の橋 ——投身者らしいものに出會つた例の橋まで來ると、

『最う大丈夫！』と屹と覺悟の體で、『死神！ 恐怖！ 幻影！ みんな消え

て失くなれ！　之がライフてもんだ。全體俺は尙だ活きてるのか知らん。老婆の生命と一緒に消えて失くなつちやつたんぢやないかナ。イヤ、最う大丈夫だ。之からは道理と光明の時代、意思の時代、力の時代、自ら試みて自ら測らにやならぬ。』と得々として云つた。で、或る模糊とした覺悟が浮んで來たのを考へつゝ、『どうやら足の踏臺を固めて生延びる氣になつたらしい。何だか尙だ危ッかしいが、何しろ病氣は最う全快したらしい。外出ける時から恁うなるだらうと解つてゐたんだ。どりやラズーミヒンの奴を訪ねてやらうかナ。直ぐ其處だ。弄られに行くやうなもんだが、弄るなら弄らしとけ、何でも無い。力だ！　力が肝腎だ！　力が無いと何にも出來ぬ。力が力を生み出すのだが、之が渠奴らに解らんのだ。』と獨りで得意になつて慢り顏に獨語ちつ、足元輕く橋を渡つて了つた。で、心は平らに沈着いて安心の念が充滿て來た。が、何が原因で如此なに俄に元氣付いて氣が舒々して來たか、自分でも判然解らぬが、何しろ最つと生延びんけりやならぬ、猶だ〳〵壽命がある、老婆と一緒に死んで了つたのぢや無いといふ氣がした。

事に由ると、或は一足飛に無茶に覺悟を決めて了つたので、例へば大海に漂ふて一本の藁に攝まつたやうなもんかも知れぬが、何うでも關はぬ、そんな事は全然考へないで、舒々した好い氣持になつてラズーミヒンの下宿を搜した。直ぐ解つて家番に案内して貰ふと、階段からガヤ〳〵した多勢の話聲や笑聲が聞え、扉は一杯に排いてゐて、可成廣い室に彼是れ二十五人も在るらしいので、扉口で鳥渡躊躇つた。二人の女中は茶や菓子や酒のお酌で忙がしさうで、ごたくさ取込んでゐるので、窃と扉口までラズーミヒンを呼出して貰ふと、周章てゝ飛んで出て來たが、平生から醉つた素振を減多に見せない男が、一見して平日になく過したのが判然解るほど醉潰れてゐた。

『君に負けたのを鳥渡云ひに來たんで、仲間入は御免蒙る。何だか勞れッちやつて直ぐ倒れさうだ。夫れぢやア失敬する。明日來て呉れんかい？』

『そんなに勞れてちやア險呑だから送つてやらう。』

『先アお客を周旋つが宜い。アノ此方を向いてる奴は誰だい？』

『あれか？　誰だか知らんよ――伯父貴の友達だらう。伯父貴は好い爺さん

だぜ。座敷へ鳥渡來て呉れると紹介するんだが、殘念だ。だが君、心配せんでも宜い。客なんぞは構はんよ。是非君を送つて行かう。が、待て、ゾシーモフを呼んで來るから。』

ゾシーモフは沈着冷まして出て來たが、ラスコーリニコフを見ると怪訝な顔をして、『睡てゐなけりや不可ナ、』と病人を凝と視、『散藥を上げますからお服みなさい ——丁度持合はしてる。』

『承知しました。』とラスコーリニコフは答へた。

『然うさナア、送つて行つた方が宜からう。』とゾシーモフはラズーミヒンに向つて、『明日は如何なるか解らんが、何しろ今日は餘程快ささうだ。非常に變つて來た。』

道路へ出るや否、ラズーミヒンは、『君は氣が付いたかエ？ 出際にゾシーモフが僕に耳打ちしたのを、』と云つた。『多勢馬鹿が在たから何にも云はずに出ッちやつたが、ゾシーモフの奴め、道々種々な話をし掛けて君に口を開かせて見ろッて僕を使嗾けるんだ。君を瘋癲か、左もなくとも瘋癲に近いと思

つてるんだ。馬鹿々々しくて話にならない。第一、君と渠奴とは智力の差が二倍以上も違ふ。そんな馬鹿けた診斷をされて瑕瑾をつけられるやうな頓馬ぢやない。あの大馬鹿野郎の竹の子醫者めが精神病の事が解りもせんくせに、君が水晶宮でザミョートフを嚇かした話を聞くと直ぐ、早呑込で精神病と定めッちまやがつた。』

『ふウむ、ザミョートフが話したかい？』

『話したよ、委しく話して聞かした。あれで漸く君の心持が一々能ウく會得めた。ザミョートフにだつて解つたらう。一言して云やア —— 僕ア少と醉つてるがネ、醉つてたつて何でも無い。ツマリ君は下らん事を神經に病んでるんだネ。誰だつて高い聲で話すものがあるぢやなし、あんな話が何時まで續くもんか。早い咄が、ペンキ屋を引張つて來たは宜いが、直ぐ事實が明白になつて疑が晴れッちまうなんて、こんな笞棒な咄があるかい。能く能くの馬鹿が揃ひも揃つたもんだ！ 餘り馬鹿々々しいから實はザミョートフに一本參つて遣つた、——尤もお互ひ同志の之ッきりの咄だがネ。——どうも渠奴、誰かに

教唆られてゐんぢやないかと思つたが、今日漸と解つた、あのイリヤー・ペトローウチの野郎が發頭人なんだ。君が警察で氣絶した時、彼奴めが生憎居合はしたもんだからナ。』と躊躇しながらラズーミヒンが語るを、ラスコーリニコフは一心に耳傾けてゐた。

『ペンキの臭ひがしたり、空氣が籠つてゐたから氣絶したんだ。』

『無論然うだが、ペンキばかりでも無さゝうだぜ。ゾシーモフの說だと一ト月も前から絡んでる熱だつて云ふからナ。……おッ、然う〳〵、水晶宮ぢや巧くザミョートフを論破けたナ。思切つて出鱈目を陳べて嚇かしつけたナ。金子まで出して見せびらかしたのは大出來だ。痛快極まつてる。ザミョートフの呆れた面が見てやりたかつた。ザミョートフと云やァ、渠奴も君が來るのを待つてゐた。ポルフィーリーも會ひたがつてたッけ。』

『何だい、待つてゐる會ひたがつてるのと、そんなら何故我輩を瘋癲扱ひするんだ？』

『斷乎瘋癲と言切つたわけぢやァ無い。僕の咄は開放し過ぎたかも知れんが

ネ。何しろ非常に會ひたがつてゐんだ。醉つてゐるから不意口が滑るが、先ァ其邊の見當らしいナ。』

『ラズーミヒン、我輩はナ、』と良やあつてラスコーリニコフは、『何でも眞直に表白けッちまふが、實は今、或る官吏の敗殘者が馬車に轢かれた處へ遭逢はした。見るに忍びんので家まで送り屆けて、持つてる金子を悉皆吳れて了つたが、其家で、生命を取つて遣りたい位な可愛いゝ奴に邂逅つた、焰えるやうな紅い鳥羽を着けた奴だ。考へると我輩も餘程な馬鹿サ。……あッ、抑へて吳れ、倒れさうだ。……や、最う自家の階段へ來ちやつた。』

『オイ、如何した？』とラズーミヒンは喫驚して了つた。

『頭が少とぐら〳〵して來たんで、最う何とも無い。其の事件の爲でも何でもないんだが、如何にも其女が不便で可哀相でならん。やッ、何だ、ありや何だ？、見ろ！』

『何……何だつて』

『見えんかい？　我輩の部屋へ燈光が點いてる！　見ろ！』と二人は階段の

半ばを登つて主婦の部屋の邊で佇立つた。成程、ラスコーリニコフの部屋には燈光が點いてゐた。

『變だナ！　が、何、ナスターシャだよ、』とラズーミヒンは云つた。

『いゝんや、ナスターシャが今頃來てゐるもんか。既くの昔し臥て了つてるサ。ぢやア失敬する！』

『部屋まで送らうぢやないか。さア……。』

『いゝんや……　爰で手を握つて別れた方が我輩の勝手だ。さッ、手を出せ。失敬しよう。』

『復た如何かしたナ？』

『如何もしない。が、そんなに來たけりや、見屆け役になるが宜いサ。』

と一緒に階段を登り初したが、ラズーミヒンは結局ゾシーモフの言ふ通だと思ひながら、『老婆殺しの話で復た顚倒させッちやつたか知らん、』と肚裡で考へ〳〵扉口まで來ると、部屋の中から話し聲が洩れた。

『はてナ、誰だらう？』とラズーミヒンは號んだ。

ラスコーリニコフは束々と進んで、突如扉を排けると、思掛けない鄕里の母と妹が長椅子に列んで、小半晌も前から待ち草臥れてゐたには偏と呆氣に取られた。愈々近々來ると現に此日にも聞いてながら、二人の事を全然念頭に置かなかつたのか知らん？

二人が三十分も待つてる間、ナスターシャは附き切で款待して、ラスコーリニコフの近狀を洗ひざらひ自分の內々の憶測までを附加にして盡く饒舌つて了つた。ッイ先刻も病氣で臥てゐたくせに突然何處へか飛出しちまつて今だに戻つて來ないと聞いた時は、母も妹も喫驚して、『先ァ！　如何したんだらう？』と泣いて、此の不安な三十分間をオド〳〵心配してゐた。

處へラスコーリニコフが歸つて來たから、二人は狂喜して聲を上げて我知らず駈寄つた。ラスコーリニコフは俄に石のやうに立縮んぢまつて、不意に妙な考がムラ〳〵ッとして、身柱元から脊筋まで慄然と身震ひした。で、二人を抱かうとしても手が言ふ事を諾かなくなつて了つたが、母と妹は右左から腕を廣げて抱付いて、泣いたり笑つたりして接吻した。軈てラスコーリニ

コフは一と足前へ出たかと思ふと、俄に顔色が變つて、見る〳〵氣が遠くなつてバツタリ倒れた。扉口に立つてゐたラズーミヒンは慌てゝ駈寄つて抱起し、節くれ立つた腕で抱へて長椅子に臥かしつけたが、母娘は喫驚して泣いたり叫いたりして騒いだ。

『何でも無い、何でも無い！』とラズーミヒンは一同の騒ぐのを制して、『なアに、唯の一時の氣絶だ。早く水を！　水を！　直ぐ正氣になる。醫者が然う言つてた。』

と云ひつゝヅーニヤの手を取つて引寄せてラスコーリニコフが正氣に戻るのを見せようとした。母も娘も神の引合せのやうに難有がつてラズーミヒンの顔を見た。ラズーミヒンの事はナスターシヤから四方山の咄の序に、ラスコーリニコフの病中附切で世話をした「快濶な若いお方」と吹聴されて最う知つてゐた。

第三篇

第一回

ラスコーリニコフは半分身を起して臥榻に座つた。で、ラズーミヒンが水の流れるやうにチヤホヤ辯じ立てるのを輕い身振で打切つてから、母と妹の手を把りつゝ、何にも云はずに一人から一人へと、たつぷり二分間互代りに眸ツと凝視めた。不安と哀しみの表情が固定してゐる外に、憑物でもした如な凄い顔をしてゐたので、母親のブリヘーリヤ・アレキサンドローウナは恐ろしさに聲を揚げて泣き、妹のアフドーチヤ・ロマーノウナも顔色變へて、其手を兄の手の上に置きつゝ戰かした。

『宿へお引取んなさい――此男と一緒に、』とラズーミヒンを指しつゝ調子外れの聲で、『明日再た來る事にしてお歸んなさい。それから……おッ、何時著きました？』

『今著いたばかり、汽車が延着したもんだから。だが、ローヂヤ、妾や迚も

お前を放棄つとかれないから、今夜は泊つて看病しませう。』

『我輩を苦めて呉れる勿！』とラスコーリニコフは焦り〳〵した。

『僕も泊つてかう、』とラズーミヒンは勇み立つて、『一分間と離れちやをられん。自家のお客は各自勝手に遊んでくだらう。怒るなら怒つても宜い。伯父貴がゐるから、如才なく行つて呉れるだらう。』

『眞個に貴君にはお禮の申上げやうも無い、』と母親は再びラスコーリニコフの手を握つて言掛けると、

『不可、不可、』とラスコーリニコフは苦なさうな聲を振染つて、『我輩を苦めちや不可てに。唯つた今直ぐ歸つて呉れ。最う辛抱がならん。』

『歸りませう、母さん』とゾーニヤは心配して耳語いた。『何しろ今ん處は歸りませうぢや無いか。妾達が在ると餘計兄さんを苦めるから。』

『三年も會はずにゐて、一分間も一緒にゐられないのかネ？』と母親は情なさ〻うな聲をした。

『お待ちなさい、』とラスコーリニコフは、『餘計な事ばッかり云ふもんだから、

肝腎訊かうと思つた事を忘れる處だつた。お母さんはルージンに會ひましたかい？』

『否、尙だ會はないがネ、妾達の著いたのは最う知つてゐて、今日親切にお前を尋ねて呉れたつて言傳があつたよ。』と母親は恐々云つた。

『親切に尋ねて呉れたから、ゾーニヤ、我輩は最少し前に、階段から蹴飛ばすぞと呼りつけてやつた。那樣な奴は七里ケツバイだ。』

『何だとエ？　お前先ア、眞個に先ア、飛んでもない事を云つて、』と母親は怖々しながらゾーニヤをジロリと見て口を途切らした。

ゾーニヤは眼ッと眼を据ゑて兄の顏を視つゝ、委しい話が猶ほ聞きたさうだつた。ルージンとの衝突は、何でも利口振つて吹聽するナスターシヤの端多ない口から既くに聞いてゐたので、母娘はギクリとした。

『ゾーニヤ、』とラスコーリニコフは聲を勵まして、『お前の結婚は承知出來んから、明日はキツパリ謝絕つちまつて、己等の前で二度と再び彼奴の名を云つちやアならんぞ。』

『先ァ！』と母親は聲を揚げた

『兄さん、何ですつて？　能ウく考へてから仰しやいよ。』とゾーニャは勃然となつたが、思直して氣を靜めて、溫和しく、『餘程如何かしてらつしやるワネ、――貴兄、疲れてらつしやるんでせう？』

『己等の心持がフワ〳〵動いてるとでも思つたら大間違ひだぞ。お前は己等の爲めに結婚する意だらうが、开んな犧牲を受ける己等ぢやないから、明日は手紙を遣つて破談にして了へ。其意で明日の朝謝絕手紙を持つて來て見せな。それで悉皆落著が着いちまう。』

『そんな事ァ出來ません！』とゾーニャは面白くない顏をして、『兄さんは何ういふ權利で……』

『何だネ、ゾーネチカ、お前までが勃然になつて。开んな話は明日に做ようぢやないか　お前はァノ……』と怖々した母親はモグ〳〵しながら娘の傍へ寄つて、『歸らうぢやないか、夫れが一番らしい。』

『本氣ぢや無い！』とラズーミヒンは酒の醉を裏切する縺れ舌で、『でなきや

ァ开んな……何ァに、明日になりやァ、復た本性になるだらう。だが、お母さん、ローヂャがルージンに出て行けッて喧嘩を吹掛けたのは眞實で、ルージン君も大いに立腹して、ヘタクタ理窟を凝ねて文句を列べたが、到頭尻毛を捲いて逃けッちまひましたよ。』

『ぢやァ眞實なんですかい？』と母親は喫驚して了つた。

『ぢやァ兄さん、再た明日、』とゾーニャは氣の毒さうな聲で、『母さん、歸りませうぢやないか。兄さん、さよなら。』

『己等はナ、ゾーニャ、』とラスコーリニコフは最後の駄目を推した。『お前にや何う見えるか知らんが、己等は錯亂しても氣が觸れてもゐない。此結婚が恥辱だから云ふんだ。尤も己等には恥になつても、お前までが――ていふ理窟は無い筈だが、何しろ折角だがお前の親切は斷る。夫れでも猶ほ恁んな怪しからん結婚をする氣なら、祿でなし無氣力漢の己等でもお前を妹にしとく事は出來んからナ、己等に從ふか、ルージンに從ふか、何方ともお前の勝手にしろ。さッ、夫れで宜いから最う行きなさい。』

『何うかしちやつたナ。飛んでも無いお代官だー』とラズーミヒンは叫りつけた。

ラスコーリニコフは返事もしなかつた。最う返事をするだけの氣力が失くなつたので、疲勞し切つて長椅子に倒れて壁の方を向いて了つた。ヅーニヤは何か訊きたげな容子で、活き〳〵した眼を睜つてラズーミヒンを睨ッと凝視めると、ジロリと見られた途端にラズーミヒンは周章して了つた。母親は怖々と胸一杯になつて、

『妾や如何しても歸られない、』とラズーミヒンへ聞えよがしに落膽半分獨語ちてから、『妾や悴の傍で何處かに泊りますから、憚りですが、娘だけお伴れすつて。』

『全で破壞しだ、』とラズーミヒンは精も根も盡きて了つて、同じやうに低い聲で、『何しろ引取りませうぢやないか。ナスターシヤ、燭火を持つて來な。』と一同廊下へ出てから、呼吸を潛めて、『唯ッた今も既の事、醫者と僕を毆りさうにしたので。醫者にさへ夫れだから……お察しなさい。第一、あの宿へ

は若い御婦人を迚も一人ぢや置かれませんよ。大變な家ですぜ、貴姐方に相當した最少し上等な家が有りさうなもんだに、擇りに擇つて恁んな下等な宿を取つとくッて奴があるもんか、ルージンの彥德野郎め……やッ、失敬な事を云つちやつた。少と喰べ醉つてますから、何卒其のお意で、不慮口が滑つて失敬しちやつた……』

『イヽエ、貴君、』とプリヘーリヤは氣にも留めないで、『ですけれども妾や此家のお主婦さんに會つて、ヅーニヤと妾を何處かへ泊めて貰はうかと思つてます。那樣な容子ぢや放棄つちや置かれませんからネ。』

丁度主婦の部屋の外へ來た時此事を發言したので、ナスターシヤは燭光を持つて階段の一番下に立つてゐた。ラズーミヒンは全で有頂天に逆上せてゐた。三十分前ラスコーリニコフを伴れて戻つた時は、最つと盛んに饒舌つてゐても尙だ正氣で、宵の口から飲續けたにも似ず頭腦が明瞭してゐたが、徐〻醉が廻つて來たと見えて、頗る斜めならざる大御機嫌で、兩個の婦人の手を把つて、圓轉滑脫そろりそろりと說伏せようとし、眼を据ゑてヅーニヤの

顔ばかり見ながら、一語々々に力を入れては母子の指を一々キユウと握り緊めた。其度毎に痛くて痛くて堪らんので、骨太の大きな手の中に握られた指を振放さうとしても、一向關はずに愈々強く握り緊めて、對手の痛がるのを少しも推想らなかつた。此場合、若しプリヘーリヤ母娘が逆さまに蜻蛉返りをして見せろとでも所望したなら、直ぐ喜んで行りかねまじき勢ひで、如何にも亂暴な人間らしく思はれたので、手を握られてるのが恐ろしいやうな氣もした。が、母親は矢張ローヂヤの事が氣になるので、酒興に乘じた奇怪な擧動には眼を閉つて、此の粗暴漢のヤンチヤを不思議な神の引合せでもあるやうに頼もしく思つた。

ゾーニヤは母の心配を察してゐた。が、夫れほど氣の小さい天性では無いが、恁うしげ〳〵と傍若無人に穴の明くほど顔を見られてると、無氣味になつて不安な心持さへした。ナスターシヤから吹込まれて無限の信用を此變人に置かなかつたなら、即時に振踵つて母と一緒に逃出したかも知れない。が、此際此男が在ないと如何にもならぬと考へた外に、十分經つか經た

ぬに、漸と安心出來たのは、如何程狂態を盡してゐても、率となると本色が出て本心が解つたからだ。

『そんな事を主婦に頼むなんて所爲はお罷しなさい。夫れこそ馬鹿々々しい骨頂です、』とラズーミヒンは言下に母親に向つて、『貴姐はローヂヤのお母さんでも、爰に在らッしやりやア病人を募らせるだけだ。何うならうとも天が照覽してゐる。玆ン處は先ア僕の言ふ通りに委して下さい。貴姐方をお送りする間はナスターシヤが附いてますから安心してらッしやい。ペテルブルグでは御婦人ばかりの夜行は少と危險だから、左に右く無事にお送りしてから直ぐ爰へ引返して、ローヂヤはどんな鹽梅だか、首尾能く就眠いたか何うかを見屆けて、十五分間内に必ず御報知する事にしませう。それから其足で直ぐ吾家へ一とッ走りして……實は今夜は客が來て飲んでるんで、ローヂヤの主治醫のゾシーモフも來てゐますから――此奴は下戸で、飲酒黨の仲間へ入つてゐても酔つてる氣遣ひは無いから、此ゾシーモフを下宿へ伴れてつて、病人を診せてから直ぐ其足で貴姐の許へ一緒に伺ひませう。すれば一時間の

内に、先づ第一には僕の、次には僕のよりは有力な醫者のと、二度の報告を受けるわけで、若し容體が悪けりや其時は必ずお迎へに來るし、快ければ快いで安心してお臥せりになれる。そこで僕は、病人に知れないやうに廊下か何處かで一と晩不寢の番をする。夫れから萬一の時の用意に、主婦に談じてゾシーモフの寢床を拵へさせませう。醫者が夜伽をすりやァ此位安心な事は無い。貴姐方が泊るよりか餘程優しだから安心してお歸んなさい。主婦に頼んだ處で、貴姐方の寢所の心配は做て呉れますまい。僕なら泊めるが、貴姐方は迚も駄目だ、つてのは、彼女は呆れ返つた馬鹿女——お話しにならない馬鹿女で、僕の口からは少と言憎いが、實は其の——笑つちや不可ませんぜ——彼女は餘程な馬鹿女で、實は——何だか言憎いが、實は——笑つちや不可ませんぜ、實は僕に戀ッてるんです。眞實！　眞實だから笑止しい。呆れて咄しにならんが、然ういふわけだから貴姐方が見えたのが少妬で——怒つちや不可ませんよ——殊にァフドーチャ・ロマーノウナのやうな若い御婦人だと妬けて妬けて堪らんので、餘程梃變な笑止しい奴です。無論僕だつて實際

白狀すりやァ馬鹿です。馬鹿も馬鹿も隨分な大馬鹿ですが、恁ういふわけなんだから、今夜は此儘お引取んなさい。さッ、行きませう。それとも僕の云ふ事を信じて下さらんか。何うなさる？』

『行かっぢやありませんか、母さん』とゾーニャは云つた。『必と此の方は約束通り做て下さるワ。兄さんがお世話になつてるんだもの。夫れにお醫者樣に泊つて戴けりや何よりだワ。そんな幸福な事はないワ。』

『僕の云ふ事が貴孃には解りましたネ、實に神の使だ！』とラズーミヒンは夢中になつて、『さァ、お伴しませう。ナスターシャ、お前は御苦勞だが直ぐ病人の傍へ行つて呉れ。十五分の内に戻つて來るからナ。』

母親のプリヘーリヤは猶だトックリと腑に落ちなかつたが、此上故障を云はなかつた。ラズーミヒンは母娘の腕を緊乎と抱へて半分引摺るやうに階段を下りた。母親は猶だ不安心で堪らず、『一生懸命出來るだけ心配して呉れる意でゐても、この容子ぢやァ少とも恃になりやしない、』と内心窃に危ぶんでゐた。此心持をラズーミヒンは早くも氣取つて、

『貴姐は僕が醉つてると思つてらつしやるナ、』と一緒に引摺られて行く母娘の迷惑を何とも思はないで、石甃を蹌蹌縫ひながら、『そんな御心配は御無用です。成程僕は飲んでます。猩々そこのけッてくらゐ飲んでます。けれども僕の頭を有頂天にしたのは酒ぢや無い。實は貴姐方を一と目見た途端ドキッとしたんで、――氣に掛けちやァ不可ませんよ、管を卷いてるんだから。僕がカラキシ小僧で、貴姐方のお對手にならんのは能ウく知つてるから、安心してらッしやい。貴姐方を無事にお宿へお送りして置いてから、直ぐ傍の運河で、釣瓶に二三杯も水を浴びりやァ僕の逆上は直ぐ下つちまひまさあ。左に右く僕が貴姐方をどれほど親愛してゐるかを理解してさへ下さりや宜いんで。笑つちや不可ませんよ。と云つて、怒られちや猶ほうまらない。怒るなら他の奴にして、僕だけには何卒怒らんで下さい。ローザの友達なら貴姐方にも矢張友達になりたいッてのが、僕の希望です。奇妙なもんで、貴姐方が天から降つて來たやうに入來しつたのを、チャンと前から蟲が知らしてゐたから不測でせう。何しろ今夜は不寢の番をして一睡もしません。ゾシーモフが癲

狂にならんけりや宜いがと心配してましたから、そこで成るべく逆らはんやうにしないと不可のです。』

『何ですッて？』と母親は思はず聲を出した。

『开んな事をお醫者樣が仰しやつて？』とゾーニャも喫驚して了つた。

『云ひました。云ひました事は云ひましたが、誤診です、無論誤診です。丁度散藥を呉れた處へ、貴姐方がお着きになつたんで。明日になりや必と快くなります。左に右く引上げて來て好い事をしました。追付けゾシーモフが來たら詳しくお咄ししませう。彼奴は醉しませんから確かで、其時分には僕だつて覺めて正氣になつてます。全體如此なに興奮しちまつたのは、馬鹿野郎達を對手に大議論をやつたお庇で、最うく那樣な奴らと議論をするのは懲りくしました。タワイも無い下らん愚說を吐く奴らで、既の事咽喉を締めて呉れやうかと思つた位で、ローザが來たのを好機會に伯父貴に預けて逃出して來ましたが、全然お咄しにならん。全で個性の無い奴らで、個性を失くしちまうのを大變な進歩だと思つてる。それも自分の頭から產出したなら